ウルトラリリカルキュアファイト《リメイク》

JINISH

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

時空の歪みによってプリキュアの世界に訪れた光の巨人ウルトラマンゼロ。

その世界で数々の闇の存在立ち向かった伝説の戦士プリキュアと出会う。

そして、その世界でゼロ以外のウルトラマンと再会し、新たに誕生したプリキュアと出会う。

闇の支配者ガタノゾーアとの死闘を終え、一先ず脅威は去ったが、未だ解決していない災いを対面することになる。

そして、プリキュアの世界で新たな出会いが訪れる。

注：これは『ウルトラリリカルキュアファイト』のリメイクの為、内容が違うので悪しからず。

目次

プロローグ ―― 1
異世界の魔導士 ―― 5
ＶＳマガバッサー ―― 15
歪みより現れし魔物 ―― 24
フレフレ！キラヤバ～な、お手当スタート！ ―― 32
地底の戦士と星の乙女 ―― 41
ＶＳマガジャッパ ―― 50
ユグドラシルの残党 ―― 59
ユグドラシルの反撃 ―― 68
氷と水の剣士、キュアネッシー誕生！ ―― 78
真理奈の過ち ―― 87
ＶＳマガグランドキング＆マガパンドン ―― 95
二体の悪魔 ―― 104
生誕！金木犀のキュアランスロット ―― 113
ＶＳカオスウルトラマンカラミティ ―― 122
青とピンクの速き来訪者 ―― 132
ＶＳゼッパンドン ―― 142
お知らせ ―― 150
スピカ＆ネッシー＆ランスロット　プロフィール ―― 152
四人の魔導士 ―― 156
妖精学校の問題児 ―― 166
恐るべき捕食者 ―― 175

プロローグ

ルルイエでウルトラ戦士やプリキュア達がガタノゾーアと激戦を繰り広げられているその頃、ホープキングダムの郊外にある森の中で、彼らには知られていない戦いが起きていた。

「よっとぉっ！」

黒いエネルギー光弾が露出度の高い赤いシスター服を身に着けた橙色の髪の少女を襲うが、簡単に避けられる。

「クラウ・ソラス！」

ドレス調のスカートの正面が開いたデザインの服を身に着けた薄紫色の髪の少女は、黒いエネルギー光弾に対し、掌で形成した光弾で相殺する。

光弾が相殺され、土埃が蔓延したが、一瞬で取り払われる。

２人の少女の目先には、黒い翼が生え、ティガのプロテクターのような装飾を身に着けたプリキュアを連想する少女がいた。

おっと・・・まずその２人の少女の事を紹介しよう。

まず、薄紫色の少女はルーテシア・アルピーノ。

カルナージでホテルアルピーノを開設した嘱託魔導師である。

過去にナンバーズを率いるジェイル・スカリエッティとテロ行為を実行したことがある。

次に、橙色の髪の少女はシャンテ・アピニオン。

聖王教会修道騎士団のシスターをやっている。

インターミドルチャンピオンシップに出場したことがある。

「ふぇえ～、この子思ったより手強いねぇ～・・・」

「だね。けど、隙を付けられない相手じゃないね。」

ルーテシアとシャンテは目の前にいる謎の少女に彼方此方にクレーターができる程熾烈な戦いを繰り広げられていたが、最初はいきなり攻撃されたことに戸惑って後退していたが、途中から様子見に変わっていた為、苦戦してはいなかった。

謎の少女は荒い呼吸をしながらもルーテシアとシャンテを睨みつけている。

「それにしても、いきなりぶっぱしてきやがって！大体ナニモンだよ？」
「せめて名前くらい教えてもらいたいね。」
謎の少女はルーテシアとシャンテに自分は何者なのか、名前は何だと聞かれると、無意識に驚き、その後に何かを思い出そうとしてしかめっ面になったりしたが、その直後に首を横に強く振って、もう一度ルーテシアとシャンテに睨みつける。
「知るか！」
謎の少女は右手からスパークレンスを模した剣を召喚し、ルーテシアとシャンテに斬りかかろうとする。
シャンテはトンファー型の剣・ファンタズマで謎の少女の剣を受け止める。
「ドーデス・ドルヒ！」
ルーテシアは紫色の短剣を召喚し、それを謎の少女に射出する。
謎の少女はシャンテから離れ、それを躱す。
「チャーンス！双輪剣舞！」
「!?ガァッ!!」
謎の少女はルーテシアの攻撃により、大ダメージを受け、地面に叩き落とされ、そのまま気絶してしまう。
「へへーん。アンサンブルを使うまでもないかな？」
「でも、あの攻撃でジャケットが破れないなんて、見かけに寄らず頑丈ね。」
シャンテはファンタズマを振りましながら余裕の表情を浮かべる。
その一方、ルーテシアは謎の少女の服を不思議そうに見て感想を述べる。
「ま、起きたら色々聞かせようよ。あたし達がこの世界に来た事、何か知ってるかもしれないし。」
「そうだね。」
ルーテシアはシャンテの意見に同意し、謎の少女の肩を貸す。
「その娘、君達が倒したのかね？」
ルーテシアとシャンテは突如、男の声が耳に入り、後ろに振り向く

と、黒いコートの人物がいた。

その翌日、ルルイエでガタノゾーアを倒し、トランプ共和国で祝勝会を開いた今日この頃、トランプ共和国に革命を起こそうとする組織・ユグドラシルが本拠を構えた国・バラージ王国上空で空間の捻じれが発生し、そこから落下していくように、杖を持った小学生程のツインテールの少女と民族衣装を身に纏う少年が現れる。

少女は咄嗟に一緒にいる少年と共にピンクの光を纏わせ、落下速度を緩やかにする。

紹介を遅れたが、ツインテールの少女の名は高町なのは。

第９７管理外世界地球の出身の女の子で、〈ＰＴ事件〉、〈闇の書事件〉〈ＪＳ事件〉を解決に導いた3つの事件の立役者である。

時空管理局の戦技教導官を務めている。

そして民族衣装を纏った少年はユーノ・スクライア。

なのはと共にロストロギアの1つ〈ジュエルシード〉の回収をしていた魔法の先生。

今は無限書庫の司書を務めており、考古学者をやっている。

「何でこんな所にいるんだろう？確か、管理世界のデントで発掘調査をしたはずだよね？」

「うん。鉱山の奥まで行ってみたら見たことない神殿が見つけたと思ったら、急に空間が歪んで、気付いたらここに・・・」

なのはとユーノは今いるバラージ王国上空に来る前の経緯を整理する。

その後、なのははユーノの姿を見て驚く。

「・・・って、ユーノ君!?なんで小っちゃくなってるの!?」

「え？ん？えぇぇっ!?」

ユーノはなのはに言われて、自分の手を見たり、服装を見たりすると驚く。

「なんで子供の姿に!?・・・・ってなのは!?君まで!?」

「へ？え？ふえ、ふえええええええええええっ!!??」
なのははユーノに言われて、同じように見渡すと、ユーノ以上の大声で驚きの声を上げる。
「ど、ど、ど、どうして、どうして!? だ、だって！ 嘘!? ふえええええええっ!!??」
「な、なのは！とりあえず落ち着いて!?」
ユーノはなのはの混乱ぶりに何とか落ち着かせる。
「状況はよく分からないけど、一先ず本局に連絡しよう。」
ユーノは時空管理局本局に通信を試みるが、映像にＥＲＲＯＲと表示され、誰にも通信できなかった。
「!?通信できない!?」
「ええ!?」
ユーノは本局に通信できないことに戸惑う。
なのははそれを聞いて、自分も通信を行なおうとするが・・・
「フェイトちゃん！はやてちゃん！誰か応答して！ヴィヴィオ！」
ユーノの言う通り、通信できない状態になっていた。
その時、なのはとユーノの真上に巨大な影が通り過ぎていった。
「な、なに!?」
なのはとユーノは突然の出来事に驚く。
通り過ぎていった巨大な影は青い体をした巨大な翼を持つ生物だった。
「な、なんて巨大な!?」
「あんなのが町を襲ったら大変！」
「あっ!?なのは!?」
なのはは巨大生物を追い、ユーノはそんななのはを追う。

異世界の魔導士

トランプ共和国でユグドラシルとの戦いが幕を閉じ、ルルイエでガタノゾーアを打ち勝った事を称えて、プリキュア達とウルトラマン達は祝勝会を開いた。

祝勝会を終えた後、ウルトラマンゼロことモロボシ・シンはバルコニーに顔を出した。

そこにはクリシスがいた。

「よっ！」

「あ、シン。」

シンはクリシスの隣に立つ。

「ご苦労様だったね。バラージ王国の時も、ルルイエの時も。」

「あぁ。特にルルイエでの戦いはもうダメかと思ったぜ。クリシス、お前のおかげだ。」

「フフ、どういたしまして。」

クリシスはシンにお礼を述べられ、そう返事する。

しかし、クリシスは目の前の夜景を見たと思ったら浮かない顔をしていた。

「？どうした？」

「ねぇ、聞いてもいい？」

クリシスに質問されたシンは「なんだ？」と答える。

「君、別の宇宙から来たんだよね？ずっとこの世界にいたいとか思わないの？この世界に来てからお友達ができたし。妖精達が住んでいる世界も楽しい事ばかりだし。」

クリシスはシンにプリキュアの世界にいたいと思わないのかと尋ねる。

「・・・そうだな・・・」

シンはクリシスの質問に戸惑う。

「あいつらと別れるって考えると、ちょっと寂しくなるな。でも、俺はやっぱり元の世界に戻りたいって思ってる。あいつらには悪いけど、向こうには俺の仲間がいるし、故郷もある。それに、ここにいる間に

も別の世界で危機が迫っているのかもしれねぇ。あの邪神のような奴が他の世界で何かをおっぱじめるのかもしれねぇ。そんな世界を見過ごすわけにはいかねぇんだ。」

シンはクリシスの質問に対し、そのように答える。

「・・・そうだよね・・・」

クリシスは寂し気な表情で俯く。

「なんでそんな事を?」

「・・プリキュアがいる世界は時空の歪みで次々と怪獣が出て来てる。その問題を解決すると・・・多分、二度とシンと会えなくなる・・・」

「!」

シンはクリシスの返事に目を見開く。

「リコにも似たようなこと言ったな。けどな、それは永遠の別れじゃねぇ。プリキュアの皆が敵わねぇほど手強い奴が出てきたら、必ず駆けつけてくる。そう約束したんだ。二度となんてこたぁねぇよ。」

シンはクリシスを慰めるようにそう言う。

「・・・うん・・・でも・・・」

しかし、クリシスにはシンの慰めの言葉に受け止めなかった。

「!うっ!?ぐっ!」

クリシスは突然頭痛が起きて膝を付く。

「クリシス!?」

シンはクリシスを支えるように肩と腕を握る。

その時、湖上に空間の歪みが発生し、その歪みからシュモクザメのような外観をし、青白いゴツゴツした怪獣が現れる。

その怪獣の名は冷凍怪獣ラゴラス。

伊豆諸島に上陸して復活したグランゴンを一騎打ちした水棲怪獣である。

ウルトラマンマックスのスピードに翻弄され、最期にマクシウムカノンで敗れ去った。

「あいつはラゴラス!」

「うぅ・・・うぅ・・・!」

クリシスはまだ頭痛に苦しむ。

その時、ラゴラスの背後の陸上に空間の歪みが発生する。
その歪みから棘の付いた尻尾を持つ鉱物のような怪獣が姿を現す。
その怪獣の名は溶岩怪獣グランゴン。
龍厳岳の火山活動によって復活したラゴラスの宿敵である。
ラゴラス同様、マックスのスピードに翻弄され、最期にマクシウムカノンによって敗れ去る。
「今度はグランゴンかよ!」
ラゴラスはグランゴンの方に振り向いて威嚇する。
グランゴンもラゴラスの姿を見て唸り声を上げる。
ラゴラスはグランゴンがいる陸上に上陸し、グランゴンを襲い掛かる。
そのグランゴンがラゴラスに一撃喰らわれる前に右足を噛みつく。
ラゴラスはグランゴンの噛みつきに痛がる。
ラゴラスは噛みつかれた右足を振り回し、グランゴンから離れる。
グランゴンは尻尾で攻撃するが、ラゴラスはそれを受け止め、ハンマー投げの要領で振り回す。
ラゴラスはグランゴンを投げ飛ばす。
その先には宮殿がある。
「チィッ!」
シンはウルティメイトブレスからウルトラゼロアイを出し、自分の目にかける。
よってシンはウルトラマンゼロに変身する。
ゼロはラゴラスに投げ飛ばされたグランゴンを跳び蹴りで弾き飛ばし、そのグランゴンはそのままラゴラスに激突する。
ラゴラスはグランゴンの下敷きにされる。
ゼロはラゴラスとグランゴンがいる陸上に着地する。
「ゼ・・・ロ・・・」
「クリシスさん!」
「クリシス姉さん、今の地震・・・ゲッ!?また怪獣が出てきたの!?」
クリシスの後ろに2人の少女と緑色のカーバンクルがバルコニーにやって来た。

キュアエレメントこと新まのんと姉の真理奈、そしてまのんのパートナー・くるるである。
「すぐに皆に知らせないと！」
『待て！』
真理奈とまのんは頭から直接声が響き、後ろに振り向くと、黄色いカーバンクルがバルコニーにやって来た。
名前はリュイル。
『この国に災いを齎す獣が来る。』
「災いを齎す獣？」
「あいつらよりヤバい奴が？」
『あぁ。』
リュイルからグランゴンやラゴラスより強力な怪獣がトランプ共和国に向かってくることを聞き、驚きを隠せない真理奈とまのん。
「とにかく、クリシス姉さんをベッドに。」
真理奈はクリシスを寝かせる為、部屋に向かい、まのんはクルルを抱えて他のプリキュアにラゴラスとグランゴン、そしてリュイルが伝えた強力な怪獣の事を他のプリキュアに伝えに行く。
『それに、同時に現れた別の気配を感じる・・・』
リュイルはゼロ、ラゴラス、グランゴンとは別の新たな力を感じ取った。

その頃、なのはとユーノは飛来した巨大生物を追うが、体格差も相まって、飛行スピードも2人より上である。
「くぅぅっ、追いつけない！それに体が小っちゃくなったのか、いつもの全力が出せないよ！」
「！待って、なのは！」
ユーノはなのはの手を引っ張って止める。
なのははユーノの視線の先、真上の方に向くと、空間の歪みが発生していた。

「ユーノ君！これって！」
「うん！デントの神殿で起きた現象と同じだ！」
なのはとユーノは空間の歪みを見て、この世界に来た時と同じ現象であることを示唆する。
その空間の歪みから、３人の少女と１人の少年が落下している。
「え、えええええええっ!?!!?」
「う、うわあぁぁぁぁぁぁっ!!!?!!!」
「お、落ちてるぅっ!?」
「ここは、一体・・・!?」
４人の特徴からして、１人は赤と緑のオッドアイの金髪の少女、１人は青と紺のオッドアイの碧銀の髪のツインテールの少女、１人は茶髪のショートヘア―にアホ毛が伸びている少年、そして１人はベージュのロングヘアーの少女が先程の空間の歪みから現れたのだ。
「ヴィヴィオ！アインハルトちゃん！トーマ！リリィ！」
『浮遊制御。』
なのはの所持するレイジングハートは魔法で４人の少年少女の落下を防止する。
「止まった・・・」
「って、そこにいるのは!?」
金髪の少女はなのはとユーノの存在に気付く。
改めて紹介しよう。
まず、金髪の少女は高町ヴィヴィオ。
ジェイル・スカリエッティによって生み出されたオリヴィエ・ゼーゲブレヒトのクローンである。
〈ＪＳ事件〉解決後、なのはの養子として迎え入れた。
次に碧銀のツインテールの少女はアインハルト・ストラトス。
クラウス・Ｇ・Ｓ・イングヴァルトの子孫でＤＳＡＡ格闘競技Ｕ―１５のチャンピオンである。
ヴィヴィオとの模擬戦をきっかけに笑顔を取り戻した。
そして茶髪のアホ毛の少年はトーマ・アヴェニール。
ヴァイゼンの鉱山町の事件により、天涯孤独の身となった少年であ

る。
エクリプスウィルスによりエクリプスドライバーとなる。
最後にベージュのロングヘアーの少女はリリィ・シュトロゼック。
ルヴェラ鉱山遺跡の研究施設で実験台にされた生命体型リアクトプラグである。
特務六課に保護された後、トーマと一緒に見習い隊員として活動していた。
「なのはママ！ユーノ司書長！どうしてそんなに小っちゃく・・・」
「ヴィヴィオ～っ！」
「わわっ！」
「もう二度と会えないかと思ったよ～！」
「いや、なのは。違うから。」
なのははヴィヴィオに飛びつき、涙ながら抱きついた。
ユーノはそんななのはにツッコむ。
アインハルトとトーマとリリィはそんななのはに苦笑いする。
「ととっ、こんなことしてる場合じゃなかった！」
なのはは我に返り、巨大生物の事を思い出す。

一方、ゼロはグランゴンとラゴラスと対峙している。
グランゴンは尻尾で攻撃するが、ゼロは側転で躱し、ラゴラスはゼロに殴りかかるが、ゼロはそれを受け止め、腹にパンチを入れる。
「へへっ！どうした!?」
ゼロは余裕そうにグランゴンとラゴラスを挑発する。
グランゴンとラゴラスはゼロの挑発行為に怒り、突撃する。
その時、突然暴風が起き、ゼロは吹き飛ばされそうになる。
「うおぉっ!?な、なんだ!?」
グランゴンとラゴラスは突然の暴風によりバランスを崩し、２体とも湖に落下する。
暴風が治まった後、ゼロは周囲を見渡すと、青い体をした巨大な翼

を持つ鳥のような怪獣が地上に降り立つ。
宮殿からまのんとくるる、そして茶髪のロングヘアーの少女・マヤが出てくる。
「怪獣がもう一体!あれがリュイルが言ってた災いを齎す獣・・・?」
「・・・で・・・」
「え?」
まのんはマヤの様子がおかしい事に気付く。
「・・・なんで、蘇ったのよ・・・魔王獣・・・マガバッサー・・・!」
マヤは巨大な鳥の怪獣をマガバッサーと呼ぶ。
風ノ魔王獣マガバッサー。
電離層で眠りについていた悪魔の風と呼ばれていた風を司る魔王獣である。
世界中に台風を起こしたり、サハラ砂漠に大雪を降らせるなど自然現象を起こした。
「魔王獣って!?」
「・・・魔王獣はこの妖精の世界でいくつもの国を滅ぼした・・・バラージ王国もその国の一つなの・・・」
マヤは手を拳にして震え出す。
「私の故郷を・・・滅ぼしたバケモノよ!」
マヤは突然走り出す。
「あぁっ!?マヤさん!?」
まのんはマヤを止めようとするが、まのんの目の前に空間の歪みが発生し、サハギンの集団が現れる。
サハギンの正体は半魚人兵士ディゴン。
水棲生命体スヒュームが使役する遺伝子改造兵士である。
スーパーGUTSの母艦クラーコフに潜入するが、スーパーGUTS隊員に掃討された。
「また空間の歪みが・・・!」
まのんは急いで変身しようとするが、すぐそこまでディゴンが襲い掛かってきている。
変身に間に合いそうにない。

その時、まのんの横に通り過ぎるように色取り取りのクリームがディゴンの動きを止める。
「まのんちゃん！」
まのんは振り向くと、キラキラ☆プリキュアアラモードのキュアホイップ、キュアカスタード、キュアジェラート、キュアマカロン、キュアショコラ、キュアパルフェがいた。
「皆さん！」
「大丈夫だった？」
「は、はい！なぎささん達は？」
「城内にもこいつらが出てきたから、その退治と中の人達の避難をさせてる。」
ジェラートは他のプリキュア達の事をまのんに教えた。
「マヤちゃんはどうしたんだい？」
「それが、あの怪獣を見た途端、先に走り出して・・・」
「じゃ、まずはこいつらを！」
「はい！」
まのんはジェラートの提案に乗り、キュアエレメントに変身して、目の前のディゴンの集団に立ち向かう。
一方、ゼロはマガバッサーと立ち会っていた。
ゼロはゼロスラッガーを飛ばす。
しかし、マガバッサーはゼロの攻撃を躱す。
その後もゼロスラッガーはマガバッサーを追うが、マガバッサーは方向転換し、羽根を飛ばす。
羽根のいくつかはゼロスラッガーに当たって起爆し、そのままゼロに襲い掛かる。
ゼロスラッガーはゼロからやや離れた所に突き刺さる。
「チッ！まるで自然災害そのものを相手にしてるみたいだぜ・・・！」
ゼロは手を拳にして、口元を拭う素振りをしながらそう言う。
マガバッサーは着地して、マガ衝撃波を繰り出す。
ゼロはマガバッサーの攻撃に怯む。
マガバッサーは飛び上がり、ゼロの前にホバリングして鉤爪で攻撃

し、着地した後、翼でゼロを殴りつける。
ゼロは地面に倒れ、マガバッサーはゼロを踏みつける。
その時、マガバッサーの頭部にピンク色の光弾が命中され、マガバッサーは怯み、ゼロから離れる。
ゼロは起き上がり、マガバッサーがいる所とは反対方向に振り向くと、なのはとユーノがいた。
「大丈夫ですかー!?」
「!?お、おぉ!」
ゼロは先程マガバッサーを退け、自身を助けたのは、なのはとユーノであることに驚く。
(こんな子供が・・・それにプリキュアじゃねぇ・・・!)
ゼロはなのはの格好を見て、プリキュアじゃないことに気付く。
一方、エレメント達の方も、願ってもない助っ人が来る頃だった。
「ハァ、ハァ・・・多すぎる・・・」
「エレメント、大丈夫?」
「はい・・・!」
エレメントはディゴンの軍団を相手に苦心し、ホイップに支えられる。
しかし、その隙に1体のディゴンがエレメントとホイップを襲い掛かる。
その時、ディゴンの側頭部に虹色の光弾が命中する。
ディゴンはそれによって吹き飛ばされる。
ホイップとエレメントは先程吹き飛ばされたディゴンとは反対方向に振り向くと、ヴィヴィオ、アインハルト、トーマがいた。
「大丈夫?」
「は、はい!」
「あなた達は!?」
「話は後です!」
「まずはこいつらを!リリィ!」
『うん!サポートは任せて!トーマ!』
エレメントとホイップはヴィヴィオ達の言う通りにして、ディゴン

の群れを相手にすることになった。
ゼロは立ち上がり、マガバッサーの方に振り向く。
マガバッサーはいつでも戦えるようになっていた。
ゼロはそんなマガバッサーに対し、戦う構えをとる。
なのはとユーノもゼロを援護するために魔法陣を展開する。
ゼロはマガバッサーに飛び込み、攻撃を開始する。

ＶＳマガバッサー

トランプ共和国でクリシスと雑談していたシン。
その時、空間の歪みから溶岩怪獣グランゴンと冷凍怪獣ラゴラスが現れた。
シンはウルトラマンゼロになって、グランゴンとラゴラスを対峙する。
しかし、その最中、風ノ魔王獣マガバッサーが乱入してきた。
マガバッサーの猛攻に苦戦するゼロ。
その時、空間の歪みによって漂流されたなのはとユーノがゼロのピンチに駆け付け、それを助ける。
一方、キュアエレメントとキラキラ☆プリキュアアラモードは空間の歪みから現れたディゴンの群れに悪戦苦闘するが、その最中ヴィヴィオ、アインハルト、トーマ、リリィが介入し、共に戦うことにした。
「アクセルスマッシュ！」
「覇王断空拳！」
ヴィヴィオとアインハルトは得意の格闘技で次々とディゴンの群れを蹴散らしていく。
「吹き荒ぶ風よ、舞い踊って！プリキュア・ハリケーンダンス！」
エレメントはプリキュア・ハリケーンダンスを繰り出し、周囲に囲まれたディゴンの群れを竜巻の中に吸い込まれる。
「パルフェ！」
「ウィ！」
エレメントは技を中断し、パルフェは竜巻で一ヵ所に集まったディゴンの群れの方に飛翔する。
「行くよ！アン・ドゥ・トレビアン！」
パルフェはパフェの器を作り、ディゴンの群れを閉じ込める。
「キラクル・レインボー！」
パルフェはそのままパフェに盛り付けた後、ディゴンの群れを圧縮する。

「ボナペティッ☆」
ディゴンの群れは虹色の爆風によって消滅する。
『銀十字！あの魚人たちを捕捉！』
『敵性存在補足。数、１００。』
『トーマ！捉えたよ！』
「了解！」
トーマは一冊の本から次々と本のページを拡散させ、本のページと剣先の間にエネルギーを集約する。
「シルバー・スターズ・ハンドレッドミリオン！」
トーマは本のページからエネルギー弾を発射させる。
ディゴンの群れは無数のエネルギー弾により駆逐される。
「キラキラキラルン、フルチャージ！」
ホイップ達はディゴンの群れを中心にキャンディロッドで５段ケーキを作り、それをディゴンの群れに包み込む。
「スイー・ツー・ワンダフル・アラモード！」
ホイップ達はキャンディロッドのポットを回し、ディゴンの群れを消滅する。
エレメント達は周囲を見渡すが、もうディゴンの姿はない。
「ありがとうございます。」
「どういたしまして。」
エレメントはヴィヴィオ、アインハルト、トーマに礼を言うと、ヴィヴィオが３人を代表してそう返事する。
「あっ!?マヤさんは!?」
エレメントはマヤが去って行った方向に振り向く。
「イージス・ソードトルネード！」
突然、光剣の竜巻がマガバッサーを襲う。
マガバッサーの翼は今の竜巻で羽根が散り散りになっている。
貢献の竜巻を発生させたのは、マヤが変身するキュアイージスだった。
「こいつは私が倒す！」
イージスはラブプリブレスのダイヤルを回す。

「イージス・サウザンドソード！」
イージスは１０００本の光剣を召喚し、それをマガバッサーに放つ。
マガバッサーはイージスの攻撃に怯む。
「イージス！」
「無茶だ！ヴィヴィオ！アインハルト！ここを頼む！」
「うん！」
「はい！」
トーマはヴィヴィオとアインハルトにそう言って、イージスの元へ向かう。
「私達も！」
キラキラ☆プリキュアアラモードもイージスの元に向かう。
イージスは再びマガバッサーに攻撃を繰り出そうとするが、背後から熱気と冷気を感じ取り、すぐさま回避する。
イージスは振り返ると、グランゴンとラゴラスが火炎弾と冷凍光線でイージスを狙っている。
グランゴンとラゴラスはイージスを目掛けて火炎弾と冷凍光線を放つ。
「イージス・ソードシールド！」
イージスは６つの光剣の盾でグランゴンとラゴラスの攻撃を防ぐ。
しかし、イージスが展開した盾に罅が生じ始める。
「ディバインバスター！」
「ディバイド・ゼロ！」
なのははディバインバスターを、トーマはディバイド・ゼロをグランゴンとラゴラスに向けて放つ。
グランゴンとラゴラスはなのはとトーマの攻撃に怯む。
「キラキラルン！キラキラル！」
ホイップ、カスタード、ジェラート、マカロン、ショコラはクリームエネルギーでマガバッサーの動きを封じる。
「ゼロ！」
「おぉっ！」

ゼロはホイップ達に動きを封じられているマガバッサーにワイドゼロショットを放つ。
マガバッサーはゼロの攻撃により、爆散される。
マガバッサーが倒された後、ゼロはグランゴンとラゴラスの方に目を向ける。
「キラキラリン！パルフェ・エトワール！」
パルフェは虹色の３つのリングを作り、ラゴラスの胴体に縛りつける。
その後、ラゴラスの胴体の３つのリングが爆発を起こす。
ラゴラスはその衝撃により倒れる。
グランゴンは尻尾でなのはを叩き落そうとする。
「なのは！」
ユーノはなのはを庇うように、ラウンドシールドでグランゴンの攻撃を防ぐ。
なのははレイジングハートのカートリッジをロードし、杖先をグランゴンに向ける。
レイジングハートの杖先にピンクの光が膨張する。
「エクセリオンバスター！」
なのははグランゴンにエクセリオンバスターを放つ。
グランゴンはなのはの砲撃により、そのままラゴラスの方に吹き飛ばされる。
よって、グランゴンはラゴラスを下敷きに落下する。
「後は任せとけ！」
ゼロはなのは達の前に降り立ち、起き上がったグランゴンとラゴラスに対して身構える。
ラゴラスは冷凍光線を、グランゴンは火炎弾をゼロに放つ。
ゼロはラゴラスとグランゴンの攻撃に対し、ゼロスラッガーを飛ばす。
よって冷凍光線と火炎弾はゼロスラッガーにより弾かれ、片方はグランゴンの背中の突起を、片方はラゴラスの角を斬られる。
グランゴンとラゴラスは怒りが頂点に達し、ゼロを襲い掛かる。

ゼロはワイドゼロショットでグランゴンを爆散させ、その次にラゴラスを撃滅する。
ゼロはマガバッサー、グランゴン、ラゴラスを倒し、変身を解いて、モロボシ・シンとなる。
その後、ウルトラ戦士達とプリキュア達の殆どを集め、なのは達はこのプリキュアの世界に迷い込んだ経緯を話す。
なのはは聖王教会からの要請で、管理世界デントで鉱山奥に神殿が発見されたと言う報告を受け、ユーノと一緒にその神殿の調査に向かった。
その神殿は、バラージ王国の地下で見た巨人の石像、つまりノアの石像が確認された神殿であった。
その神殿にロストロギアがないのか、入念に調査を行なった。
だが突然、目の前の景色がオーロラのように歪みはじめ、その時まで神殿にいたはずが、バラージ王国上空にいた。
その時に、なのはとユーノは管理世界デントにいた時までは大人の姿だったが、今は子供の姿になっていたのである。
時空管理局本局に連絡を取ろうとしていたが、エラーが発生し、通信不可能になっていた為、報告どころか救援も望めない状況になっていたのだった。
しかも、ヴィヴィオとアインハルトの話によると、空間の歪みによる行方不明者が続出していたとの事。
すでに格闘技選手の数名がその影響で消え去ったそうだ。
ナカジマジムにもその影響を受けている。
よって、来年のＤＳＡＡ公式魔法戦競技会インターミドル・チャンピオンシップの開催が難航される始末だった。
トーマとリリィも旅の途中でその話を聞き、もう一人の旅仲間であるアイシスも実家に帰って寛いでいる所を空間の歪みによって姿を消したそうだ。
なのは達からこれまでの経緯を話した後、このプリキュアの世界で起こったこと、ウルトラ戦士がなのは達のようにプリキュアの世界に迷い込んだことをシン達が説明した。

もちろん、自己紹介をした後にである。
「まさかウルトラマンの他にこの世界に来た者がいるなんてミポ。」
「怪獣が出てきただけでも大変だったのにメポ。」
「しかもシンはん達や怪獣達が出てきたっちゅう空間の歪みの正体が全然掴んでへんからな・・・」
タルト達はなのは達の話を聞いて、今後の事をどうするのか困惑する一方である。
「お姉ちゃんが当てにしていたプロノーン・カラモスの方からも収穫なかったし・・・」
「ユグドラシルにもそれらしい情報が入っていなかったわ。まぁ、革命を狙っていたデニーズさんがそんなことを興味を持つわけないでしょうけど・・・」
まのんとマヤも空間の歪みに関する情報がないと言う。
「フゥ・・・フェイトちゃんとはやてちゃんも空間の歪みに巻き込まれたのかな・・・」
「あんまりそんなことは考えたくないけどね・・・」
なのはとユーノはミッドチルダにいる友達の事を考える。

その夜、ハート型のオブジェが並び、高台にハートをモチーフにした展望台が建っている公園で小さいものだが、空間の歪みが発生していた。
その空間の歪みから、ピンクのポニーテールの少女が現れる。
「な、なんなのよ、一体・・・」
『大丈夫ですか、エクセル?』
「えぇ、大丈夫よ、ブレイブハート。」
エクセルと呼ばれた少女は首に掛けている青い宝玉・ブレイブハートに自身の無事を伝える。
「休暇で実家に帰る途中、急に目の前がぐにゃぐにゃして・・・ていうか、ここどこ?」

『分かりませんが、文字からして、第９７管理外世界地球にいるようですが・・・』
エクセルは看板をよく見る。
すこやか市という文字を見て、エクセルは確信を得る。
「うそでしょ!?じゃあ、私、なのはさん達の世界に来たって事!?」
エクセルは看板に書かれてあるすこやか市という文字を見て、なのは達が暮らしていた地球に飛ばされたことに驚く。
尤も、エクセルが知る地球ではないことを知らずに。

ちょうどその頃、小泉学園のとある珈琲店で・・・
「ミコトちゃん、お疲れ様。ありがとうね。」
「いえ、マスターもお疲れ様です。」
ミコトと呼ばれる水色のショートヘアーの少女は珈琲店のマスターに労いの言葉を言う。
「明日、登校日だったわよね？最近真理奈ちゃんと会ってないから心配だったでしょう？」
「えぇ。最近怪獣が現れてから会っていませんので、流石に心配ですね・・・でも、まのんちゃんから真理奈さんの事で毎日メール送って来てくれるので、安心しました。」
「そう。じゃ、明日の登校日、今まで真理奈ちゃんと会わなかった分、ゆっくり話しなさい。こっちの心配はいらないわ。」
「はい。ありがとうございます。」
ミコトはマスターの言葉に甘える。

同時刻、バラージ王国で不穏な動きが蠢いている。
「くそっ！デニーズさんが拘束され、ヤマザキ博士が喪い、マヤが裏切って、イヴィルアイも使い物にならなくなった・・・」

「残されているのは、このモンスターズルーラーとこの城に残った兵だけだ・・・」
　城門前で悔しそうに言う軽装備の鎧の人達。
「ウルトラマンやスーパーＧＵＴＳがこの世界に来て、我々の革命を阻むとは・・・」
「このままでは我々ユグドラシルの大願が果たせぬ！」
　軽装備の鎧の人はユグドラシルの名を口にしたと同時にウルトラマンやスーパーＧＵＴＳの事で悪態をつく。
　ユグドラシル、トランプ共和国にクーデターを起こし、その国を古く良く強い国を作り変えようと目論む革命組織。
　エボリュウ細胞やクローン怪獣を用いてトランプ共和国や人間界に恐怖に陥れようとしていたが失敗に終わった。
　マヤもそのユグドラシルの仲間だった。
　そう、城門前にいた軽装備の鎧の人達は今説明したユグドラシルの兵士達である
「こうなったらヤマザキ博士のクローン技術を利用して新たな怪獣を生み出すしかない。だが今度は単純なクローン怪獣ではなく、別々の怪獣の細胞を融合した新しいのをな。」
「あぁ。それがいいな。ナケワメーケダイヤもホシイナーボールも残ってる。あとは・・・」
　ユグドラシル兵は視線を城門の方に向ける。
　その城の中には・・・
「フンッ！フンッ！」
「ウッ！グゥッ！」
　ユグドラシル兵が囚人服を纏う金髪の少女の腹に何度も思いっきり蹴りを入れる。
　その少女とユグドラシル兵が今いるのは地下牢で、少女は両手首に鎖でぶら下げられて、足のつま先が地面に付く程度の為動けないでいる。
「トランプ王国の未来を踏み躙る者はこうなるのだ！」
「伝説の戦士プリキュアも堕ちたものだな。今のトランプの国ではい

ずれ滅びへ道になると言うのに。」
ユグドラシル兵はプリキュア達の事を嘲笑うかのように言う。
「関係のない者達を巻き込むお前達ほどではありません・・・」
「なんだと、セレナ!?」
ユグドラシル兵はセレナと呼ばれた少女の胸倉を掴む。
「お前達、ホープキングダムにイビロンが手懐けた怪獣やクローン怪獣を送り出しただけに飽き足らず、人間界にエボリュウ細胞を投入したミサイルを撃ったそうですね？」
「黙れ！」
ユグドラシル兵は再びセレナの腹に蹴りを入れる。
セレナは力なく頭を垂れる。
「チッ、減らず口を・・・！」
「隊長、例の物を持って来ました。」
地下牢のドアを開けて入って来た兵士は人の頭に嵌めれるほどの大きさがある輪っかを持ってくる。
「よし、そいつに嵌めろ。今度こそトランプの国の未来を掴み取るのだ。」
ユグドラシル兵の隊長はセレナにその輪っかを嵌めるように部下に命令する。
ユグドラシル兵は隊長の命令通り、今持っている輪っかをセレナの頭に嵌める。
その後、ユグドラシル兵はセレナの両手首の鎖を外した後、部屋から出る。

歪みより現れし魔物

トランプ共和国に現れたマガバッサーとラゴラスとグランゴン。
3体の怪獣を相手にウルトラマンゼロが立ちはだかる。
キュアイージスやキラキラ☆プリキュアアラモード、なのは、ユーノ、トーマ、リリィの援護によって、ゼロは3体の怪獣を撃滅した。
次の日、半袖の学生服を身に纏う真理奈はベローネ学院校門前で待っていた。
「早乙女の奴、遅いなぁ。ここで待ち合わせだって言っといて遅刻するんじゃ世話ないでしょ・・・」
真理奈はつまらなさそうに校門を背凭れにして溜息を吐く。
「真理奈さ～ん!遅れてすみませ～ん!」
真理奈は声の主の方に振り向くと、ミコトが走って来た。
「ったく、言った本人が遅れてどうすんのよ?」
「すみません・・・バスが故障して、急いで走って来たので・・・」
ミコトは息を切らしながら真理奈に言い訳する。
真理奈はそんなミコトに溜息を吐くが、その直後にミコトの顔が赤いのを気付く。
「ん?早乙女、顔赤いわよ?」
「えっ!?う、ううん、なんでもないです。」
「?まぁ、いいや。とりあえず教室に急ぐわよ。もうすぐチャイム鳴るわ。」
「ええ。」
真理奈とミコトは教室に走っていく。
（・・・あの事は直接本人に会って謝ろう・・・）
ミコトは今も恥じらう様子を表すが、真理奈に悟られていない分安心していることを他所に、誰に対してか申し訳ない気持ちを浮かべる。

その頃・・・
「あ～、気まずい事になっちまったな・・・」
小泉公園でベンチに座り、頭を掻きながら気まずそうな口ぶりで言うシンがいた。
何故、そのようなことをしたのかと言うと・・・
～～～～～回想～～～～～
遡ること３０分前、シンは小泉学園でランニングを終えた後、歩道橋の下で腕立て伏せを始めていた。
（ユグドラシルの件や、ルルイエでの戦い、これらの戦いは終わった・・・だが、空間の歪みから現れる怪獣達がいなくなったわけじゃねぇ・・・ユグドラシルでも闇の支配者でもない何かが俺達ウルトラ一族をプリキュアの世界に閉じ込め、別の世界にいたなのは達もこの世界に来た・・・その元凶は今もこの世界にいる・・・それに備えとかねぇとな・・・）
シンはこの世界で起きた２つの事件を振り返りつつ、空間の歪みの元凶の事も頭に入れる。
彼の言う通り、全てが終わったわけではない。
ウルトラ戦士や魔導師のなのは達を巻き込んだ空間の歪み、怪獣頻出、真理奈の祖父・新光太郎がいたパリの研究所上空に現れた謎の生命体等、未だ解決していない出来事があったのだ。
シンは再び怪獣が現れた時に備え、日々トレーニングをしていた。
「ハァ、ハァ！大事な登校日にエンジントラブルなんて！急がないと！」
シンがいる歩道橋の下とは反対方向から走っていく少女・早乙女ミコトは登校中にバスが故障してしまい、本来はベローネ学院付近のバス停に降りるはずだったが、先述の為、途中で降りて大急ぎで走っていくしかなかったのだ。
「一々階段から下りるのは時間がかかる！人前で見られるのは気まずいけど、飛び下りるしかない！」
ミコトは歩道橋のポールを手に置き、そのままジャンプした。
普通なら歩道橋から飛び下りるなんて、特撮物のヒーローのような

行為は絶対しないだろう。
　ミコトは見事に着地するが・・・
「うおっ!?」
「へっ!?えっ!?キャアァッ!!?」
　ミコトは男の声が聞こえ、後ろに振り向くと、自分のスカートが誰かをかぶせている状態になっているのに気付き、すぐに離れた後、スカートの後ろを抑え、声がした方に振り向く。
　ミコトが聞こえた男の声の主はシンだった。
　ミコトは歩道橋から飛び下りた後の状況を整理した後、顔が真っ赤になる。
「う、あ、えっと、そ、その・・・ご、ごめんなさ～い！（／／／／）」
　ミコトは目の前の男にスカートの中を見られたパニックで口がパクパク動かすが、すぐに謝って即座に去って行った。
「あ!ちょっ!おい!」
　シンはミコトを止めようとしたが、起き上がった時にはすでに遠くへ行ってしまった。
「・・・行っちまった・・・」
　シンは追う事もせず、ただ呆然と立ち尽くしていただけだった。
～～～～～回想終了～～～～～
　と、言う事である。
「びっくりしたな・・・腕立てしてる時に目の前に・・・とと、イケねぇ、イケねぇ・・・!」
　シンは歩道橋下で起きた出来事を思い出すが、すぐに頭を振って忘れることにする。
「それにしても、あいつの足音を聞くと、歩道橋から飛び下りたんだよな?だとすると、あいつはこっちの世界の人間じゃなく、妖精の世界の奴なんだな・・・」
　シンはミコトが歩道橋から飛び下りた事を考え、ミコトは人間界の住人ではなく、妖精の世界の住人ではないかと推測する。

一方、ベローネ学院中等部2年桃組の教室で真理奈とミコトを含む生徒は今日までの夏休みの宿題を提出を終える。
昼頃、下校の準備をした真理奈は、ミコトに体育館に来るように言われた為、体育館の裏に歩いて行った。
そこで真理奈はミコトと対面する。
「早乙女、どうしたのよ、こんなところまで呼び出しといて？」
「突然すみません。最近怪獣が現れてから連絡もなかったので、心配してたんですよ。まのんちゃんからメールで教えてくれました。」
ミコトは真理奈を体育館の裏に呼んだ訳を聞く。
「あ～、成程？確かにあれは大変だったわね。フィールドワークに出かけた時はダメかと思ったよ。ニュースで出てきた巨人が怪獣をやっつけてくれたわけだけど・・・」
「とにかく無事でよかったです。」
「それはそれでいいんだけどさ、まのんのメールの事だけど、どこまで知ったの？」
真理奈は逆にミコトにまのんのメールについて問う。
「まのんちゃんがプリキュアになった事や、ウルトラマンと言う巨人の事、ユグドラシルの事くらいです。」
「ほぼ全部ってわけね。（高町達の事は伝えていないか・・・）」
真理奈はミコトから、まのんからのメールの内容を聞き、なのは達の事は教えていないことに気付く。
「まぁ、私の事は大丈夫よ。現にピンピンしてるし。そう言うアンタこそ、夏休みだけあって珈琲店の手伝い大変だったでしょ？」
「真理奈さんの紹介で借りさせて頂いた下宿ですから・・・」
ミコトは真理奈に夏休み中の珈琲店の手伝いの事を聞かれ、苦笑いする。
「さて、とっとと学校から出て、昼飯済んだら、プロノーン・カラモスに直行よ。」
「ダニエルさんに用事ですか？」
「えぇ。来月には大事な予定があってね。それを伝えに行くのよ。

じゃあね。」
　真理奈はミコトに別れを告げ、先に下校する。
「真理奈さんも忙しいわね・・・」
　ミコトは走っていく真理奈の姿に苦笑いする。
「私も行かないとね。あの時は混乱してたから、ちゃんと謝らないと・・・」
　ミコトはベローネ学院に来る前、シンと会った時の事を思い出し、頬を赤らめつつ、カバンを拾い上げて下校する。

　その頃・・・
「・・・リンディさんにも騎士カリムにも繋がらない・・・八神指令にもなのはさんにも・・・どうなってんのよ・・・！」
　すこやか市のビルの上でなのは達と連絡を取るエクセル。
　しかし、誰にも連絡が来なかった。
「この世界が管理外世界の地球なら、海鳴市のマップデータを調べて転送装置の所へ行けるんだけど、そのマップデータが出ない・・・行く当てないじゃない・・・」
　エクセルは今の状況に頭を抱える。
「私の知ってる地球じゃないのかな・・・？」
『そのようですね。前にヴィヴィオが地球にお連れした時、すこやか市という町はありませんでした。』
　エクセルはブレイブハートの補足もあって、エクセルの知る地球ではない事を気付く。
　これからどうするか、エクセルは思い悩んだその時、彼女の周囲に空間の歪みが生じる。
「これって!?」
『先日起きた現象のです。』
　エクセルは空間の歪みを見て身構える。
「オシマイダー！」

「ノットリガー!」
「メガビョーゲン!」
空間の歪みから社員証らしき物が付いている扇風機の怪物、額にNの字が入っている魔女らしき怪物、サソリのような尻尾が生えている蛾のような怪物が現れる。
まず社員証付きの怪物はオシマイダーである。
未来から来た会社・クライアス社の社員が使役する怪物である。
その上、更に進化した怪物モウオシマイダーも存在する。
次に額にNの字が入っている怪物はノットリガーである。
全宇宙の支配を目論むノットレイダーの科学者・アイワーンが操る怪物である。
ダークペンによって生み出され、その力でカッパード、テンジョウを入れた3人を素体にしたノットリガーを生み出したことがある。
最後にサソリのような尻尾が生えている怪物はメガビョーゲンである。
地球を蝕むことを目的にビョーゲンズが生み出した怪物である。
そのメガビョーゲンが十分育つと種が生まれ、ビョーゲンズの幹部であるテラビョーゲンを生み出すことができる。
「な、なんなの!?」
『正体不明。解析不能。』
「とにかく、こんなのが町中に暴れまわったら大変。ブレイブハート、封絶結界を!」
『了解。』
エクセルはブレイブハートに封絶結界を展開するように命令する。
ブレイブハートはエクセルの命令通り、封絶結界を発動するが、発動した瞬間、展開中の結界が掻き消された。
「えっ!?結界が展開できない!?」
『正体不明の干渉エネルギーが結界の展開を阻んでいるようです。』
「嘘でしょ!?」
ブレイブハートの解釈に動揺を隠せないエクセル。
扇風機オシマイダーと魔女ノットリガーと蛾メガビョーゲンはエ

クセルを同時に攻撃を仕掛ける。
エクセルは3体の怪物の攻撃を避ける。
「仕方ない!ブレイブハート!セーットアーップ!」
エクセルはブレイブハートに手を伸ばす。
ブレイブハートは光を発し、その光をエクセルに纏わせる。
その光からなのはのバリアジャケットをピンク色にカラーリングしたジャケットにオーバースカートの下にスパッツの履いた姿になったエクセルが現れる。
エクセルの手には先端に星の形をした機械作りの装置になっている杖を所持している。
「封絶結界が使えない以上、一気に決めるしかないわね!」
『スプリングサークル。』
扇風機オシマイダーと魔女ノットリガーと蛾メガビョーゲンの真下に青い魔法陣が展開され、その途端にトランポリンのように空中に弾かれる。
『ディバインバスター。』
エクセルは杖先を3体の怪物に向け、青いエネルギー砲を放つ。
蛾メガビョーゲンは鱗粉をばら撒き、エクセルのディバインバスターを乱反射してしまう。
「ま、マジ?」
エクセルは自分のディバインバスターが防がれたことにショックを受ける。
だが、そんな場合ではなかった。
魔女ノットリガーは魔法の杖でエクセルの周囲にシャボン玉が形成され、捕まってしまう。
扇風機オシマイダーは両腕のプロペラで強風を出す。
よってエクセルはシャボン玉ごと吹き飛ばされ、すこやか山に落下する。
「面倒な怪物たちね・・・過去のデータにあったジュエルシードの異相体とは違うわ・・・」
吹き飛ばされた際に木の枝に引っかかるエクセル。

エクセルは立て直すように木の枝から離れ、空中浮遊する。
すでに目先にはオシマイダー達が迫ってきている。
エクセルはオシマイダー達に対し、身構える。
扇風機オシマイダーは両腕のプロペラを回し、強風を出す。
「フワ～っ！」
エクセルは突然の叫び声に反応するが、エクセルの背後にワープホールが現れ、そこに吸い込まれる。
オシマイダー達は突然の出来事に驚き、周囲を見渡す。
「大丈夫ルン？」
オシマイダー達は声がした方に振り向くと、エクセルと１４人の少女とぬいぐるみサイズの生き物がいるのに気付く。
「いろいろ聞きたいことあるけど、今は後にするニャン。」
（ルン？ニャン？なんなの、この子達？）
エクセルは触角のようなコードを持つ少女と猫の耳と尻尾を持つ少女の語尾に困惑し、周囲の１４人の少女に目を見張る。
「みんな、行くよ！」
１４人の少女はそれぞれの変身アイテムを構える。
この時、エクセルは知ることになる。
この世界を守り続けている伝説の戦士の姿を。

フレフレ！キラヤバ～な、お手当スタート！

登校日の日にクラスメートの早乙女ミコトと雑談する真理奈。
まのんからのメールでキュアエレメントの事、ウルトラマンの事、ユグドラシルの事を伝わったミコトは真理奈の無事に安堵する。
その頃、行く当てのないエクセルの前にオシマイダー、ノットリガー、メガビョーゲンが現れる。
セットアップして、立ち向かうも、返り討ちに会われるエクセル。
そんな時、エクセルを助けてくれた１４人の少女が現れた。
その少女たちは・・・
「ミライクリスタル！ハート、キラッと！」
５人の少女は楕円型のアイテムにクリスタルのようなアイテムをセットし、楕円型のアイテムをスライド回転し、ハート型にする。
「は～ぎゅ～！」
その後、ハートの部分を押して温める。
それによってピンク、水色、黄色、赤、紫を基調としたコスチュームを身に纏う。
「輝く未来を抱き締めて!!みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」
「輝く未来を抱き締めて!!みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」
「輝く未来を抱き締めて!!みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」
「輝く未来を抱き締めて!!みんな大好き！愛のプリキュア！」
「キュアマシェリ！」
「キュアアムール！」
「ＨＵＧっと！プリキュア！」
５人の少女はキュアエール、キュアアンジュ、キュアエトワール、キュアマシェリ、キュアアムールに変身する。
「スターカラーペンダント！」
もう一方の５人の少女は羽根付きのペンをインクボトルのような

アイテムに差し込む。
「カラーチャージ！」
５人の少女は羽根付きのペンで星、ハート、太陽、月、三角をそれぞれ描く。
「煌く星の力で憧れの私描くよ♪トゥインクル、トゥインクルプリキュア♪トゥインクル、トゥインクルプリキュア♪トゥインクル、トゥインクルプリキュア♪スター、トゥインクル♪スター、トゥインクルプリキュア♪あぁ～♪」
５人の少女は歌い、踊りながら、ピンク、青緑、黄色、紫、虹色を基調としたコスチュームを身に纏う。
「宇宙に輝くキラキラ星！キュアスター！」
「天にあまねくミルキーウェイ！キュアミルキー！」
「宇宙を照らす！灼熱のきらめき！キュアソレイユ！」
「夜空に輝く！神秘の月明かり！キュアセレーネ！」
「銀河に光る！虹色のスペクトル！キュアコスモ！」
「スタートゥインクルプリキュア！」
５人の少女はキュアスター、キュアミルキー、キュアソレイユ、キュアセレーネ、キュアコスモに変身する。
「スタート！」
「プリキュア・オペレーション！」
３人の少女はステッキ型のアイテムにもう１人は子犬の首輪中央にボトル型のアイテムをセットする。
「エレメントレベル上昇ラビ「ペエ」「ニャ」「ラテ」！」
ステッキ型のアイテムにくっついている小動物と子犬のような妖精がそう言い、
「キュアタッチ！」
少女と小動物が互いにそう言って少女たちは肉球をタッチする。
よって４人の少女は白衣を纏い、それがピンク、水色、黄色、紫のコスチュームに変化する。
「重なる二つの花！キュアグレース！」
「ラビ！」

「交わる二つの流れ！キュアフォンテーヌ！」
「ペエ！」
「溶け合う二つの光！キュアスパークル！」
「ニャ！」
「時を経て繋がる二つの風！キュアアース！」
「ワン！」
「地球をお手当！ヒーリングっどプリキュア！」
４人の少女はキュアグレース、キュアフォンテーヌ、キュアスパークル、キュアアースに変身する。
「えぇ～っ!?へ、変身した～っ!!?」
『バリアジャケットとは違いますが、あの服が彼女達の戦闘服のようです。』
エクセルは彼女達が変身した事に驚きを隠せなかった。
そう彼女達がＨＵＧっと！プリキュア、スタートゥインクルプリキュア、ヒーリングっどプリキュアである。
まず、ＨＵＧっと！プリキュアはキュアエールこと野乃はな、キュアアンジュこと薬師寺さあや、キュアエトワールこと輝木ほまれ、キュアマシェリこと愛崎えみる、キュアアムールことルールー・アムールの５人が結成したプリキュア達である。
はぐくみ市でクライアス社と対峙していたことがある。
次にスタートゥインクルプリキュアはキュアスターこと星奈ひかる、キュアミルキーこと羽衣ララ、キュアソレイユこと天宮えれな、キュアセレーネこと香久矢まどか、キュアコスモことユニの５人が結成したプリキュア達である。
観星町を舞台にノットレイダーと戦った。
最後にヒーリングっどプリキュアはキュアグレースこと花寺のどか、キュアフォンテーヌこと沢泉ちゆ、キュアスパークルこと平光ひなた、キュアアースこと風鈴あすみの４人が結成したプリキュア達である。
すこやか市でビョーゲンズによる地球の病気からお手当をしていた。

オシマイダー達はグレース達を襲い掛かる。
「ぷにシールド！」
グレースとフォンテーヌとスパークルはヒーリングステッキを前に出し、肉球型のバリアを展開し、襲い掛かってくるオシマイダー達を弾き飛ばす。
「雷のエレメント！」
スパークルは雷のエレメントボトルをヒーリングステッキにセットし、蛾メガビョーゲンの動きを止める。
「キュアスキャン！」
フォンテーヌはヒーリングステッキの肉球をタッチし、蛾メガビョーゲンの中を調べ、中に取り込まれたエレメントさんを捜す。
しかし、蛾メガビョーゲンにはエレメントさんも人間もいない。
つまり取り込まれていないという事になる。
「このメガビョーゲン、何も取り込まれていない!?」
「どういうことなのでしょう?!」
フォンテーヌ達にとって、こんなことは今までになかったことなので、信じられないと言いたげな表情を浮かべる。
「プリキュア・コスモ・シャイニング！」
コスモは魔女ノットリガーにプリキュア・コスモ・シャイニングを繰り出す。
魔女ノットリガーはコスモの技に怯む。
「ノットレイダーとは分かり合えたのに、どうしてノットリガーが!?」
「ありえないルン！」
スターとミルキーは魔女ノットリガーの存在に疑問を感じ取る。
怯んだ魔女ノットリガーはほうきでスターとミルキーに振り下ろす。
「プリキュア・ソレイユ・シュート！」
「プリキュア・セレーネ・アロー！」
ソレイユとセレーネはスターとミルキーの前に立ち、振り下ろしてきた魔女ノットリガーのほうきに向けて技を放つ。
魔女ノットリガーのほうきは使い物にならなくなり、この隙にス

ターとミルキーは魔女ノットリガーにパンチを繰り出し、魔女ノットリガーを吹き飛ばす。
「フレフレ！ハート・フェザー！」
アンジュは扇風機オシマイダーの強風をハート・フェザーで防ぐ。
「スタースラッシュ！」
エトワールはスタースラッシュで扇風機オシマイダーの背後を取り、そのまま突進する。
扇風機オシマイダーはエトワールの技により、前に倒れる。
「解析不能！正体不明の干渉エネルギーによって解析を阻んでいる・・・！」
「アムールでも分からないなんて！どうなってるのですか!?」
アムールは先程の蛾メガビョーゲンや魔女ノットリガーを含めて、扇風機オシマイダーの解析を行ったが、解析できないと言い、マシェリはそれを聞いて混乱する。
扇風機オシマイダーは起き上がって、マシェリとアムールを襲い掛かるが、エールは扇風機オシマイダーの腹部に飛び蹴りを繰り出す。
扇風機オシマイダーは魔女ノットリガーや蛾メガビョーゲンを巻き込む形で吹き飛ばされる。
「仕方ない！一気に決めよう！」
「エール・・・うん！行くよ！」
エールはオシマイダー達を一気に浄化するように提案する。
グレース達はエールの提案を乗る。
「メモリアルキュアクロック！マザーハート！」
ミライクリスタル・マザーハートをメモリアルキュアクロックにセットし、エール達が「ミライパッド・オープン！」と言った後、マザーハートスタイルにフォームチェンジし、プリキュアミライブレスを装着する。
「ＨＵＧっとプリキュア！今ここに！」
エール達はメモリアルキュアクロックを囲み、手を翳す。
「ワン・フォー・オール！」
「オール・フォー・ワン！」

「ウィー・アー！」
「プリーキュアー！」
「明日にエールを！」
「ゴーファイ！みんなでトゥモロー！」
　エール達はエネルギーを集約し、オシマイダー達を目掛けて光線を放つ。
「皆の思い！重ねるフワ～！」
「シャイニートゥインクルペン！」
　フワはピンクの星の付いた黄色い球を作り、スターはそれをシャイニートゥインクルペンを差し込む。
「声を重ねるフワ！キラキラ～！」
「トゥインクル！」
「キラキラ～！」
「トゥインクル！」
「フ～ワ～！」
　5色の星がティアラとなり、スター達の頭に装着する。
「イマジネーションの輝き！なりたい自分に！」
　スター達はトゥインクルスタイルにフォームチェンジする。
「星の力、輝くフ～ワ～！」
「プリキュア・スタートゥインクル・イマジネーション！」
　スター達は虹色の星を作り出し、それを発射する。
「ヒーリングっどアロー！」
　グレース達はヒーリングっどアローを手に入れ、スペシャルヒーリングっどボトルをヒーリングっどアローにセットする。
「ヒーリングアニマルパワー！全開！」
　ヒーリングっどアローのダイヤルが回ると、グレース達がスペシャルヒーリングっどスタイルにフォームチェンジする。
「アメイジングお手当！準備ＯＫ！」
　グレース達はヒーリングっどアローのレバーを引くと、虹色のパワーが溜まる。
「ＯＫ！」

「プリキュア・ファイナル・ヒーリングっどシャワー！」
グレース達はヒーリングっどアローに溜まったパワーを解放させ、螺旋状の光線を放つ。
「ヤメサセテモライマ～ス・・・」
「ヒーリングッバーイ・・・」
オシマイダー達はエール達の合体技により浄化される。
「す、凄い・・・」
エクセルはエール達の戦いぶりを見て驚嘆させられる。

その頃・・・
「じゃ、また来月ね。」
「真理奈、最近怪獣だけじゃなく、プリキュア達が今まで倒した怪物も空間の歪みから出現している。気を付けてくれよ。」
「了解。」
真理奈は学校の帰りに昼食を摂った後、大貝町にあるプロノーン・カラモスに立ち寄った。
すでに用件は済ましたので、そのまま帰ることになった。
「昨日は大変だったわね・・・高町達の住まいの事は、ノルンに建ててあるログハウスの1軒を貸してやったから問題なかったけど、服や生活用品を持って来なきゃなんないからさ・・・」
真理奈は昨日の出来事を思い出す。
トランプ共和国での祝勝会の後、空間の歪みの影響でプリキュアの世界に迷い込んだなのは達は時空管理局との連絡が今も取れず、救助も期待できない今、行く当てがなかった。
その為、真理奈は人間の世界と妖精の世界に通じるディメンジョンゲートが配置されている開拓島・ノルンに建ててあるログハウスを1軒拝借させることになった。
父と母の手伝いも兼ねて、魔法の練習を欠かせずにやるには十分との事。

あとは洋服や生活用品を、まだ開店している内に必要なものを買った。
食事については人間の世界の側の真理奈の家で食べることにした。
「あ、ゲートと言えば、バラージに通じる方はどうなんだろ？一応様子見に行くかな？」
真理奈は大貝町の外れに、ユグドラシルが使っていたもう一つのディメンジョンゲートについて考えていた。
帰りの事はせつなのアカルンの力でそれぞれの町に戻ったので、ディメンジョンゲートは使っていなかったのだ。
そこで、真理奈はバラージ王国に通じるディメンジョンゲートを調べる為に大貝町の外れにある小屋の方へ向かった。

一方、すこやか市でオシマイダー達を浄化したグレース達は変身を解き、エクセルの元に合流した。
最初は彼女の無事を確認したが、大丈夫だと告げる。
その後、互いに情報交換をしていた。
プリキュアの事、妖精の世界の事、魔導師の事、ミッドチルダの事等を教えた。
それだけではなく、このプリキュアの世界で起きていた空間の歪みの事も話した。
「最近話題になったウルトラマンだけじゃなく、あなたの世界にも・・・」
「ええ。ミッドチルダにいる先輩たちが心配だわ・・・」
エクセルはミッドチルダにいるなのはの仲間達の事を心配している。
「心配しないで。私達もあなたを元の世界に戻るのに協力するよ。えーっと・・・」
「あぁ。まだ名前言ってなかったわね？私はエクセル・ロータス。エクセルって呼んで。」

「わたし、花寺のどか。よろしくね、エクセルちゃん。」
その後、はな達やひかる達も自己紹介する。
「ん？」
「どうし・・・うぅぐぅっ!?」
エクセルはのどかの反応が気になり、聞こうとすると、強烈な臭気を感じ、無意識に鼻を抑える。
他の皆も同様である。
「な、なんや、この臭いは!?」
「臭いでプルンス～!?」
余りの強烈な臭気に悶絶する一同。
『ララ様、ここから５ｋｍ先の山奥に臭気の起源を確認されました。』
「臭気の起源!?」
ララはグローブに内蔵されている端末からＡＩの情報を聞く。
エクセルとのどか達はＡＩの情報通りの場所に向かう。

地底の戦士と星の乙女

すこやか市に現れたオシマイダーとノットリガーとメガビョーゲン。

エクセル・ロータスはバリアジャケットにセットアップして立ち向かうが、返り討ちに遭わされる。

その時、ＨＵＧっとプリキュア、スタートゥインクルプリキュア、ヒーリングっどプリキュアが現れ、オシマイダー達を浄化する。

その後、エクセル達の周りに謎の悪臭が漂わせる。

その原因を突き止める為、ＡＩの情報を元に山奥に向かう。

山の麓にある湖にタツノオトシゴのような顔をした怪獣が浸かっていた。

その怪獣の名前は水ノ魔王獣マガジャッパ。

奥奈良湖に出現して以来、銭湯の水等を臭くさせた異臭の塊のような怪獣である。

ウルトラマンオーブのスペリオン光輪をも弾く程の強固な鱗を持つ。

恐らくエクセル達がいた公園に漂う悪臭の正体はマガジャッパだったのだろう。

フワの力でテレポートさせたことで、現場に着いたエクセル達。

「うぅえぇ・・・臭いが強くなった・・・」

「しばらく掃除していなかった小学校のウサギ小屋の臭いなのです・・・！」

「強力吸引車のホースで下水道管を清掃した時の臭いです・・・！」

「長い間シャンプーしていなかった捨てられたワンちゃんの臭いだよ・・・！」

「いや、これはね、洗濯しないで放置したジャージを詰め込んだカバンを開けた時の臭いよ・・・！」

『ララ様、どうやらあの巨大生物が原因のようです。』

「うぅ・・・存在するだけでも生活に支障が出るルン・・・！」

エクセルはマガジャッパを発見するが、近くにいるだけでも漂う悪

臭に悶絶する。
「ブレイブハート、周囲の臭いを消すことができない？」
『残念ですが、あの怪獣から発する臭気を消す手段がありません。しかし、あの怪獣が発する臭気から身を守ることは。』
「それしかないみたいね・・・」
　エクセルはブレイブハートにマガジャッパから発する悪臭を何とかできないか聞くと、臭いを消すことはできないが、臭いを防ぐことはできると言い出す。
「とにかく、あの怪獣を何とかしよう！」
　のどか達は悪臭に耐えつつ、変身アイテムを手にする。
「ミライクリスタル！ハート、キラッと！は～ぎゅ～！」
「スターカラーペンダント！カラーチャージ！」
「スタート！」
「プリキュア・オペレーション！」
「エレメントレベル上昇ラビ「ペエ」「ニャ」「ラテ」！」
「キュアタッチ！」
「煌く星の力で憧れの私描くよ♪トゥインクル、トゥインクルプリキュア♪トゥインクル、トゥインクルプリキュア♪トゥインクル、トゥインクルプリキュア♪スター、トゥインクル♪スター、トゥインクルプリキュア♪あぁ～♪」
「輝く未来を抱き締めて!!みんなを応援！元気のプリキュア！キュアエール！」
「輝く未来を抱き締めて!!みんなを癒す！知恵のプリキュア！キュアアンジュ！」
「輝く未来を抱き締めて!!みんな輝け！力のプリキュア！キュアエトワール！」
「輝く未来を抱き締めて!!みんな大好き！愛のプリキュア！」
「キュアマシェリ！」
「キュアアムール！」
「ＨＵＧっとプリキュア！」
「宇宙に輝くキラキラ星！キュアスター！」

「天にあまねくミルキーウェイ！キュアミルキー！」
「宇宙を照らす！灼熱のきらめき！キュアソレイユ！」
「夜空に輝く！神秘の月明かり！キュアセレーネ！」
「銀河に輝く！虹色のスペクトル！キュアコスモ！」
「スタートゥインクルプリキュア！」
「重なる二つの花！キュアグレース！」
「ラビ！」
「交わる二つの流れ！キュアフォンテーヌ！」
「ペエ！」
「溶け合う二つの光！キュアスパークル！」
「ニャ！」
「時を経て繋がる二つの風！キュアアース！」
「ワン！」
「地球をお手当！ヒーリングっどプリキュア！」
グレース達は変身完了する。
「間に入りにくいんですけど・・・」
エクセルはグレース達が変身した時の流れにツッコミを入れる。
「ってそんなこと言ってる場合じゃない！ブレイブハート！セーットアーップ！」
エクセルはバリアジャケットにセットアップし、変身完了する。
「なんか、私だけ浮いちゃうわね・・・」
エクセルはプリキュアの変身と比較して、自分だけが浮いていると感じ取る。
だがそうは言っていられない。
マガジャッパは浸かっていた湖から上がって、別の湖を求めるかのように移動を始める。
「・・・といけない。ブレイブハート、お願い！」
『デオドライズベール。』
エクセルはブレイブハートに命令を出し、自身とＨＵＧっとプリキュア、スタートゥインクルプリキュア、ヒーリングっどプリキュアを囲むように青い魔法陣を展開する。

グレース達は青い光に包まれる。
「おぉ！臭いがしなくなった！」
「効力は長く続かないわ。あいつを倒すのもそうだけど、臭くした湖を浄化しないと。」
「それじゃ、グレース達は湖をお願い！」
「うん！」
「私も行くわ！」
エクセルとヒーリングっどプリキュアはマガジャッパが浸かっていた湖の臭いを消す役割を担い、ＨＵＧっとプリキュアとスタートゥインクルプリキュアはマガジャッパの撃破に向かった。

その頃・・・
『ネイメア～！待ってたよ～！』
『ヴィヴィオ！リオ！コロナ！お待たせ～！』
暗い部屋の中でモニターを見続けていた黒いコートの人物。
モニターでは学生服を身に纏ったヴィヴィオ達。
その中の１人は髪の色は金髪だが、真理奈にそっくりな少女である。
「ねぇ、アンタ、ホントに悪いことしないの？」
「リンディとの約束でな。」
シャンテは黒いコートの人物を疑わしい目で聞くと、そう答える。
（リンディさんの事を知っている？それに約束って・・・）
ルーテシアは黒いコートの人物の言葉に引っ掛かりを感じた。
「あちらの世界では、もうすぐ大会。ＭＨＣＰ・Ⅸに急がせるか。」
黒いコートの人物はモニターを見た後、別のウィンドウを出す。

その頃・・・

「あの怪獣、どこへ行くつもりなの!?」
「あの怪獣の進行ルートや、先程発見した湖の広さと深さを計算して、小河内貯水池に行く確率が高いです。」
エールはマガジャッパが向かう所が気になり、アムールはマガジャッパの向かう所を計算し、その場所は小河内貯水池だと推測する。
「大変なのです!あの怪獣がそこに着いたら、東京や神奈川の生活に必要な水がダメになってしまうのです!」
「東京や神奈川だけじゃありません!あの怪獣をこのまま放っておいてしまっては、いずれは世界中の水が!」
マシェリとセレーネはマガジャッパを野放しにした場合の事を予想する。
マガジャッパが浸かっていた湖が臭くなってしまった。
その張本人であるマガジャッパが次々と湖に入り、水を臭くさせてしまったら、完全に水が使えなくなり、生活に支障が来たしてしまう。
「なにがなんでも阻止だよ!」
スター達は大急ぎでマガジャッパの進行を止めに向かう。
その時、マガジャッパの頭上に矢じり型の光弾が降りかかる。
マガジャッパはその光弾には受け付けず、弾かれる。
その直後、マガジャッパの前に全身にV字型のクリスタルが表れた黒い巨人が降り立つ。
その巨人の名前はウルトラマンビクトリー。
地底の民・ビクトリアンの青年ショウが変身するウルトラマンである。
ウルトラマンギンガと共にビクトルギエルやエタルガーと戦ったことがある。
「ひどい臭いがしてきて寄って来てみたら、こいつの仕業か。存在するだけで厄介な奴だな。」
ビクトリーは手の甲で鼻を抑える仕草を見せながら、マガジャッパを見る。
「ウルトラマン!」

「キラヤバ～！」
スターはビクトリーを見て、目が星になっている。
ビクトリーはマガジャッパに蹴りを浴びせる。
その後、何度かパンチをするが、今も漂う悪臭に離れてしまう。
近付いて来るマガジャッパはビクトリーを殴りかかるが、ビクトリーはそれを躱し、反撃しようとするが、マガジャッパが放つ悪臭に苦しむ。
マガジャッパはマガ吸引でビクトリーを吸い寄せる。
その後、マガジャッパはマガ臭気を繰り出す。
ビクトリーはマガジャッパの攻撃に苦しみ、地べたに倒れる。
「まずい！」
「助けないと！」
エール達はビクトリーを助けに急行する。
一方、エクセル達はマガジャッパが浸かっていた湖に急行する。
「湖の臭いを消したら、すぐにエール達と合流しましょう！」
「うん！」
エクセルとグレース達は湖に漂う悪臭を取り除いた後、マガジャッパを倒すためにエール達と合流することになった。
湖が見えた瞬間、何かが湖から上がって来た。
姿を現したのは、カエルを思わせるような人間大の怪獣だった。
その怪獣の名は、アンフィビアタイプビースト・フログロス。
下水道らしき場所でナイトレイダーの行動を封じたことがあるスペースビーストである。
惑星ボリスでは、その４倍の大きさで現れた。
そのフログロスが５０体もいる。
「なに、こいつら!?」
「小っちゃいけど、怪獣なのかな？」
「めっちゃ可愛くないよ！」
「この湖に棲みついちゃったの!?」
エクセル達はフログロスの群れを見て驚く。
「来ます！」

フログロスは緑色の火球を吐く。
グレース達はフログロスの攻撃を躱した。
「グレース！フォンテーヌ！スパークル！アース！ここは私に任せて！みんなは湖をお願い！」
「ええっ!?でも、エクセルちゃん！」
「流石にこの数はヤバいよ!?」
「大丈夫！そう簡単にやられないわよ！」
「・・・分かった。でも無理しないでね！」
「了解！」
エクセルはグレース達に湖の消臭を頼ませ、フログロスの群れの相手を引き受ける。
その様子を上空から見下ろす人物がいた。
その容姿は小柄で眼鏡をかけており、細身の長杖を手に持ち、アカデミックドレスを身に纏う少女である。
「あやつの言った通りじゃな。キキは生きておる。そして・・・」
アカデミックドレスの少女は内ポケットから黄道十二星座のおとめ座の九つの星と八本の線に、そのうち一つの星が大きく描かれたピンクのメモリーカードを出した。
そのメモリーカードが淡く光っている。
「また新しい戦士が生まれるようじゃの。」
アカデミックドレスの少女は今も淡く光っているメモリーカードを見てそう言う。
フログロスは口から長い舌を出し、エクセルの首を巻き付ける。
フログロスはそのままエクセルを引きずり込む。
「ナメないでよね！」
『アクセルシューター。』
エクセルはアクセルシューターでフログロスを命中させる。
フログロスはエクセルの攻撃により、舌が残された状態で爆散される。
エクセルは首に巻き付かれた舌を振り解く。
フログロスの群れは緑色の火球を一斉に吐き出す。

『ラウンドシールド。』
エクセルはそれに対し、ラウンドシールドで守りを固める。
「こいつらもそうだけど、あの怪獣に好きにさせてたまるもんですか！水は人だけじゃない！多くの動物や植物にも必要なエネルギーなの！それを奪おうとするなんて、許さないんだから！」
エクセルは目の前にいるフログロス達だけでなく、マガジャッパにも湖に被害を与えたことに怒りに燃える。
その時、アカデミックドレスの少女が持つメモリーカードの光が強くなり、それが光の球となり、エクセルの頭上に降りかかる。
エクセルはピンクの光に包まれる。
「へっ？えぇっ!?何これ!?」
エクセルは突然の事に驚きを隠せない。
その時、光の球がスマートフォン型のアイテムに変化する。
「な、なによ?!」
エクセルは動揺を隠せなかった。
スマートフォン型のアイテムの画面に「Ｔａｐ　ｔｈｅ　ｌｉｎｋ」と表示する。
エクセルは恐る恐るアイテムにタッチする。
「ファンタジック・ダウンロード！」
すると、画面がピンク色に拡がり、そこからピンクの光が溢れ出す。
エクセルはピンクの光に包まれる。
エクセルのバリアジャケットが解かれ、代わりにピンクのコスチュームを身に纏い、天使の翼をモチーフにしたカチューシャの真ん中に星の装飾が飾られ、おとめ座の星座が描かれたスマホポーチが腰に付けられている。
「明るく輝く乙女の星！キュアスピカ！」
エクセルは自身をキュアスピカと名乗る。
その時、スピカはふと我に返る。
「・・・て、えぇ～っ!?私、プリキュアになっちゃった!?ていうか、明るく輝く乙女の星、キュアスピカって何勝手に名前決めてるわけ!?」
スピカは今の姿に動揺するばかりである。

だが、そんなことを言ってる場合ではないのである。
フログロスはそのまま緑色の火球を発射する。
スピカはフログロスの攻撃に気付き、ジャンプして避ける。
「うわっ！飛行魔法を使った訳じゃないのに、こんなに高く跳んでる！」
スピカは自身のジャンプ力に驚く。
フログロスはスピカの方に見上げて、火球を放つ。
スピカは飛行魔法でフログロスの攻撃を避けまくる。
そして、急接近でフログロスに近付き、腹部に蹴りを入れる。
一体のフログロスは他のフログロスに巻き込まれる形で衝突し、ぶつけられたフログロスの群れ共々爆散される。
「凄い。ブレイブハートでセットアップした時とは別の意味で強力だわ・・・」
スピカは自身の戦闘力にも驚きを隠せなかった。
いろいろ思う所はあるが、後回しにして、目の前のフログロスの群れに目を向ける。
スピカは戦闘を再開する。

ＶＳマガジャッパ

すこやか市に正体不明の悪臭が漂い始めた。
ＡＩの情報を元に山奥に急行したエクセル達。
悪臭の正体は水ノ魔王獣マガジャッパから発する臭気だった。
エクセルはグレース達に防臭対策をした後、湖の消臭を行なおうとする。
エール達とスター達はマガジャッパを追うと、ビクトリアンの戦士・ウルトラマンビクトリーが現れた。
しかし、ビクトリーはマガジャッパに苦戦する。
エクセル達も湖が目前に近付くと、スペースビーストのフログロスの群れと遭遇する。
エクセルはグレース達を先に行かせ、フログロスの群れに立ち向かう。
その時、エクセルは突如、ピンクの光に包まれ、キュアスピカに変身した。
フログロスの群れは一斉に火の玉を放つ。
スピカは飛行魔法でフログロスの群れの攻撃を次々と躱し、群れの中の１体のフログロスに踵落としを繰り出す。
フログロスはスピカの攻撃で、顎が地面に叩きつけられるように突っ伏せられる。
それと同時にスピカの踵落としによる衝撃でクレーターができ、周囲のフログロスはそれに巻き込まれて、宙に浮かび上がる。
「これが・・・プリキュアの力・・・」
スピカは先程までの戦闘中、自身のプリキュアとしての力に驚嘆する。
『エクセル。』
「ブレイブハート！」
スピカは声がした方に振り向くと、青い光の翼を展開したブレイブハートがスピカの傍に近付いた。
「さっき変身した時に弾き飛ばされちゃったんだ・・・」

『その姿、グレース達と同じ姿のようですが・・・』
「私自身もよく分かんなかったのよ。その話は後でするわ。ブレイブハート、まだイケる？」
『問題ありません。』
　ブレイブハートは宝石の姿からシューティングモードに変形し、スピカはそれを握る。
「あんまり時間をかけてられない。さっき駆けつけて来た巨人もあの怪獣に苦戦してしてるわけだし。」
『ディバインバスター。』
　スピカは湖を庇うように、フログロスの群れに立ち、ブレイブハートを向ける。
　ブレイブハートの先端に青い光球を形成し、青い光線を放つ。
　フログロスの群れはスピカの攻撃により、消滅する。
「ブレイブハート、これで全滅？」
『はい。残るはあの怪獣のみです。』
　スピカはブレイブハートにフログロスの数を確認させたところ、全滅したと伝達される。
「トリプルハートチャージ！」
「舞い上がれ、癒やしの風！」
　その頃、グレース達はマガジャッパが浸かっていた湖に到着し、そこに技を放とうとする。
「届け！」
「癒しの！」
「パワー！」
「プリキュア・ヒーリング・ハリケーン！」
「プリキュア・ヒーリング・オアシス！」
　グレースとフォンテーヌとスパークルはプリキュア・ヒーリング・オアシスを、アースはプリキュア・ヒーリング・ハリケーンを放つ。
　これによって湖から放っている臭気は消えた。
「ビクトリウムスラッシュ！」
　その一方、ビクトリーはビクトリウムスラッシュを放つが、マガ

ジャッパの全身の鱗により弾かれてしまう。
マガジャッパは自身を透明化する。
ビクトリーは周囲を見渡すが、マガジャッパの姿が見当たらない。
その時、背後から吸い寄せられるような感覚が襲う。
ビクトリーの背後には、マガジャッパがいて、マガ吸引でビクトリーを吸い寄せる。
「ギンガファイヤーボール！」
ビクトリーがマガジャッパに捕まえられる直前、火の玉がマガジャッパに命中され、ビクトリーを捕らえ損ねる。
「今のは！」
ビクトリーは火の玉が降りかかってきた方向に見上げると、所々にクリスタル状の発光体が付いている巨人がビクトリーの前に降り立つ。
その巨人の名前はウルトラマンギンガ。
ＵＰＧ隊員・礼堂ヒカルが変身する未来から来たウルトラマンである。
ビクトリーと一緒にビクトルギエルやエタルガーを倒した。
「ヒカル・・・！」
「久しぶりだな、ショウ。きっつい臭いがして来てみれば、お前も巻き込まれたみたいだな？」
「あぁ。こいつがその臭いの元凶だ。」
ビクトリーは目の前に立ち上がって敵意？き出しにして目を向けてきたマガジャッパが悪臭の原因だとギンガに教える。
「成程、温泉郷で湧き出る硫黄の臭いを上回る臭さだな・・・とっととこいつを倒して、きれいサッパリ洗い流しとこうぜ！」
「あぁ！」
ギンガはストリウムブレスの力でウルトラマンギンガストリウムにパワーアップする。
「ウルトランス！ＥＸレッドキングナックル！」
ビクトリーの右腕が鈍器のような赤黒く大きな腕となった。
「えぇ～っ!?」

「腕が変わったのです～!?」
エール達はビクトリーの腕が変わったことに驚く。
これがビクトリーの得意技・ウルトランスである。
ショウが持つビクトリーランサーで怪獣のスパークドールズをリードすることで、その怪獣の体の一部を自らの武器として使うことができるのである。
ビクトリーはＥＸレッドキングナックルでマガジャッパに一撃を与える。
マガジャッパは先程までビクトリーの技が通用しなかったが、今の攻撃でようやくダメージを受ける。
「シネラマショット!」
ギンガはストリウムブレスの力でシネラマショットを放つ。
マガジャッパはギンガの技に後退りする。
「ウルトランス!シェパードンセイバー!」
ビクトリーは水晶でできた剣が現れ、それを握る。
ビクトリーが持つ剣・シェパードンセイバーは地底聖獣シェパードンのスパークドールズをロードすることで召喚することができる。
「よし!みんな、決めるぞ!」
ギンガはエール達とスター達に一緒に止めを刺そうと申し出る。
エール達とスター達はギンガの提案に乗る。
「心のトゲトゲとんでいけ～!」
エールとアンジュとエトワールはそれぞれ、エールタクト、アンジュハープ、エトワールフルートで演奏し、虹色のエネルギーを集める。
「プリキュア・トリニティ・コンサート!」
エール達はプリキュア・トリニティ・コンサートを放つ。
「Ａｒｅ　ｙｏｕ　ｒｅａｄｙ?」
「行くのです!」
マシェリとアムールはツインラブギターを演奏する。
「心のトゲトゲ!」
「ズッキュン打ち抜く!」

「ツインラブ・ロックビート！」
マシェリとアムールはツインラブ・ロックビートを放つ。
「宇宙に輝け！イマジネーションの力！トゥインクルステッキ！」
スター達はトゥインクルステッキを召喚する。
「スター☆トゥインクル！」
「ミルキー☆トゥインクル！」
「ソレイユ☆トゥインクル！」
「セレーネ☆トゥインクル！」
「プリキュア・サザンクロス・ショット！」
スター達はプリキュア・サザンクロス・ショットを放つ。
「プリンセススターカラーペン！おとめ座！くるくるチャージ！」
コスモはレインボーパフュームにおとめ座のプリンセススターカラーペンにセットし、ハンドルを回すと、パワーがチャージする。
「プリキュア・レインボー・スプラッシュ！」
コスモはプリキュア・レインボー・スプラッシュを放つ。
「シェパードンセイバーフラッシュ！」
「コスモミラクル光線！」
ビクトリーはシェパードンセイバーフラッシュを、ギンガはコスモミラクル光線を放つ。
ギンガとビクトリー、ＨＵＧっとプリキュアとスタートゥインクルプリキュアの攻撃がマガジャッパに命中する。
マガジャッパは２人のウルトラマンと２組のプリキュアの攻撃によって消滅する。
「やったーっ！」
エール達とスター達はマガジャッパを倒した事に喜ぶ。
グレース達とすでにスピカの変身を解いたエクセルはエール達の元に合流する。
「あれ？もうやっつけちゃったの？」
「もう！遅いのです！」
スパークルはすでにマガジャッパが倒されたことにキョトンとしており、マシェリはそのスパークルに叱る。

「湖に行く途中凄い衝撃音が聞こえたけど、あれがグレース達が言ってた・・・」
「うん！ウルトラマンだよ！最近世界中に出てきた怪獣達をやっつけてくれたんだ！」
グレースはエクセルに目の前に立っているギンガとビクトリーの事、ウルトラマンの事を話した。
その様子を木陰から窺うアカデミックドレスの少女。
「あの少女、先の戦闘からしてプリキュアの力を使いこなせておらんな・・・今後の為にどうにかしようかの・・・」
アカデミックドレスの少女はエクセルを見て、思ったことを言った後、その場から離れる。

その頃、真理奈は大貝町郊外にある小屋に到着した。
その小屋の中には、前にイヴィルアイの破壊、亜久里達の救出のための作戦を実行する時に使用したディメンジョンゲートが配置されていたのだ。
その時は真理奈も一緒だった。
しかし、真理奈が再びその小屋の中に入った時には、すでにディメンジョンゲートがなかった。
「いつの間にかなくなってるわね・・・スーパーＧＵＴＳが拾ったのかしら・・・」
真理奈は中を隈なく調べる。
「ん？」
真理奈は何かを発見する。
真理奈が見つけたのは、チェーンで通した２つの指輪である。
「前にここに来た時、こんなのあったっけ？」
真理奈はネックレスを見て、先述の作戦の時にあったかどうか分からない素振りをする。
その時、真理奈の背後から足音や息遣いが聞こえる。

真理奈は後ろに振り替えると、スーパーＧＵＴＳの隊員服を着た真理奈と同い年位のセミロングウェーブの少女が入ってきた。
「ハァ、ハァ・・・確か・・・この小屋に・・・！あなた・・・！」
「な、なによ!?」
「あ、い、いいえ・・・」
「どうしたのよ?そんな切羽詰まったのような顔して?」
真理奈は少女がいきなり入ってきた事に驚きつつも、慌てた表情をしていた少女に質問する。
「それは・・・あっ！」
少女は真理奈が持っているネックレスを見て目を見開く。
「返して！」
「うおぉっ?!」
少女は真理奈からネックレスを取り上げる。
「そのネックレス、アンタのなの?」
「あ、ごめんなさい。驚かして・・・」
「いや、別にいいけどさ、そのネックレス、形見みたいなもんなの?そのネックレスのチェーン、ガチャポンのオモチャについてるのと同じ構造だったし、自分で拵えた物かなって・・・」
真理奈は少女にネックレスの事を聞く。
確かに少女が取り上げたネックレスは、オモチャについているボールチェーンを連結して、それを指輪に通したシンプルな方法で出来た物だった。
「えぇ・・・父と母の指輪なのよ・・・」
少女は真理奈の質問に答える。
「ありがとう、あなたが拾ってくれたのね。」
「えぇ。次は落とさないでよ?えぇっと・・・」
「あぁ。私はミソノ・ホタル。あなたは新真理奈ね?ヒビキ隊長から聞いたわ。」
少女は自らをミソノ・ホタルと名乗る。
「じゃ、私はこれで。」
「あ、うん。」

ホタルは真理奈と別れを告げ、一瞬真理奈の方に振り向いたが、すぐさま立ち去って行った。
真理奈はそれを見て、まるでホタルは自分の事を知っているような感じを察する。
しかし、真理奈はそんなことを考えても仕方ないと言わんばかりに、自分も小屋から出て、帰宅することになった。

時が過ぎて、夜になった頃・・・
「じゃあ、まのんは登校日の後、すぐにマヤ達と一緒に?」
「うん。ヴィヴィオとアインハルトちゃん、トーマとリリィも一緒にね。海外プリキュアの皆に奪ったプリカードを返すって。」
ログハウスで当分過ごすことになったなのは達の所に訪れた真理奈。
なのはの話によると、まのんはひめ提案の『マヤの全国謝罪巡礼ツアー&海外プリキュアの共同作業』の為、世界各地の海外プリキュアの元へ転々と飛んで行ったのである。
ヴィヴィオとアインハルト、トーマとリリィも一緒である。
ちなみに海外へ行く時、ふしぎ図書館経由で行った。
真理奈はなのはの話を聞いて、前にトランプ共和国でマヤの今後の事をまりあと話した時、ふしぎ図書館の事を聞いたので、更に先日の祝勝会で旅行の事を思い出し、「本当にそれ使ったんだ・・・」と呟く。
「むー・・・私も行きたかったよ~・・・」
「オイオイ・・・」
なのはの我儘に真理奈は呆れる。

その頃、エクセルはちゆの家で泊まることになり、布団を敷いていた。

マガジャッパとの戦闘の後、旅館沢泉で自身の体を清潔に洗い流していた。
マガジャッパの影響は旅館にも出ており、閉館もままならない状況だった。
しかし、マガジャッパを倒した事により、温泉がいつも通り使用可能になっていた。
ヒカルとショウは温泉で清潔にした後、ギンガとビクトリーに変身し、何処かに飛び立って行った。
エクセルは明日、すこやか市から出て、他の町に行き、なのは達を捜すことにした。
「なのはさんもこの世界にいるんなら、捜さないとね。」
エクセルは夜空の星々が見える窓から見てそう言う。
（それに、これの事も調べないと・・・）
エクセルはポケットからスマートフォン型の変身アイテムを出し、それを見つめ呟く。

ユグドラシルの残党

すこやか市に現れた水ノ魔王獣マガジャッパ。
そのマガジャッパの前にウルトラマンビクトリーが降り立つ。
しかし、マガジャッパの体から放つ悪臭により苦戦するビクトリー。
その時、ウルトラマンギンガが介入し、共にマガジャッパを倒すことができた。
湖付近に現れたフログロスもエクセルが変身するキュアスピカによって倒される。
悪臭が残っている湖もヒーリングっどプリキュアの活躍により元通りとなった。
次の日、はなからの電話で、なのは達は小泉学園にいると聞き、すこやか市を後にして、なのは達の元に向かった。
ちょうどその頃・・・
「あの人、どこにいるのかしら・・・この街のどこかにいると思ったんだけど・・・」
小泉学園でキョロキョロしながら移動するミコト。
ミコトが捜しているのは、昨日出会ったシンである。
ミコトは昨日の登校日の帰り、シンを捜しに行ったが、見当たらなかった。
ミコトがシンを捜しているのは、昨日の事故の事で謝りたかったからである。
ミコトはあっちこっちへと走り回る。
「早乙女？何やってんの？」
ミコトは突然声を掛けられてドキッとする。
振り向くと、そこには真理奈がいた。
「真理奈さん！」
「さっきからキョロキョロして。昨日の登校日の時、落とし物でもしたの？」
「そう言うわけじゃないですけど・・・」

真理奈はミコトの挙動不審振りに首を傾げる。
その後、ミコトは登校日当日、バスがエンジントラブルによって遅刻しそうになった時、歩道橋から飛び下りた瞬間、自分のスカートが筋トレをしていた男に被せた状態、つまり自分のスカートの中をその男に見られたという事になった。
その筋トレをしていた男は言うまでもなくシンである。
ただ、ミコトはその男の名前を聞かなかったので知らない。
その時のミコトは頭が混乱していたので、本人に事情も言えなかったし、遅刻しそうになったとはいえ、謝り方が悪かった。
だからミコトはその男に会って、ちゃんと謝ろうと思って町中探し回っていたのである。
(シン兄さん、こんな所に来てまで筋トレしてたのかよ・・・つーか、そんなハプニングが起きてたんてね・・・)
真理奈はミコトの話を聞いて、その男の事をシンだと気付き、大貝町のぶたのしっぽ亭で居候していたシンが小泉学園まで来て筋トレしていた事と、ミコトにラッキースケベをやらかした事に呆れていた。
「あー・・・早乙女?その人の事知ってる気がするわ。」
真理奈は他人事のようにシンの事を知っているとミコトに言う。
「本当ですか!?で、彼はどこに?」
「少なくともこの町には住んでないわ。大貝町の洋食店で居候してる。」
真理奈はミコトにシンが小泉学園にはいなく、大貝町にいることを教える。
「あ、あの!そこに連れて行ってくれませんか!?」
「うおっ?!いきなり顔近付けんな!まぁ、別にいいけどさ・・・」
「ありがとうございます!」
ミコトは真理奈に懇願すると、真理奈からＯＫを貰う。
(まぁ、シン兄さんの事だから怪獣退治に出払ったんだろうけど・・・)
真理奈はシンがゼロになって怪獣退治に向かったはずだから、そう簡単に会えるものではないと予想する。

だからと言って、今のミコトの話の内容からして、ミコトもそうだが、シンにも謝った方がいいと真理奈は思う。
真理奈とミコトはすぐに大貝町に向かおうとしたが、突然近くで爆破を起こした。
２人は悲鳴を上げながらしゃがみ込む。
真理奈達は爆破した方向に振り向く。
「ホシイナ～！」
「ナ～ケワメ～ケ～！」
真理奈達が見たのは、ジェット機のホシイナーとカマキリのナケワメーケである。
「ヒッ!?む、虫!?」
「ホシイナーにナケワメーケ!?ユグドラシルはとっくにトランプ共和国やホープキングダムにとっ捕まえられたはずなのに!?」
ミコトはカマキリナケワメーケを見て身じろぎする。
真理奈はジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケを見て驚きを隠せなかった。
ホシイナーとナケワメーケはユグドラシルが使役していた物だが、トランプ共和国とホープキングダムの協力の基に拘束した為、ホシイナーとナケワメーケを使う者はいないと思った。
しかし、そのホシイナーとナケワメーケが目の前にいる。
真理奈とミコトはとりあえず、ジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケから逃げ出す。
その時、逃げた先に軽装備の鎧を着込んだ男たちが立ち塞がった。
「なによ、アンタ達!?」
「そこまでだ。ウルトラマンティガ。」
「イヴィルアイの借りを返させてもらうぞ。」
軽装備の男達は真理奈にそう言い出す。
（イヴィルアイ!?まさかこいつら、あの時の!?）
真理奈は目の前にいる軽装備の男達の発言からして、バラージ王国のダンスホールの扉の前を見張っていたユグドラシル兵だと気付く。
「そこの娘共々、バラージ王国に来てもらう。ホシイナー！ナケワ

メーケ！」
「ホシイナ～！」
「ナ～ケワメ～ケ～！」
一人のユグドラシル兵の命令で真理奈とミコトに近付くジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケ。
その時、突然ジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケが背後から衝撃を受け、遠くに飛ばされた。
「なにっ!?」
「何者だ!?」
ユグドラシル兵は突然の流れに驚きを隠せなかった。
ユグドラシル兵はジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケがいた所に振り向くと、キュアブラック、キュアホワイト、シャイニールミナスがいた。
「ブラック！ホワイト！ルミナス！」
「大丈夫ですか!?」
「早くこの子を！」
真理奈はホワイトの言葉に従い、この場から去った。
「待て！」
ユグドラシル兵は真理奈とミコトを追いかける。
ブラック達はジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケの相手をする。
「登校日を終えたばっかなのに、ユグドラシルが出てくるなんて、有り得ない！」
「全員捕まったと思ったんですが・・・」
「とにかく、ホシイナーとナケワメーケを浄化して、ユグドラシルを追いましょう！」
ジェット機ホシイナーはウィングの下のミサイルを発射し、カマキリナケワメーケは両腕の鎌を振って三日月状の風の刃を放つ。
ルミナスはそれをバリアで防ぐ。
ブラックは今も発射し続けているジェット機ホシイナーの攻撃を躱し、蹴りでジェット機ホシイナーの腹に一撃を入れる。

ホワイトはカマキリナケワメーケが鎌を振り下ろした瞬間、ホワイトはそれを受け流し、鎌を掴んで放り投げる。
それによってカマキリナケワメーケはジェット機ホシイナーにぶつかり、そのまま地面に叩きつけられる。
「ルミナス・ハーティエル・アンクション！」
ルミナスはルミナス・ハーティエル・アンクションを放ち、ジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケの動きを封じた。
「今よ、ブラック！」
「うん！」
ブラックとホワイトは互いの手を繋ぐ。
「ブラックサンダー！」
「ホワイトサンダー！」
ブラックとホワイトはもう片方の手を頭上に掲げると、黒と白の稲妻が集約する。
「プリキュアの美しき魂が！」
「邪悪な心を打ち砕く！」
「プリキュア・マーブル・スクリュー・マックス！」
ブラックとホワイトはプリキュア・マーブル・スクリュー・マックスを放つ。
それによってジェット機ホシイナーとカマキリナケワメーケは元のジェット機の模型とカマキリに戻った。
ブラック達は真理奈達が逃げた先に振り向き、ユグドラシルの後を追った。
一方、真理奈達を追いかけたユグドラシル兵は、真理奈達が見失い、キョロキョロと探していた。
兵士達は今、小泉学園駅前にいる。
「くそっ！どこ行った!?」
「おい！そっちは見つけたのか!?」
「いや、見つからなかった・・・」
「くそっ！」
兵士達は互いの情報を共有させるが、どれも真理奈を見つからな

かったという事だけだった。
「今の騒動で野次馬共が次々と・・・」
「一旦退却するぞ。」
兵士達はオレンジ色の宝石を頭上に掲げると、瞬間的に消えた。
しばらく経った後、９０Ｌの丸型のゴミ箱の蓋が浮き上がる。
そのゴミ箱の中から真理奈とミコトが出てきた。
真理奈達はゴミ箱の中にはゴミ袋以外何も入っていないので、中に入れたのだ。
それが幸いし、ユグドラシル兵をやり過ごすことができたのである。
「フゥ・・・なんとかやり過ごしたか・・・」
「うぅ・・・まさかゴミ箱の中に隠れるなんて・・・」
真理奈とミコトはゴミ箱から出る。
「真理奈さん、今の人達って・・・」
「えぇ。まのんがメールで伝えたユグドラシルよ。」
真理奈は先程の兵士達がユグドラシルであることをミコトに教えた。
「・・・ったく、何がどうなってんのよ?」
真理奈はゴミ箱の蓋を戻しながらユグドラシルが小泉学園に来た事に疑問を感じる。
その時、どこからか獣の咆哮が響き渡る。
真理奈はもしやと思い、空の方に見上げる。
真理奈の察した通り、空間の歪みが発生していた。
その歪みから両頬に赤い袋のような物体を持つ鳥のような怪獣が現れた。
その怪獣の名は火山怪鳥バードン。
ウルトラマンタロウとゾフィーを倒したことがある怪獣である。
両頬の毒袋で毒を生成して、嘴でタロウとゾフィーを倒した。
「怪獣!?」
真理奈とミコトはバードンの登場に驚く。
バードンは真理奈達の方に視線を移す。

「やっべぇ・・・逃げるわよ!」
真理奈達は直ぐ様逃げ出す。
バードンはそんな真理奈達を追う。
「キャアァッ!」
ミコトは逃げる際中転んでしまう。
「早乙女!」
真理奈はミコトの許に駆け寄り、立たせようとするが、バードンがもうすぐそこに来ていた。
バードンは嘴を大きく開いて真理奈とミコトを襲う。
真理奈はミコトを庇うように蹲る。
「させるか!」
その時、バードンが何者かに蹴り飛ばされ、背中に叩きつけられる。
その正体はゼロである。
「ぽっと出のテメェが人間を餌にしようなんざ、２万年早いぜ。」
ゼロはバードンに軽く挑発する。
バードンは立ち上がり、ボルヤニックファイアを放つ。
ゼロはルナミラクルゼロのタイプチェンジし、ミラクルゼロスラッガーを展開し、竜巻を形成して、バードンの火炎放射を掻き消す。
バードンは飛翔し、ゼロに突撃しようとする。
ゼロはゼロスラッガーを両手に持ち、すれ違いざまにバードンの毒袋を斬った。
バードンは自身の毒袋が斬られた事で、また地面に叩き落とされる。
ゼロはストロングコロナゼロにタイプチェンジし、バードンの許に近寄る。
「そんなに飛びてぇなら、俺が飛ばしてやるぜ!ウルトラハリケーン!」
ゼロはバードンを捕まえ、ウルトラハリケーンで天高く飛ばす。
「ガルネイトバスター!」
ゼロはガルネイトバスターでウルトラハリケーンで飛ばされたバードンに命中させる。

それによって、バードンは爆発四散される。
「やっぱすげぇ・・・」
「あれが・・・ウルトラマン・・・」
真理奈とミコトは絶体絶命の状況から脱した後、ゼロとバードンの戦いを見届けていた。
結果はゼロの圧勝で、ただ驚嘆するだけであった。
ゼロは自身に光を包み、人間の姿、つまりシンの姿になる。
「えぇっ!?」
ミコトはその光景を見て、ゼロの正体がシンだという事に驚く。
「大貝町に行く手間が省けたわね・・・」
「あの人が、ウルトラマンゼロ・・・!?」
「えぇ。ルルイエの一件も世話になったわ。」
真理奈達はシンの許に向かう。
「おーい!」
「お、真理奈か。」
「流石天下のウルトラマンゼロ様ね。」
「へへっ、あったりめーよ。ん?そこにいるのは?」
ゼロは真理奈の隣にいるミコトを見て、見覚えがあるなと言いたげな表情が出る。
「あ、あのっ、えっと・・・」
「早乙女、落ち着いて言いなよ?」
ミコトは昨日の事を思い出して、言い辛そうに口籠る。
そんなミコトに真理奈は落ち着くように指摘する。
「もしかして、昨日の娘か?」
「あ、はい。早乙女ミコトと言います。」
「俺はモロボシ・シンだ。昨日は悪かったな?」
「あぁ、いえ!私の方こそ、すみませんでした!」
シンとミコトは昨日の出来事の事で互いに謝る。
(捕まえ損ねたユグドラシルの残党・・・今度は何をしようとするつもりなのかしら・・・)
真理奈はそんなシンとミコトとは他所に先程襲ってきたユグドラ

シルの事を考える。
「真理奈ーっ！」
　真理奈は自身に呼ばれた声を聞き、振り向くと、なぎさ達が駆け付けてきた。
「なぎさ！ほのか！ひかり！」
「無事でよかったです。」
「あのユグドラシルはどうしたの？」
「もうどっか行っちゃったわ。危ない所だった・・・」
　なぎさ達は真理奈とミコトの無事に安心した。
　その後、真理奈はなぎさ達にミコトの事を紹介し、ミコトが手伝っている珈琲店でコーヒーをご馳走した。

ユグドラシルの反撃

ミコトがシンを捜している最中、真理奈と会い、シンが働いている大貝町のぶたのしっぽ亭に行こうとした時、ユグドラシルの残党と遭遇する。

ユグドラシルは真理奈達にホシイナーとナケワメーケを差し向けた。

しかし、ふたりはプリキュアＭＡＸ　ＨＥＡＲＴによってホシイナーとナケワメーケを浄化する。

ユグドラシルの残党から逃げ切った真理奈達はその直後に火山怪鳥バードンに襲われる。

だが、ウルトラマンゼロの妨害により、真理奈達は無事だった。

そのバードンもゼロによって倒された。

一方、真理奈達を取り押さえられなかったユグドラシルの残党達はバラージ王国に戻っていた。

「くそっ!あと一歩のところだったのに・・・!」

兵士は悔しそうに机を殴る。

もう1人の兵士は帽子の形をした物体を出し、チョンと触れる。

ドーム状の中から映像が流れる。

その映像は3体の巨人の石像である。

左から順番に見ると、右腕に武器が装備している巨人、女性の体形をしていた巨人、筋肉質な体をした巨人の石像が並んでいる。

「アイツが持つスパークレンスの力を利用して、あの巨人の力を手に入れればジョナサンの政など・・・」

兵士は3体の巨人像の映像を見て悔しがる。

「セレナの方はどうなっている?」

「あいつなら問題ない。操りの輪の効能は完璧だ。今頃地下で魔獣を討ち取っている頃だろう。」

「実際、あの変わった機械の集団を一人で片づけたくらいだからな。」

兵士達はセレナの状態について語り合っていた。

「あの機械、再利用したんだろ?」

「あぁ。スポンサーのおかげで修理は終わったし、妖精界は勿論、地球にはない力があるからトランプの国を制圧することも容易い。」
兵士達は先程言った機械について話した。
「みんな！トランプ共和国制圧作戦の準備は出来た！」
突然、扉から別の兵士が入ってきて、中にいる兵士達に報告する。
「セレナが殲滅した機械兵器集団は実戦に出せる状態になった！近辺に空間の歪みで現れた怪獣達も、すでに２０体確保している！例のクローン怪獣も完成した！いつでも作戦を実行できる！」
兵士は一通りに報告した。
「よし。俺達はその間、スパークレンスの奪取に向かう。スポンサーから受け取った奴のテストもあるからな。セレナも連れて行く。隊長にそう伝えろ。」
「分かった！」
兵士はスパークレンスの奪取の事を報告しに、部屋を後にする。

その頃、エクセルはなのは達がいると聞いている小泉学園に到着した。
「ちゆから分けてもらった電車代のおかげで着いたわね。後で返しとかないと・・・」
エクセルはすこやか市から小泉学園への電車代をちゆから受け取り、その金でここまで来たのだ。
「あれー？エクセル？」
「へっ？」
エクセルは突然声を掛けられ、振り向くと、なのはとユーノがいた。
「え？えっ？えぇっ!?な、なのはさんにユーノ司書長!?何で子供の姿に!?」
エクセルは目の前にいる少年少女がなのはとユーノだと分かり、捜す手間が省いて安心したと思ったが、それ以上にエクセルが知っているなのはとユーノは大人だったはずなのに、子供の姿になっていたことに驚きを隠せなかった。

なのはとユーノは予想通りのリアクションに苦笑いする。
なのははエクセルにプリキュアの世界に来るまでの経緯を話した。
「信じらんない・・・」
「まぁ、気持ちは分かるけどね・・・」
エクセルはなのは達がプリキュアの世界に来た経緯を聞いた今でも驚く一方である。
「せっかくの休暇なのにごめんね?巻き込まれたみたいで・・・」
「あぁ、いえ!なのはさんが責める事じゃないですよ!」
なのはは申し訳なさそうに言うが、エクセルは慌てて宥める。
「でも、ヴィヴィオ達もその空間の歪みに・・・」
「うん。最近出没した怪獣達やウルトラマンも、その歪みの影響だろうね・・・」
「封絶結界が展開できなくなったのも、そのせいですよね・・・」
なのは達は空間の歪みについて話し合った。
その時、どこからか衝撃音が鳴り響いた。
「なに!?」
「近いね!ユーノ君、行こう!」
「うん!」
「エクセルも!」
「はい!」
なのは達は先程の衝撃音の発生源の所に向かう。

その数分前・・・
「フ〜、やっぱりコーヒーは落ち着くわね・・・」
シン達はミコトの招待で、彼女が手伝っている珈琲店ウィンヒルでコーヒーをご馳走した。
そこで、ベローネ学院の先輩後輩の会話や、ゼロの事とゼロの仲間の事を話していた。
その後、コーヒーを飲み干した後、ウィンヒルを後にした。
ちなみに、コーヒー以外にもサンドイッチやポテトもご馳走になっ

たが、全部ミコトの奢りである。
「でも、驚いたよね？ミコトは元々妖精の世界から来たって言うの。真理奈、知ってたんでしょ？何で黙ってたの？」
「ワリィワリィ、早乙女にはその件について内緒にするように言われてさ。シン兄さんには気付かれたみたいだけど。」
「あ～、あの時はびっくりしたぜ。いろんな意味で。」
「あ、アハハ・・・」
なぎさはシンからの話でミコトは妖精の世界の出身である事を知り、真理奈にこの事実を知っている事を黙っていたことに尋ね、真理奈はその訳を答えた。
一方のシンはミコトの身体能力を思い出すと同時に、その時の事故を思い出しながら言うと、ミコトは顔を赤らめながら苦笑いしていた。
「ホシイナ～！」
「ナ～ケワメ～ケ～！」
シン達の雑談中、巨木のホシイナーと信号機のナケワメーケがシン達を取り囲むように降り立つ。
「ホシイナーにナケワメーケ!?」
「おいおい、まさか・・・」
真理奈は巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケを見て、嫌な予感を感じ取る。
「先程は世話になったな？」
シン達は声がした方に振り向くと、真理奈とミコトを襲ってきたユグドラシル兵達がいた。
「あなた達！」
「もう！しつこい！」
なぎさとほのかはハートフルコミューンを出す。
「おっと！お前達の相手は奴にさせてもらう。」
なぎさとほのかは兵士の発言に首を傾げるが、その瞬間、二人の周囲に落雷が起きる。
「雷!?こんないい天気に!?」

（今の雷・・・魔法!?）
真理奈は突然の雷に驚き、ミコトは今の雷に心当たりがあるように感じた。
その時、巨木ホシイナーの枝から飛び下りる少女が姿を現す。
「なに?この金ぴかの鎧の女は?」
「あの雷、この人が?」
真理奈とミコトは目の前にいる頭に輪っかが嵌められ、黄金の鎧を纏い、その下に青いドレスを着用した少女を見てそう言う。
「セレナ、そこにいる2人はユグドラシルの革命を阻んだプリキュアだ。奴らを倒せ。」
兵士は黄金の鎧の少女・セレナになぎさとほのかがプリキュアだと教え、倒すように命令すると、セレナは命令通りに従い、剣を抜き、それをなぎさとほのかに向ける。
なぎさとほのかはハートフルコミューンにプリキュアハートをセットし、手を翳す。
その後、互いの手を繋ぎ、もう片方の手を挙げる。
「デュアル・オーロラ・ウェイブ!」
なぎさとほのかは虹色の光に包まれ、なぎさはキュアブラックに、ほのかはキュアホワイトに変身する。
「光の使者!キュアブラック!」
「光の使者!キュアホワイト!」
「ふたりはプリキュア!」
「闇の力のしもべ達よ!」
「とっととお家に帰りなさい!」
セレナはブラック達の変身完了直後に走り出し、ブラック達を襲い掛かる。
ブラックとホワイトはセレナの剣を躱し、その後にブラックはパンチのラッシュを繰り出し、ホワイトはキックの応酬を繰り出す。
一方のセレナは剣でブラックとホワイトの攻撃を防いでいた。
「ひるがえりて来たれ、幾重にもその身に刻め・・・」
セレナは呪文のような言葉を言った後、赤いオーラを包み込む。

ブラックはセレナに一発与えようとすると、その瞬間、セレナが消えてしまった。
そう思った矢先、ブラックとホワイトの背中に斬られたような衝撃が走った。
ブラックとホワイトは振り向くと、消えたと思っていたセレナがいた。
「ブラック！ホワイト！」
「今の高速移動、間違いない。さっきの雷もあの人の魔法だわ！」
ミコトはセレナが纏っていた赤いオーラや先程の雷は魔法だと気付く。
「ひかり！」
「うん！」
ポルンはタッチコミューンに変わり、ひかりはそれを手に取る。
そして、ひかりはタッチコミューンに手を翳す。
「ルミナス・シャイニング・ストリーム！」
ひかりは金色の光に包まれ、シャイニールミナスに変身する。
「輝く生命！シャイニールミナス！光の心と光の意志、総てを一つにするために！」
セレナはブラックとホワイトに横薙ぎに斬りかかろうとする。
その所をルミナスが庇うように2人の前に立ち、バリアを張る。
セレナはバリアに弾かれる。
「光の意志よ！私に勇気を！希望の力を！」
ルミナスはハーティエルバトンを手に取り、弓状に変形し、回転させる。
「ルミナス・ハーティエル・アンクション！」
ルミナスはルミナス・ハーティエル・アンクションを放ち、セレナの動きを止める。
「ルミナス！」
「ありがとう！」
「いえ、それより、あのセレナと言う人、何か様子がおかしい・・・」
ルミナスはセレナの顔を見て、生気を感じられないように見えた。

その時、ブラック達に赤い光が浴びられる。
「えっ!?」
「なに!?」
ブラック達は突然の赤い光が放たれた所に振り向こうとしたが、身動き一つとれなかった。
「体が・・・動かない・・・」
ブラック達は何とか動こうとするが、指一本動かすことすらできなかった。
「ホシイナーとナケワメーケを忘れるな。」
ユグドラシル兵は巨木ホシイナーの枝に乗ってブラック達に言い出す。
先程の赤い光は信号機ナケワメーケの仕業である。
「アクセルシューター!」
ユグドラシルは何かに気付き、巨木ホシイナーの枝から飛び下りる。
その代わり、ピンクの光弾が巨木ホシイナーに命中する。
「ミーティアストライク!」
その直後に人間大の青い光弾が信号機ナケワメーケに命中する。
「ロック!」
巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケは緑色のロープ状の光に巻き付けられ、身動きを封じられる。
「みんな、大丈夫ー?」
「高町!」
真理奈達は上を見上げると、なのは、ユーノ、エクセルがバリアジャケットにセットアップした状態で駆けつけて来た。
「おい、アイツらが例の?」
「あぁ。トランプの国で怪獣が現れた時、手助けした連中だ。」
兵士達はなのは達を見て、トランプ共和国にマガバッサーが出現した時、ゼロと協力した仲間だと理解する。
「高町!あいつらが此間話したユグドラシルよ!」
真理奈はなのはに先程巨木ホシイナーから飛び下りた兵士達をユ

グドラシルだと教える。
　ユグドラシルの事はなのは達がトランプ共和国でゼロと一緒にマガバッサーを倒した後に聞かせていたのである。
「ユグドラシルの皆さん、あなた達の事は既に聞いています。テロの現行犯であなた達を逮捕します。トランプ共和国でいろいろとお話しさせて頂きます。どうか神妙に。」
　なのははユグドラシル兵達にトランプ共和国に連行しようとする。
「黙れ！余所者風情が！」
「この世界の事を何も知らん貴様らが我々を捕えるだと?!笑わせるな！」
　ユグドラシル兵達はなのはの逮捕宣言に強く否定する。
「なら、実力行使させてもらうわよ！」
　エクセルは魔法陣を展開した。
「チェーンバインド！」
　エクセルは魔法陣からチェーンバインドを展開し、ユグドラシル兵を捕えようとする。
　その時、ユグドラシル兵の一人がポケットから黒くてドーム状の物体を取り出し、スイッチを押す。
　すると、チェーンバインドを展開した魔法陣が消えた。
　それだけではなく、なのはとユーノとエクセルのバリアジャケットが解かれ、元の姿に戻った。
「ふぇっ!?」
　なのは達はそのまま地面に落下する。
　その直前に、真理奈はなのはを、シンはユーノを、ミコトはエクセルを受け止め、なのは達は落下による怪我はしなくて済んだ。
「大丈夫か、ユーノ？」
「う、うん。」
「いたたた・・・」
「ごめんね、助かったわ。」
「魔法が掻き消されただけじゃなく、変身まで解かれたですって!?」
「あの装置のせいかもね。」

なのは達はユグドラシル兵が持っている黒い装置を見て理解する。
「成程、これがゴスペル！聞いた通りの性能だ！事前にこいつらの話を聞かなければこうはいかないだろうな？」
「とにかく、これで戦力は削れた。ウルトラマンゼロもいつ怪獣が現れるか分からんこの現状、迂闊には変身できまい。加えて・・・」
兵士達は黒い装置・ゴスペルの性能に感嘆する。
その後、兵士の一人が指笛を鳴らす。
すると、巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケの前に円錐型の機械１０機と巨大な球体の機械２機が突然姿を現す。
「何あれ!?ありえな～い！」
「ロボット!?」
ブラック達は突然現れた機械に驚く。
「スカリエッティのガジェット!?」
「なんでユグドラシルが!?」
なのはとユーノはその機械はガジェットと呼ぶ。
ガジェット・ドローン・・・ジェイル・スカリエッティがレリックの探索・確保を目的として作られた機械兵器。
聖王のゆりかごにも配置させていた。
「どうだ?さらに絶望的だろう?もはやお前達に勝ち目はない！」
ユグドラシル兵は余韻に浸る。
「だったら、そのゴスペルってのをぶっ壊せばいいんだろ?」
シンは拳をポキポキと鳴らし、ユグドラシル兵達に言う。
その後、シンはウルティメイトブレスレットを翳し、ウルトラゼロアイを出す。
シンはそれを自分の目に嵌める。
よってシンはウルトラマンゼロに変身する。
「なに!?」
ユグドラシル兵達は予想とは逆の行動を取ったゼロに驚く。
「あなた、もしかして・・・！」
エクセルはゼロを見て確認するかのように尋ねようとする。
「俺はゼロ。ウルトラマンゼロだ！」

ゼロはエクセルの方に振り向き、自分の事をゼロと名乗る。
「ええい！プリキュア諸共やれ！」
ユグドラシル兵はセレナとガジェット・ドローン達にゼロ達を倒すように命令する。
ゼロはこのまま向かってくるセレナ達を相手にする。

氷と水の剣士、キュアネッシー誕生！

ユグドラシルが放ったホシイナーとナケワメーケ、そして空間の歪みから現れた火山怪鳥バードンを倒したふたりはプリキュアＭＡＸＨＥＡＲＴとウルトラマンゼロ。

その後、ミコトの招待で珈琲店ミッドガルでコーヒーをご馳走したシン達。

しかし、ユグドラシルが再びシン達の前に立ちはだかる。

セレナを差し向け、ブラックとホワイトを追い詰める。

その上、新たなホシイナーとナケワメーケによってルミナス共々動きを封じられてしまう。

なのは達の合流により、形勢逆転できたかと思いきや、ユグドラシルが使用したゴスペルによってなのは達の魔法が封じられ、バリアジャケットも解かれた。

更にガジェット・ドローンも放たれ、絶体絶命の危機に陥れる。

しかし、シンはウルトラマンゼロとなり、ユグドラシルの猛攻に立ち向かう。

「ええい！プリキュア諸共やれ！」

兵士はガジェット・ドローンをゼロに差し向ける。

「まずはそのガラクタ共だ！」

ゼロはルナミラクルゼロにタイプチェンジする。

「ミラクルゼロスラッガー！」

ゼロはミラクルゼロスラッガーで円錐型のガジェット・ドローン１０機を撃破する。

その後、ゼロはストロングコロナゼロにタイプチェンジし、巨大球体型のガジェット・ドローンに向かって走り出す。

球体型のガジェット・ドローンはベルト状の腕を出し、ゼロを襲う。

ゼロはその腕を蹴りあげたり、拳で地面に叩きつけたりと力技で躱し、ガジェット・ドローン２機を同時にキックで破壊する。

「なん・・・だと・・・・!?」

「こんなに呆気なく・・・・!?」

兵士達は１２機のガジェット・ドローンがたった数秒でゼロに破壊された事に驚きを隠しきれなかった。
「くっ！ホシイナー！ナケワメーケ！」
兵士は巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケにゼロを倒すように命令する。
「ウルトラマンだけいい格好させないんだから！」
エクセルはスマートフォン型の変身アイテムを取り出す。
「!?あのスマホは!?」
真理奈はエクセルが取り出したアイテムの事を知っているのか、驚いた表情で見ていた。
エクセルはスマホ型のアイテムの画面に軽く触れる。
「ファンタジック・ダウンロード！」
エクセルはピンクの光に包まれ、その光の中からキュアスピカの姿を現す。
「明るく輝く乙女の星！キュアスピカ！」
エクセルはキュアスピカに変身を完了する。
「ふぇ～っ!?」
「エクセルがプリキュアに!?」
「ありえな～い！」
なのは達とブラック達はエクセルがスピカに変身した所を見て驚きを隠せなかった。
「新たなプリキュアだと!?」
ユグドラシル兵もスピカの参上に驚いた。
（あのスマホ・・・なんであの子が・・・?!）
真理奈はエクセルが変身に使っていたアイテムを持っていることに信じられないような目で見てそう呟く。
「へぇ？エレメントやイージスの他に誕生したプリキュアがいたなんてな？」
「私も信じられない話ですけどね・・・まずはこいつらを。」
「おぉ！」
ゼロもなのは達同様にエクセルがスピカに変身した事に驚いては

いたが、なのは達とは逆に感心していた。
しかし、今は経緯を話している暇はなく、ゼロとスピカは巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケの相手をすることにした。
その様子を屋根の上から覗き見るアカデミックドレスの少女。
「久々にあやつの町に来たが、ユグドラシル、まだ残党がいたとはな・・・エクセル・ロータス、魔法が使えないこの状況でどう対処する?」
アカデミックドレスの少女はスピカを見てそう呟く。
(あの時はブレイブハートがいたから何とかなったけど、今はゴスペルって奴に魔法を封じられたし、そうじゃなくても、私は空戦魔導師だから格闘技は使えない。今はこの姿で戦うことに慣れておかないと。)
スピカはフログロスの集団との戦闘を思い返す。
あの時はブレイブハートのサポートもあったため、フログロスの集団を全滅させることができたが、今はユグドラシル兵が持つゴスペルによって魔法が封じられて、ブラック達が信号機ナケワメーケによって動きを封じられた挙句、彼女自身も格闘技は得意ではない。
今となっては、変身したばかりで戦い慣れていないプリキュアと同じである。
「セレナ、なにをしている!?お前も行け!」
ユグドラシル兵は余裕をなくしているような表情でセレナも参戦するよう命令する。
セレナは命令に従い、ゼロに剣を振り下ろす。
ゼロはそれに気づき、ゼロスラッガーでセレナの剣を防ぐ。
「この輪っかで操られたのか。待ってろ、すぐ戻してやるぜ。」
ゼロはセレナの頭に嵌めている輪の効能に気付く。
「あいつ!操りの輪の力に気付いたのか!?」
「ホシイナー!好きにさせるな!」
巨木ホシイナーはユグドラシル兵の命令でゼロを襲う。
「おっと!」
ゼロはセレナの剣を躱し、更に巨木ホシイナーの攻撃を避ける。

「今だ！」
「ナ～ケワメ～ケ～！」
信号機ナケワメーケは赤いランプから赤い光線を放つ。
それによってゼロは動きを止められてしまう。
「なっ!?」
「今だ、セレナ！奴に止めを刺せ！」
ユグドラシル兵は今の状態のゼロを見て、セレナに止めを刺すように命令する。
セレナは命令通りにゼロを襲い掛かる。
真理奈はゼロが窮地に立っているのを見て、ポケットからスパークレンスを取り出す。
しかし、今のスパークレンスは石になっている為、当然ティガに変身できない。
（・・・ったく、ティガになんないと何もできない私にイラつくわ・・・）
真理奈はティガに変身できないことに口惜しくなる。
その瞬間、真理奈の隣からすごい勢いで走り出す影が横切る。
その正体はミコトである。
そのミコトはゼロを庇うように立ち塞がる。
「早乙女!?」
「危ないよ!?」
真理奈達はミコトの行為に驚き、逃げるように急かす。
「馬鹿め！自ら死にに行くとはな！」
ユグドラシル兵達はゼロを庇うミコトを見て嘲笑う。
「ミコト！なにしてやがる！」
「あなた！逃げて！」
ゼロとスピカもミコトに逃げるよう諭すが、逃げようとしない。
剣を握っているセレナは、もうすぐそこまで来ている。
（彼を死なせはしない！シンさんは私や真理奈ちゃんを助けてくれた！今度は私がシンさんを助けたい！その為に・・・力が欲しい！）
ミコトは迫ってくるセレナに慄きつつも、強い眼差しでゼロを守ろうと盾になる。

屋根の上から見ていたアカデミックドレスの少女のポケットから青い光が放つ。
「ムッ。これは・・・！」
アカデミックドレスの少女はポケットに手を突っ込み、そこから青く光る物を取り出す。
彼女が取り出したのは、氷山を横切るように水面上に遊泳するプレシオサウルスが描かれていたメモリーカードである。
そのメモリーカードの光が強くなり、青い光の球となってミコトの方に飛んでいく。
その光はセレナを遮るように包み込む。
「!?」
「な、なんだこの光は!?」
セレナとユグドラシル兵達はその光に驚き、目を見開く。
「この状況！私がプリキュアになる時と同じ！」
スピカはミコトを包んだ光を見て、自身が初めてプリキュアに変身した時の事を思い出す。
「こ、これは一体・・・!?」
ミコトは今、光に包まれた状態で驚き、開いた口が塞がらなかった。
その時、ミコトの目の前にある光の球がスマートフォン型のアイテムに変化する。
その画面に「Ｔａｐ　ｔｈｅ　ｌｉｎｋ」と、文字が浮き出る。
「タッチすればいいの？」
ミコトは疑心暗鬼になりつつ、アイテムにタッチする。
その時、画面が青色に拡がり、そこから青い光が溢れ出し、ミコトを包み込む。
「ファンタジック・ダウンロード！」
ミコトは青いコスチュームを身に纏い、胸に雪の結晶の形をしたブローチを飾り、ビッグウェーブを思わせる波型のカチューシャを嵌め、プレシオサウルスが描かれたスマホポーチが付けられる。
「時を遡る幻の水神！キュアネッシー！」
プリキュアに変身したミコトは自らをキュアネッシーと名乗る。

「キュアネッシー・・・!?」
「また新たなプリキュアだと!?」
スピカ達とユグドラシル兵達はキュアネッシーの誕生に驚く。
（・・・）
真理奈はスピカ達とユグドラシル兵とは別にミコトが使った変身アイテムの方に気に掛けた。
「わ、私が・・・プリキュアに・・・」
ネッシーに変身したミコト自身にも驚きを隠せなかった。
しかし、今はそんな場合ではなかった。
巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケがスピカとネッシーを襲い掛かる。
「あぁ、もう!しつこいわね!」
「今はこの姿になってるだけでもいっぱいいっぱいなのに!」
スピカとネッシーは巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケの猛攻にただ避けるばかりであった。
「画面を右にスクロールした後、アプリをタッチして!」
真理奈はスピカとネッシーに変身アイテムを使うように指示する。
「へ?画面?ってあれの事?」
スピカはスマホポーチから変身に使ったアイテムを取り出し、真理奈の指示通り、画面を右にスクロールする。
その画面には本から出てきた鍵が描かれたアプリが一つしかないが、真理奈が言っていたアプリとはこの事だろう。
スピカはそれをタッチする。
ネッシーも少し遅れてはいたが、そのアプリをタッチする。
その後、画面が文字が浮き出る。
変身する時出てきた文字は「Ｔａｐ　ｔｈｅ　ｌｉｎｋ」だったが、今度は「Ｓｃａｎ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｂｒｏｏｃｈ」と表記する。
「ブローチにレンズ向けて!あとは自分のイメージした技を敵にぶつけて!」
「エールやスター達と同じようにしろって事ね?了解!」
スピカはスマホのレンズをブローチに翳す。

その時、スピカの体全体にピンクの光で包まれる。
「プリキュア・スターライトウェーブ！」
スピカは自身に包まれているピンクの光を右手に集約し、一度右手を大きく引いた後、思い切り手を突き出す。
よってスピカの右手からピンク色の光線を放つ。
その光線は巨木ホシイナーに命中し、そのまま浄化される。
スピカは後ろから攻撃が来るのを気付き、足早に避ける。
今の攻撃は信号機ナケワメーケの赤い光線である。
「これ以上はさせない！」
ネッシーはスマホのレンズをブローチに翳す。
よってネッシーは青い光に包まれる。
「アクアストリーム・フレッシュ！」
ネッシーは右手に青い光を集約する。
すると、ネッシーの右手に青い光で形成されたレイピアが出来上がる。
その後、ネッシーの体に水を纏い、激流の如く飛翔し、信号機ナケワメーケの懐に突進し、光のレイピアを突き出す。
よって信号機ナケワメーケは大爆風が起きると同時に浄化される。
それと同時に信号機ナケワメーケによって動きを封じられたゼロとブラックとホワイトとルミナスは動けるようになった。
それも束の間、セレナはスピカとネッシーを襲い掛かる。
しかし、それを阻むようにゼロはセレナの懐に手を触れる。
「レボリウムスマッシュ！」
「がぁっ!?」
ゼロはセレナにレボリウムスマッシュを繰り出す。
威力は抑えていたのか、セレナは吹き飛ばされず、ゼロに抱かれるように眠ってしまう。
更にゼロはウルティメイトブレスレットからウルトラゼロランスを出し、ユグドラシル兵の方に投げ飛ばす。
ウルトラゼロランスはユグドラシル兵が持つゴスペルに命中し、そのゴスペルが自壊される。

これによってなのは達は魔法が使えるようになった。
ユグドラシル兵達は煙玉を叩きつけ、煙幕を張る。
煙がなくなった時にはすでにユグドラシル兵達はいなくなった。

その同時刻、トランプ共和国の郊外で、小さな空間の歪みが生じた。
その歪みから茶髪のポニーテールの少女が現れた。
「い、今のは一体・・・!?ここはどこじゃ?なんだかメルヘンな世界じゃのう・・・」
茶髪のポニーテールの少女は広島弁混じりの言葉で周りの風景を見ながらそう言う。
その少女の名は、フーカ・レヴェントン。
ナカジマジムに所属する格闘競技選手である。
ウィンターカップの決勝戦で同じ事務の所属のアインハルトと対戦したことがある。
「キャアアアアアアッ!!!!」
「ん?どわあぁっ!?」
フーカは頭上から悲鳴が聞こえ、上を見上げようとすると、そのまま下敷きにされる形で地面に突っ伏してしまう。
「い、いたたた・・・な、なにが起こったの・・・」
「こ、この声・・・リンネか?」
「え?」
フーカを下敷きにした銀髪の女の子は起き上がろうとし、フーカに声を掛けられた時、下に見下ろす。
フーカはその女の子の事をリンネと呼ぶ。
リンネ・ベルリネッタ。
ベルリネッタ家の養子で、フロンティアジム所属のＤＳＡＡワールドランク1位の格闘技選手である。
アインハルトの仲介でフーカと試合した後、仲直りした。
「フ、フーちゃん!?ご、ごめんね!」

リンネは自分がフーカを下敷きにしていることに気付き、慌てて
フーカから下りて謝る。
「い、いや、気にすんな・・・」
フーカは苦笑い気味に起き上がりながら静める。
「それより、ワシらもハルさんのように知らん世界に飛ばされたようじゃ・・・」
「うん・・・ヴィクターさんも同じ現象に巻き込まれたみたいだよ・・・」
「何がどうなっとるんじゃ・・・」
フーカとリンネは目の前に聳えるトランプ共和国を見て、自分達が巻き込まれた空間の歪みの事を思い返しながら言う。

真理奈の過ち

ユグドラシルが所有するゴスペルによって、なのは達は魔法を封じられる。
そのゴスペルを破壊するためにシンはゼロに変身する。
エクセルもキュアスピカに変身してゼロと交戦するが、そのゼロはユグドラシルが放った信号機ナケワメーケによって動きが封じられる。
しかし、そんなゼロをミコトは庇い、その時にミコトはキュアネッシーに変身した。
スピカとネッシーは巨木ホシイナーと信号機ナケワメーケを浄化し、動けるようになったゼロはセレナを気絶させ、ゴスペルを破壊することに成功した。
それからしばらく経ち、シン達はセレナを真理奈の家に連れて、彼女を真理奈のベッドに寝かせた。
「この娘もユグドラシルよね？ここに連れてきて大丈夫なの？」
エクセルは眠っているセレナを見て、シン達に聞く。
「あぁ。こいつは操られていただけだからな。」
「あいつらがこの娘を助けようとしなかったのは、あくまで捨て駒のつもりだったんでしょう。その証拠に、この娘の頭に嵌めていた輪っかは良心的な感情を抑えつけて、敵を倒す為だけの操り人形にするようにプログラムされている事を私の分析で分かったの。」
シンはエクセルの問いに答え、真理奈はセレナが嵌めていた輪っかについて説明した。
「それより問題は捕まったはずのユグドラシルがこいつを操り、高町が言ってたなんとかドローンを操作して何をしでかそうとしているのかって事ね。まぁ、予想はついてるけどさ。」
真理奈はセレナの事より、ユグドラシルの目的について考える。
「トランプ共和国で拘置されているデニーズ・ポーカーさんの救援でしょうか？」
「いや、あのオジサンは確かにジョナサンの旦那のトコに拘置されて

るけど、私達がこっちの世界に帰った後、バロン王国って国に護送されることになったのよ。」
　ミコトはユグドラシルの残党の目的を推測するが、真理奈は違うと言い切り、デニーズの現在について話した。
「バロン王国・・・飛空艇を所持する軍事国家ですね。」
「ええ。私も話しか聞いてないけどね。とにかく、あいつらの目的はデニーズのオジサンの奪還じゃない。デニーズのオジサンに代わって、トランプ共和国を制圧するつもりなんでしょう。」
　真理奈はユグドラシルの残党の狙いを予想する。
「とりあえず、この子が目を覚ましたら色々聞かせてもらいましょ。例えば、私を狙った理由とか。」
「あ・・・」
　ミコトは真理奈の言葉に、前にユグドラシルに襲われた時の事を思い出す。
　その時はブラック達によって妨害されたが、ユグドラシルの残党が真理奈とミコトをバラージ王国に連れて行こうとしたのは、はっきり覚えていた。
「ま、一先ずお粥くらいは作っとくかね・・・」
　真理奈は自分の部屋を後にし、キッチンに向かった。
「あ、ちょっと！」
　エクセルは真理奈の後を追う。
「私も行きます！」
　ミコトもエクセルと同様に真理奈を追う。
「真理奈さん、あのアイテムの事、知ってるんですよね？」
「私も知りたいわ。あれ、何なの？」
　エクセルとミコトは真理奈に２人が使ったスマートフォン型のアイテムについて聞く。
「私としてはなんでアンタ等がそれ持ってんのか聞きたいくらいだけど、その様子だと偶然としか言いようがないらしいし、アンタ等の質問に答えっかね・・・」
　真理奈はエクセルとミコトの質問に答えようとする。

「アンタ等が使ったアイテム、そいつはファンタジラインって言ってね。2年前、祖父ちゃんが亡くなってしばらく経った後、発明した物なの。」
真理奈はエクセルとミコトがスピカやネッシーに変身できたスマートフォン型の変身アイテムの事をファンタジラインである事を2人に教え、それを作った経緯について話した。
～～～～～回想～～～～～
発明したと言っても、世界各地で多くの人達の精神をケアする役目を持つ人工知能・ＭＨＣＰ、メンタルヘルス・カウンセリングプログラムの協力で作った物なのよね。
更に言えば、亡くなった祖父ちゃんの幼馴染で同業者のシド・デル・ノルテ・マルケズ爺さんの技術があってこその成果。
まぁ、とにかくよ。
ＭＨＣＰの助言とシド爺さんの技術で、ファンタジラインが完成間近になった時・・・
「真～理奈！」
「すばる？」
私に掛けてきた声の娘、同じ小学校の生徒の中島すばる。
中島の家族は祖父ちゃんが初めてフェアリーゲートを作り、妖精の世界に繋いでから一緒に手伝ってくれた。
中島の母であるクイント小母さんは2年前、パリで起こった研究中による爆発事故で死んじゃったんだ。
当然中島もショック受けてたよ。
残りの姉妹も含めてね。
・・・と、話逸らしちゃったな。
同じ研究施設で暮らしてたから、ファンタジラインの事も知ってたわ。
「父さんから聞いたよ？凄いの作ってるんだって？」
「あぁ、これの事？」
中島にそう聞かれて、ｉＰａｄで見せたのよ。
その時は妖精の世界の事を秘密にしてた私達しかいなかったから

見せれた訳だけどね。
「ＭＨＣＰやシド爺さんの協力でだけどね。でも、これで世界各地で悪い事をしている怪物達を対処できるわ。」
「おぉ～！さっすが、真理奈！天才だね！」
「だから天才じゃないって・・・」
「ね！ね！名前はあるの？」
「もう考えてあるんだ。神話や伝説を心に刻み、未来へ突き進む力って意味で・・・ファンタジラインって名前をね。」
　そのファンタジラインを作ったのは、フランスで研究中のトラブルで亡くなった祖父ちゃん達のような人達を失わせないようにするためなのよ。
　けど、ようやく完成できたと思った矢先、事件が起こった。
「あとはこのテイルズハートチップを挿入して・・・よしっと！」
　テイルズハートチップ、伝説上の生物や妖怪、神話に出てくる人物の情報をインプットし、その情報をベースにした戦闘服を再現させるメモリーカードをファンタジラインを入れた。
　あとはトラブルがないように調整するだけ。
　そのテストを自ら立候補した中島にさせたの。
　彼女自身、プリキュアになりたいって望んでいたんでね。
「ライフストリームシステム、起動。テイルズハートチップ・コード・ＰＣ・アストライア、ファンタジラインにインストール。ＭＨＣＰ・Ｉ・ＡＩＴＹ、サポートをお願い。」
『分かったわ、真理奈ちゃん。あなたこそ、見落としのないようにね。』
　私はＭＨＣＰの１人、アイティのサポートで中島がプリキュアに変身する時に不具合による人体悪化が起きないように、目を配らせていた。
「システム正常、変身者の状態異常なし、シンクロ稼働率１００％。」
　調整は順調だった。
　中島がプリキュアに変身することができたくらいだからね。
　ちなみに、そのプリキュアの名前も付けてたのよ。
　名前はキュアアストライア。

ローマ神話に出てくる星乙女と呼ばれた有翼の女性の名前よ。
乙女座物語ではデーメーデールとも呼ばれているけどね。
テイルズハートチップは８つ作っていて、残る７つのファンタジラインも完成したわ。
とにかく、その調整によって中島はプリキュアに変身することができたのよ。
そこまではよかった。
その直後にキュアアストライアとなった中島に異変が起こった。
「!?うぁっ、アァァァァァァァッ!!!?!」
「すばる!?」
その異変と言うのは、腰にあるポーチに収めてあるファンタジラインから発した漏れ出したエネルギーの事だった。
その漏れ出したエネルギーが電流のように中島の体全体を襲う。
私は慌ててポーチに入っているファンタジラインを引っ張り出そうとした。
その時はエネルギーの妨害で近寄り辛かったが、なんとかファンタジラインを引き抜き、中島の変身を解かせることができた。
ファンタジラインの方は壊れたけど、中島の命は無事だったわ。
意識を取り戻したのは３日後だった。
念の為、精密検査をしておいたけど、体の調子は良好。
後遺症もなく、１週間後に学校生活に復帰。
でも、ファンタジラインの一件で私は中島との距離を置いたの。
あの時のエネルギー漏洩、外部からのサイバー攻撃の可能性も考えたけど、痕跡すら残ってなかったわ。
完璧に隠滅させられた為、これ以上調べることができなかった。
ファンタジラインもテイルズハートチップ共々廃棄処分。
進学の件も、中島とは別の学校に入学することになったわ。
〜〜〜〜〜回想〜〜〜〜〜
真理奈は自分の過去とファンタジラインについての事をエクセルとミコトにそう暴露した。
エクセルとミコトはその話を聞いて、ファンタジラインの事より、

真理奈とすばるの事情の方が衝撃的に感じた。
「・・・とまあ、そう言うわけ。忘れていいわよ。私の過去より、何故廃棄処分したはずのファンタジラインが作られ、あなた達の手元にあるのか、重要なことはそれだからね。」
真理奈はエクセルとミコトに自分の過去よりファンタジラインの事を優先するように言う。
「私にとっては両方重要なのよ。」
「公務員の性って奴かねぇ・・・でも今は、あのファンタジラインを作った奴を捜すのが先よ。それに、あの金髪娘の事も気がかりだし。」
真理奈はエクセルにそう言って、キッチンの方に向かう。
ミコトは慌てて真理奈の後を追い、エクセルは真理奈の過去を聞いてから納得できない表情を浮かべつつ、真理奈とミコトに付いていく。

その頃、まのん達は【マヤの全国謝罪巡礼ツアー＆海外プリキュアとの共同作業】の為、世界各国のプリキュア達がいる所に転々と移動していた。
メンバーとしては、まのん、マヤ、ドキドキ！プリキュア、ハピネスチャージプリキュア、まりあ、リュイル、そして新たに加わったヴィヴィオ、アインハルト、トーマ、リリィである。
彼女達が今いるのは、アメリカのロサンゼルスである。
そこで、空間の歪みによって現れたザケンナー、ウザイナー、コワイナー、そして、スナッキーの集団が街や人を襲い掛かっている。
ちなみに、ザケンナーの姿は戦車、ウザイナーの姿はトウモロコシ、コワイナーの姿は自由の女神をベースにしている。
当然まのん達はすでに変身は完了している。
「ザケンナー達は兎も角、スナッキーまで現れるなんて！」
「それに・・・！」
ソードはザケンナー達を見て、ユグドラシルが使役したホシイナー

やナケワメーケの時と違い、空間の歪みから現れた事に驚く。
イージスはザケンナー達とは他所に、反対側の高層ビル街の方に振り向く。
イージスが見たのは、冷え固まった溶岩のような体をして二つの頭の中心に赤い結晶が付いている怪獣と、同じように赤い結晶が付いて青みがかった体をした機械のような怪獣である。
前者の怪獣は火ノ魔王獣・マガパンドン。
ウルトラマンゼロによって封印された魔王獣である。
超高温の火の玉で身を守り、気温上昇によって多くの人間が熱中症に追い込んだ。
後者の怪獣は土ノ魔王獣・マガグランドキング。
ウルトラマンタロウによって封印された魔王獣である。
グランドキング同様攻撃力・防御力は優れており、その能力の前にオーブを追い込んだ。
「急に暑くなって地震が起き始めたと思ったら・・・」
『土の中からロボットみたいな怪獣、空から火の玉の中にいる怪獣が・・・』
「うぅ・・・もうヘトヘトだよ～・・・」
「確かにこの暑さは・・・」
トーマとリリィはザケンナーとの戦闘の最中にマガグランドキングとマガパンドンが現れた事に苦い表情をする。
ヴィヴィオとアインハルトは今感じている気温の暑さに参っている。
イージスはマガグランドキングとマガパンドンを見て、怒りの表情が露わになる。
『キュアイージス、落ち着け。お前1人で行ったところで太刀打ちできる相手ではない。時期に光の巨人が来る。』
「・・・分かった・・・」
イージスはリュイルの言葉を聞いて、落ち着きを取り戻す。
その時、マガパンドンに燃え盛る隕石が、マガグランドキングに矢じり型の光弾が命中する。

そして、２体の魔王獣の前に２人の巨人が降り立つ。
その巨人はギンガとビクトリーである。
「アメリカに来たら、すげー暑くなってきたと思ったら、アイツの仕業みたいだぜ？」
「あぁ。それにスーパーグランドキング・スペクターとよく似た奴も一緒だな。」
ギンガとビクトリーはマガパンドンとマガグランドキングの前に身構える。
「ギンガ！」
「もう1人は・・・？」
「きっとヒカルさんと同じ世界から来たもう一人のウルトラマンですわね。」
「あの怪獣達はギンガ達に任せましょう。」
エレメント達はマガパンドンとマガグランドキングをギンガとビクトリーに任せ、ザケンナー達の退治を始める。

ＶＳマガグランドキング＆マガパンドン

ユグドラシルの残党が放ったホシイナーとナケワメーケを浄化し、セレナの洗脳を解いた後、真理奈の家で療養する事になった。
真理奈はエクセル、ミコトに２人の変身アイテムの事を含めた自身の過去を話す。
エクセル達が使ったアイテムはファンタジラインと呼び、真理奈の同級生の中島すばるをキュアアストライアに変身させる手助けをしていた。
しかしその結果、すばるは倒れ、ファンタジラインは破壊された。
その後、ファンタジライン本体や、そのデータも廃棄処分する結末になったが、エクセル達がファンタジラインを所持している為、どこから経由した物か知る由もなかった。
その頃、まのん達はプリキュアに変身し、ザケンナー達と対峙していた。
それと同時に火ノ魔王獣・マガパンドンと土ノ魔王獣・マガグランドキングが姿を見せる。
２体の魔王獣の前にウルトラマンギンガとウルトラマンビクトリーが立ちはだかった。
「ギンガサンダーボルト！」
ギンガはマガグランドキングにギンガサンダーボルトを放つが、効果はなかった。
「ウルトランス！キングジョーランチャー！」
ビクトリーは大口径ランチャーを装備し、マガパンドンに狙い撃つ。
しかし、マガパンドンは自身を火の玉を纏い、キングジョーランチャーの砲弾が溶解される。
「ウルトランス！ハイパーゼットンシザース！」
ビクトリーはギンガと交替し、キングジョーランチャーからハイパーゼットンシザースに入れ替え、マガグランドキングの腹に突き刺し、火球を放つが、決定打になっておらず、マガグランドキングの大

鋏に捕まってしまう。
「ギンガクロスシュート！」
ギンガはマガパンドンにギンガクロスシュートを放つが、マガパンドンの高熱のバリアを破れなかった。
マガパンドンは口から火炎弾を発射し、ギンガを苦しめる。
「イージス・サウザンドソード！」
イージスはイージス・サウザンドソードで自由の女神コワイナーを浄化する。
「テンダー・ライジングスターバースト！」
テンダーはテンダー・ライジングスターバーストでトウモロコシウザイナーを浄化する。
ヴィヴィオとアインハルト、トーマとリリィはプリキュアのように怪物を浄化する力を持っていない為、一気に浄化させられるよう、スナッキーを一ヵ所に集める。
「みんな！あとはお願い！」
ヴィヴィオはドキドキ！プリキュアとハピネスチャージプリキュアにスナッキーたちの浄化を頼む。
ハート達はそれに了解する。
「マジカルラブリーパッド！」
ハート達はマジカルラブリーパッドを召喚する。
「私達の力をキュアハートの元へ！」
「プリキュア・ラブリーストレートフラッシュ！」
ハート達はプリキュア・ラブリーストレートフラッシュを放つ。
「集まれハピネスな気持ち！」
「高まれイノセントな思い！」
「輝け！」
「シャイニングメイクドレッサー！」
ラブリー達の元にシャイニングメイクドレッサーを召喚する。
「愛と！」
「勇気と！」
「優しさ！」

「幸運を込めて！」
「皆に届け！幸せの大爆発！プリキュア・ハピネスビッグバーン！」
ラブリー達はプリキュア・ハピネスビッグバーンを放つ。
よって、スナッキー達は２組の合体技によって浄化される。
「響き渡る雷よ、纏わせて！プリキュア・サンダーストライク！」
エレメントは自身に電気を纏わせ、戦車ザケンナーに超高速で突進する。
「キャアァァァァッ!!!!」
しかし、エレメントの攻撃は戦車ザケンナーの防御力に弾き返されてしまう。
エレメントはそのまま仰向けで叩きつけられてしまう。
戦車ザケンナーは大砲をエレメントに向けて、ミサイルを発射する。
「イージス・ソードシールド！」
その時、エレメントの前にイージスが庇うように前に立ち、６つの光剣を盾にしてミサイルを防ぐ。
「イージス！」
「一緒にやりましょう。」
「・・・っ・・・はい！」
イージスはエレメントに手を差しのばし、エレメントはその手を掴み、立ち上がる。
戦車ザケンナーは再びミサイルを発射する。
「裁け！ジャッジメントソード！」
「七色の光の輝きよ、大いなる力となり、奇跡を導け！プリキュア・レインボーフォース・センセーション！」
イージスは無数の光剣を飛ばし、エレメントは７色の光線を放つ。
２人の技は戦車ザケンナーに命中し、そのまま浄化される。
「あの子達も頑張ってんな。ショウ！俺達も行くぜ！」
「あぁ！」
「見せてやるぜ！俺達の絆！」
ギンガの中にいるヒカルは左腕のブレスレットのようなアイテム

のレリーフを左に傾ける。
「ウルトラタッチ！」
ショウのビクトリーランサーでブレスレットのスイッチを押す。
「ギンガ!!」
「ビクトリー!!」
「ギンガビクトリー!!」
ギンガとビクトリーが光に包まれ、一つになっていく。
その光から姿を現したのは、青いクリスタルのような物を体の所々にあり、黒、銀、赤の配色が並べているウルトラマンである。
その名はウルトラマンギンガビクトリー。
ウルトラマンゼロから受けた特訓の成果で合体したウルトラマンである。
ティガ、ダイナ、ガイア、コスモス、ネクサス、マックス、メビウス、ゼロですら倒せなかった時空の戦士エタルガーを倒している。
そして、ヒカルの左腕にあるブレスレットのようなアイテム、それはウルトラフュージョンブレスである。
先述したように、ゼロの特訓の成果で得たアイテムである。
ティガ、ダイナ、ガイア、コスモス、ネクサス、マックス、メビウス、ゼロの光線技を使うことができる。
「ギンガともう一人のウルトラマンが合体した!?」
「すごごご～い！」
ラブリー達はギンガビクトリーを見てそれぞれの感想を述べる。
マガグランドキングとマガパンドンはそれぞれ、マガ一閃や火炎弾を繰り出す。
しかし、ギンガビクトリーはマガグランドキングとマガパンドンの攻撃に対し、一切怯まなかった。
ギンガビクトリーはゆっくりと2体の魔王獣の元に歩く。

その頃、エクセル、ミコト、真理奈が部屋から出た後、なのはとユー

ノはユグドラシルの残党がまた現れないか、巡回を始め、ひかりはＴＡＫＯＣＡＦＥの手伝いに戻り、シン、なぎさ、ほのかはセレナの看病をしている。
　そして、しばらく経った後・・・
「入るわよ～？」
　部屋のドアからノック音が響く。
　中に入ってきたのは、真理奈、エクセル、ミコトである。
　真理奈の手にはお粥が入っている鍋と茶碗とレンゲを載せたトレーを持っている。
「おぉ～！美味そう！」
「なぎさが食べるわけじゃないメポ！」
「うるさい！そんなの分かってるわよ！」
　なぎさとメップルはいつも通りの喧嘩をしている。
「ホント大食いね・・・そんで、金髪娘の方は？」
「それが・・・」
　真理奈はセレナの状態を聞き、ほのかは彼女はまだ起きてないと言いかけようとした所・・・
「起きてます・・・」
　セレナは目を開けて、自身の無事を伝える。
「大丈夫ですか？」
「えぇ・・・」
「しかし、手加減したとは言え、シン兄さんのアレを喰らっといて無事でいられるなんて、見た目の華奢さと違ってタフな女ね？」
　真理奈はシンの方を見つつ、セレナの状態の事を言う。
　真理奈が言ったアレとは、ゼロが操られたセレナに対し、レボリウムスマッシュを放った時の事である。
「あ～、あの時は悪ぃな？」
　シンはセレナに謝る。
「仕方ありません。あの輪の力で操られたあの時の私を考えれば・・・」
　セレナは謝るシンに対し、そのように言う。
「まぁ、とりあえずこいつを食べたら？アンタを着替えさせた時、痣が

できてたから碌にいいモン食べてなかったんでしょ?」
真理奈はサイドテーブルをセレナの横に置き、その上にお粥を置く。

一方、アメリカで戦闘を繰り広げられているギンガビクトリーはイージス、ドキドキ!プリキュア、ハピネスチャージプリキュアの援護をされながら、マガグランドキングとマガパンドンを追い詰める。
エレメントとヴィヴィオ、アインハルト、トーマとリリィは街の守りに徹している。
「ウルトランス!EXレッドキングナックル」
ギンガビクトリーはEXレッドキングナックルでマガグランドキングを殴り飛ばす。
「ウルトランス!シェパードンセイバー!」
ギンガビクトリーはシェパードンセイバーでマガパンドンを切り裂く。
マガグランドキングはギンガビクトリーにマガ穿孔を放とうとする。
「ウルトラマンティガの力よ!」
ヒカルはウルトラフュージョンブレスのディスクを回し、ティガ、ダイナ、ガイアの顔に止まり、スイッチを押す。
「ゼペリオン光線!」
ギンガビクトリーはゼペリオン光線を放ち、同時に放ったマガグランドキングのマガ穿孔を相殺する。
「今の光線技はティガの!?」
ソードはギンガビクトリーがティガのゼペリオン光線を放った所を見て驚く。
「ウルトラマンネクサスの力よ!」
ヒカルは今度はネクサスの顔に止め、スイッチを押す。
「オーバーレイ・シュトローム!」

ギンガビクトリーはオーバーレイ・シュトロームを放ち、マガパンドンに命中する。
「ネクサスの光線技まで!?」
「他のウルトラマンの光線技が使えるって事!?」
ハートとダイヤモンドはギンガビクトリーがティガとネクサスの光線技が使った所を見て、他のウルトラマンの光線を使える事に気付く。
マガパンドンはギンガビクトリーに火炎弾を放ちながら歩み寄る。
「ラブリー・パンチングパンチ!」
「プリンセス・カッター!」
「イージス・サウザンドソード!」
ラブリー、プリンセス、イージスはそれぞれの技で火炎弾を相殺させる。
「プリキュア・ラブリーフォースアロー!」
ハート達はプリキュア・ラブリーフォースアローでマガパンドンを怯ませる。
「ヒカルさん!お願いします!」
ハートはギンガビクトリーに止めを刺すように促す。
「あぁ!ウルトラマンマックスの力よ!」
ヒカルはウルトラフュージョンブレスのディスクを回し、マックスの顔に止まらせ、スイッチを押す。
「ギャラクシーカノン!」
ギンガビクトリーはギャラクシーカノンを放つ。
マガパンドンはギンガビクトリーの攻撃を受けるも、ゆっくりとギンガビクトリーに近付く。
しかし、マガパンドンはあと数百mの所で止まり、爆発四散される。
「やったーっ!」
「まだですわ!まだあの怪獣が残っています!」
ラブリーはギンガビクトリーがマガパンドンを倒した事に喜ぶが、エースの言った通り、まだマガグランドキングが残っている。
マガグランドキングはマガ穿孔を放つ。

ギンガビクトリーはマガグランドキングの攻撃を避ける。
すると、ギンガビクトリーの背後のビルに命中し、瓦礫の山になるかと思いきや、マガグランドキングのレーザーが空に向かって屈折するかのように反射する。
ギンガビクトリーの背後のビルを見ると、そのビルはガラス張りになっている。
「あの怪獣のレーザーが跳ね返ったよ!?」
「どうやら、あのビルの鏡に反射されたみたいですわね。」
「なら、わたくしにお任せください。」
ロゼッタはマガグランドキングの攻撃が反射された理由が分かり、エースはマジカルラブリーパッドを構える。
マガグランドキングは再びギンガビクトリーに対し、マガ穿孔を放つ。
「エースミラーフラッシュ!」
エースはギンガビクトリーの前に巨大な鏡を出し、マガ穿孔を上空に反射し、その上に2つ目の鏡が現れ、次はマガ穿孔に直撃する寸前に反射し、そこに3つ目の鏡が現れ、最後にマガグランドキングの腹部に命中する。
よってマガグランドキングの腹部に穴が空けられる。
「うわ〜っ!あんなにビクともしない体が穴空いちゃった〜!」
「柔よく剛を制す、とはこの事ね。」
「若しくは最強の矛と最強の盾は両立できない。所謂矛盾ですわね。」
ハート、フォーチュン、ロゼッタは今の感想を述べる。
「ショウ、いくぜ!」
「あぁ!」
ヒカルはウルトラフュージョンブレスのディスクを回し、ライブサインに止めた後、スイッチを押す。
「ウルトラフュージョンシュート!」
ギンガビクトリーはマガグランドキングにウルトラフュージョンシュートを放つ。
ギンガビクトリーの攻撃はマガグランドキングの腹部の穴に注ぐ

ように命中する。
マガグランドキングは内側から膨張し、そのまま爆発四散した。
「よし！」
「やった～っ！」
ハート達は2体の魔王獣が倒されたことにより、大喜びする。
その後、ヒカルとショウは一休みした後、再びギンガとビクトリーに変身し、別の場所へと移動する。
まのん達もプリカードをアメリカのプリキュアに返した後、次の海外プリキュアが活躍していた場所へ移動する。

二体の悪魔

アメリカ・ロサンゼルスで2体の魔王獣、マガグランドキングとマガパンドンに苦戦するギンガとビクトリー。
しかし、ギンガとビクトリーの心は一つとなり、ウルトラマンギンガビクトリーとなった。
ザケンナー達を浄化したエレメント達プリキュアはギンガビクトリーを援護。
最後はギンガビクトリーに手によってマガグランドキングとマガパンドンを倒した。
そして、ユグドラシル残党襲撃を受けてから次の日・・・
「しっかし、このゴスペルって奴、よく出来てるわね？魔法を封じ込めて無力化する装置か・・・前に真琴がプリキュアに変身できなくなった時、その変身を封じる装置を使ったって聞いたことあるけど・・・」
真理奈は先日なのは達がユグドラシル残党を逮捕しようとした時に使われたゴスペルの破片を分析していた。
分析を続ける内に、前に真琴が誘拐されてコンテナに閉じ込められた時、プリキュアの変身を封じる装置を仕掛けて、キュアソードに変身するのを防いだ時の事をマナ達から聞いた事を思い出す。
「でも、ヤマザキやドクトル・ゴースがいない今のユグドラシルにそんな技術を発揮できるのかしら？」
真理奈は今のユグドラシルにゴスペルの製造ができるのか考えていた。
「ふぅ・・・分析はまた今度にしよう。スピカとネッシーの能力を改めて調べる必要があるわけだしね。」
真理奈はゴスペルの分析を後回しにし、部屋から出る。

その頃・・・
「へっ！コスモスが言ってた実体カオスヘッダーまで現れるとはな

？」
富士山の麓で戦闘を繰り広げられるゼロ。
ゼロが戦っている相手は三日月のような頭角と肩の突起を持つ左右非対称な姿をした怪人とその怪人の姿が更に禍々しくなった左右対称な姿をした怪人である。
まず、前者の怪人の名はカオスヘッダー・イブリース。
人間の感情を分析した事で姿を現した実体カオスヘッダーである。
コスモスとの戦闘の最中、その能力を分析をしたことがある。
そして、後者の怪人はカオスヘッダー・メビュート。
カオスヘッダーが更なる進化を遂げた実体カオスヘッダーである。
カオスエリガルに化けて、コスモスをエネルギー切れに陥れたことがある。
「いくぜ！」
ゼロはカオスヘッダー・イブリースとカオスヘッダー・メビュートに向かって走り出す。
カオスヘッダー・メビュートは目から怪光を放つもゼロはゼロスラッガーで全て防ぎ切る。
その後、ゼロはエメリウムスラッシュを放つが、カオスヘッダー・イブリースのクローキーバリアーにより防がれてしまう。
カオスヘッダー・イブリースはクローキーバリアーを解き、クローキームーブを放つ。
ゼロはウルティメイトブレスレットからウルトラゼロランスを召喚し、即座に投げる。
ウルトラゼロランスによって、カオスヘッダー・イブリースが放ったクローキームーブを貫き、そのままカオスヘッダー・イブリースの胴体を貫く。
カオスヘッダー・イブリースはゼロの攻撃により、自身の体がバラバラになりかける。
カオスヘッダー・メビュートはゼロに対し、目と口から怪光線、手から波動弾デストログビームを放つ。
ゼロはゼロスラッガーでカオスヘッダー・メビュートの怪光線や波

動弾を全て切り裂く。
カオスヘッダー・メビュートはゼロに向かって走り出す。
ゼロはカオスヘッダー・メビュートの頭上に跳びあがり、逆さまの状態でカオスヘッダー・メビュートの胴体をがっしりと抱える。
その後、ゼロはカオスヘッダー・メビュートを上空に持ち上げ、そのまま地上に叩きつける。
カオスヘッダー・メビュートは仰向けに転がるも、辛うじて立ち上がる。
「これで決める!」
ゼロはゼロスラッガーをカラータイマーに装着し、エネルギーを集約する。
「ゼロツインシュート!」
ゼロはゼロツインシュートを放つ。
カオスヘッダー・メビュートは体がバラバラになりかけているカオスヘッダー・イブリースの背後に回る。
ゼロの攻撃はカオスヘッダー・イブリースに命中し、自分だけ助かっていると思っていたカオスヘッダー・メビュートもゼロの光線の餌食になる。
よってカオスヘッダー・イブリースとカオスヘッダー・メビュートはゼロの光線により爆散される。
「へへっ!相手にならねぇな!・・・・ん?」
ゼロはカオスヘッダー・イブリースとカオスヘッダー・メビュートを倒して余裕ぶるが、地上の方に目を向けると、そこにはセレナがいた。
そのセレナは白い手袋とブーツ、赤いサングラスを身に着けていた戦闘員の集団を相手にしている。
その戦闘員はチョイアーク。
幻影帝国が侵略する際に送り込んだ戦闘員である。
幻影帝国が壊滅した事によってチョイアークは消滅された。
「ハァァァッ!!」
セレナは剣でチョイアークを一掃する。

すでにチョイアークが全滅したのを確認した後、剣を鞘に納める。
「やるじゃねぇか。俺の出番がなかったぜ。」
「チョイアーク如き、お前が手を出すまでもないでしょう。」
すでにゼロの変身を解いたシンはセレナに褒めるが、対するセレナは不器用にそう答える。

その頃・・・
「アクセルシューター!」
開拓島・ノルンでなのはを相手に戦闘を繰り広げられるスピカとネッシー。
その訳は真理奈の提案で、新たに誕生したスピカとネッシーの戦闘データを採取したいとの事で、なのはを練習相手に戦わせているのである。
「なのはさん・・・っ!やっぱり隙がありませんね!」
「人数では私達の方が上回ってるのにかすりもしないなんて・・・」
スピカとネッシーは数十分程なのはと交戦していたが、避けられたり防がれたりで一撃も与えられなかった。
「3人共、お疲れさん。もう結構よ。」
真理奈はなのは達に戦闘を打ち切らせる。
なのは達は変身を解き、真理奈の元に集まる。
「どうだった?」
「過去のデータ・・・というより、シュミレーションシステムで再現したデータと今のデータを比べると、ネッシーの方は私の希望通りの能力だったわ。」
「真理奈さんの?」
「ええ、キュアネッシーの能力は水と氷の力を備わっていて、水中戦も得意、更に光に反射する物をワープトンネル化して移動する事ができるわ。」
真理奈はネッシーの能力について説明した。

「つまり、鏡や水溜まりがあればワープできるって事だね？」
「ええ。」
「私は？」
　エクセルは真理奈にスピカのデータの結果を聞く。
「キュアスピカの方はシュミレーションデータはないから比べようがないけど、宇宙空間にも適応できているようになってる。」
　真理奈はスピカの能力について説明する。
「宇宙にも活動できるの!?」
　エクセルはスピカの能力を聞いて驚嘆の声を上げる。
「え、ええ。ただ、戦闘力の面はネッシーより下回ってる。宇宙空間での活動以外の特別な能力もないし、ブレイブハートでステータスをカバーしてるから何とも言えない。」
　真理奈はノートパソコンに映っているスピカのデータを見て感想を述べる。
「そう言われるとがっかりするんですけど・・・」
　エクセルは真理奈の発言にイラっとする。
　真理奈達はスピカとネッシーのデータ収集を終えた後、休憩に入る。
「しっかし、あの金髪娘にもいろいろあるものね？」
「そうだね・・・」
　真理奈達はセレナの事を考える。
　～～～～回想～～～～
　昨日セレナが目覚めた後の事・・・
「G．F（ガーディアン・フォース）？」
「ええ。妖精の世界の平和の為に各地の精鋭達を集め、結成された組織、それがG．F。」
「彼らは人命救助や人に危害を加える魔物の退治といった様々な事件を解決してきたんですよ。」
「所謂自警団みたいなものか・・・」
　シン達にセレナはG．Fの所属だと告げ、そのG．Fについて話した。

「ウルトラマンやプリキュア達がイビロンを追った後、私はバラージ王国で怪しげな動きをしている何者かが蠢いていると知らせを聞き、単身バラージ王国に乗り込んだのです。」
「私達がルルイエに行った頃か・・・」
　真理奈はセレナの話を聞き、ゼロ達ウルトラマンとスピカとネッシーを除くプリキュア達がルルイエに向かった後、セレナはバラージ王国で不穏な動きをしている者の動向を探るために、一人でバラージ王国に向かった事を知る。
「城内に調べ回ったのですが、城の地下に機械兵器が待ち構えていました。それだけではなく、ユグドラシルの残党もいました。私はその機械兵器を破壊し、残ったユグドラシルの兵士達を捕えようとしたのですが、突然魔法が掻き消され、機械兵器により返り討ちに遭われたのです。」
「ゴスペルか・・・奴らが使ってたの？」
「いえ、その時の彼らにそれを使う素振りを見せませんでした。」
　セレナはバラージ王国での顛末を教える。
「そんで、あいつらに捕まったアンタは頭にあの輪っかを嵌められて、ユグドラシルの言いなりにされて、私達を襲ったという事ね？」
「・・・」
　真理奈に言われたセレナは不甲斐無いと思う余り黙りこくる。
　～～～～～回想終了～～～～～
「ミイラ取りがミイラになるとはこの事ね・・・」
「ちょっと真理奈？」
　エクセルは真理奈のセレナに対する小言を聞いてジト目で睨みつける。
「でも結局、真理奈さんを狙った理由が分からないままですね・・・」
「ええ。セレナも知らないって言ってたし・・・」
　エクセルとミコトはユグドラシルの残党が真理奈を狙う理由をセレナは知らないと分かり、落胆する。
「だったら、ユグドラシルに聞かなきゃだね。」
　なのはは真理奈を狙う理由をユグドラシルの残党に聞くことにし

た。

その頃、カオスヘッダー・イブリースとカオスヘッダー・メビュートとの戦闘が終わった後、三島大社の参道の上で歩くシンとセレナ。
ちなみにセレナは流石に甲冑を纏ったままなのは怪しいので、黄色いリボンをあしらったツバ広のフェドーラハットを頭に、金木犀柄の青いノースリーブワンピースにシースルーの黄色いカーディガンを羽織った格好をしている。
これらの服は真理奈が昨日通販で注文した急配品だそうだ。
ついでにもう一つ、チョイアークと戦った時に纏っていた甲冑だが、剣の形をしたペンダントとなって、彼女の首に掛けている。
「何故私が暢気に散歩などを・・・」
「そう言うなよ。もう戦えるようになったからって、まだ病み上がりなんだからな?」
シンは気楽にそう言う。
(ユグドラシルがいつ動き出すのか分からないのに・・・それに・・・)
セレナはユグドラシルの残党がまだ残っていて、今もトランプ共和国を狙っていることを気に掛ける。
それと同時に・・・
「ねぇ、あの女の子綺麗だね。」
「隣にいる人、彼氏かな?」
「羨ましい~。」
周りの人から視線を感じ、それぞれの感想を耳に入り、人には見せられまいと赤くなった顔を逸らすセレナ。
(~~~っ!あの女が買った服の所為で変な勘違いをされる羽目になるではないですか!しかも隣にこの男が近くにいたら尚更・・・!(///))
ほぼ八つ当たりに近い心の愚痴を浮かび上がるセレナ。
「おっ、もうすぐ咲きそうだな。」

「え？」
　セレナはシンが突然意味不明な発言を聞き、シンが見ている物を見ると、セレナが見たのはキンモクセイの花芽である。
「キンモクセイ・・・」
「秋頃に咲くみたいだな・・・」
　シンとセレナは目の前のキンモクセイを眺める。
「セレナ、このキンモクセイに思い入れあんのか？」
「えっ？え、えぇ・・・」
　セレナはシンにキンモクセイの事を聞かれ、慌てつつも答える。
「少しは気が楽になったか？」
「え？」
「そう1人で思いつめんな。今のお前には俺達がいるんだからな？」
　セレナはシンの言葉を聞いて、今のシンはセレナの事を心配かけてくれたのだと察する。
「お前、私の事を・・・」
「平和の為に戦ってんだろ？俺達と一緒だ。お前がまた危ない目に遭ったら助ける。お前も俺が追い詰められたら駆けつけて来い。」
「シン・・・」
　セレナはシンにそう言われて、少し安心する。
「そろそろなのは達のトコに戻るか。」
「えぇ。」
　セレナはシンの言う通り、真理奈の家に戻ろうと思い、人気のいない所で転移しようと場所を変える。
「セレナ、妖精の世界にもキンモクセイがあるんなら、一緒に見に行こうぜ。」
「え？」
「ずっと戦いばかりだからな。あまり気にしてなかった。たまにはそう言うのもいいだろ？」
「・・・そうですね秋頃に咲くものですから、その時に・・・」
　セレナはシンに妖精の世界のキンモクセイを見に行く約束をされる。

この時、セレナは自分が言った事を思い返す。
（ん・・・って！私は何を言うのです!?最近会ったばかりの・・・しかも斬りかかろうとしたこの男とそのような約束を・・・!?（／／／／））
セレナはシンが言った事と自身が軽はずみに口にした事を頭に過り、顔が赤くなる。
「なのはとエクセルも仕事で忙しかったし、気晴らしにもなるしな。」
「へ？」
セレナはシンの発言に思考がストップする。
「ユーノもずっと読書ばっかりじゃ呆れるからな。なのはに頼んで連れて行くか。」
「・・・」
「？どうした、セレナ？」
「いいえ、なんでもありません。」
「え？ほん・・・」
「なんでもありません！」
「お、おう・・・」
セレナはシンは初めから2人きりにするつもりはないと察し、シンに声をかけられるとムキになって早歩きで移動する。
（俺、怒らせるようなこと言ったか・・・？）
一方のシンはセレナがムキになっている訳が分からず、そのままセレナに付いて行った。

生誕！金木犀のキュアランスロット

富士山の麓で2体の実体カオスヘッダー、カオスヘッダー・イブリースとカオスヘッダー・メビュートと対峙するゼロ。
その戦いでカオスヘッダー・イブリースとカオスヘッダー・メビュートはゼロの光線により消滅する。
一方、真理奈はなのはを練習相手にスピカとネッシーの戦闘データを採取していた。
それが終わった後・・・
「ブレイブハート！」
『了解！』
スピカはアクセルシューターを放ち、ネッシーを襲い掛かる。
一方のネッシーはファンタジラインのレンズをブローチに翳す。
「フリージング・ブレイク！」
ネッシーは右手から氷の結晶を放ち、アクセルシューターを氷漬けにした直後、バラバラに砕け散る。
『ソニックムーブ！』
スピカの体に青い光が包まれ、高速移動でネッシーの元へ飛翔する。
しかし、ネッシーは先程バラバラになった氷に吸い込まれるように入っていく。
スピカはネッシーの能力でワープしたんだと悟り、地上に着地した後、周りを見渡す。
その時、スピカは背後から気配を感じ取り、ラウンドシールドを展開する。
スピカの視線の先には、ネッシーが青い光のレイピアを手に持っており、そして更にネッシーの背後に湧き水があった。
「成程・・・！これはこれで厄介ね！」
「スピカも・・・！流石です・・・！」
現在、スピカとネッシーはなのはの提案で練習試合をしている。
「やれやれ・・・ついさっき高町に相手をさせてやったのにもう一度一

戦交えるなんて物好きな娘ね・・・」
　真理奈の小言からして、練習試合をしてほしいとお願いしてきたのはエクセルである。
　ミコトは最初は困惑していたが、先日シンを助ける為にプリキュアの力を得た経緯もあり、今後共に戦うその意味もあってか、彼女も了承していた。
「世界中に怪獣達が出て来てるからね。エクセルとミコトちゃんにも戦力になってもらわないと。」
「アンタもアンタで物好きね・・・」
　真理奈はなのはの言葉に呆れる。
「おっ。やってるな、あの二人。」
「シン君。セレナちゃん。」
「もう来たの？」
　いつの間にか戻ってきたシンとセレナに「おかえり」と言うなのは。
「セレナちゃん、なんだか表情が柔らかくなったね。」
「えっ？」
「シン君と偶然会ってデートでもしてたの？」
「っ!?で、デートなどしてません！（／／／／）」
　セレナはなのはの質問に顔を赤面しつつ否定する。
「いやいや、空間の歪みで子供の姿になったとはいえ、アラサーのアンタが言っても説得力・・・あだぁっ!?」
　真理奈が言いかけてる最中、なのはにデコピンされる。
「も～。失礼なこと言わないの。」
（こ、こいつ～・・・！）
　真理奈は額を抑えながらなのはを睨みつける。
「まぁ、いいわ。近い内にバラージ王国に行くって時に暗い顔されちゃあやり辛いったらありゃあしないわ。」
　真理奈の言葉からすると、今日の午後バラージ王国に向かう予定になっている。
　そこにユグドラシルの残党がいるのなら、早めに確保した方がいい。

幸い、ゴスペルは破壊され、ガジェット・ドローンは昨日の戦闘で撃破されている。
もしユグドラシルの残党に戦力があるとするなら、ホシイナーとナケワメーケくらいだろう。
クローン怪獣の存在にも頭に入れているが、問題はない。
ここには新たに誕生したスピカとネッシーがいるし、仮に怪獣が出てきてもゼロが対応してくれる。
加えて、なのはとユーノの魔法も頼りになる。
そこにトランプ共和国と連携すれば、ユグドラシルは今度こそ壊滅する。
「ご心配をおかけました。」
「気にしないでよ。」
セレナは声がした方に振り向くと、スピカとネッシーが歩み寄ってきた。
先程練習試合をしていたが、シンとセレナが戻ってきた事を知り、練習試合は一旦中止した
「なぎささんとほのかさんも迷惑だなんて思っていません。自分を責める事はありませんよ。」
「またあいつらに操られるようなことがあったら、もう一度目を覚ましてやるんだから。」
「2回目もあったら困るでしょ？」
セレナはスピカとネッシーと真理奈のやり取りを見て、微笑ましくなる。
『マスター。空間の歪みが発生しています。』
「えっ!?」
なのは達はレイジングハートに言われ、周囲を警戒する。
「！あそこ！」
ネッシーが指を指した方向に振り向くシン達。
そこに空間の歪みが発生し、その歪みからコスモスのコロナモードとエクリプスモードによく似た青いウルトラマンと赤いウルトラマン、ダイナによく似た異形の巨人と足が3本のクモのような怪獣と岩

石に頭と手足が付いた外見をした怪獣が現れる。
まず、青いウルトラマンの名はカオスウルトラマン。
カオスヘッダーがコスモスの力を分析・コピーした事で実体化した実体カオスヘッダーである。
コスモスのコロナモードと同じ能力を持ち、コスモスの意表を突いて倒したことがある。
次に赤いウルトラマンの名はカオスウルトラマンカラミティ。
カオスウルトラマンが更に進化し、エクリプスモードのコスモスの能力を学び取った事で実体化した実体カオスヘッダーである。
エクリプスモードのコスモスを苦しめたことがある。
そして、異形の巨人の名は超合成獣人ゼルガノイド。
人造ウルトラマン・テラノイドをスフィアが合成した事で誕生したスフィア合成獣である。
ダイナと同じ技を持っており、背中の突起からバリアを展開できる。
続いて三本足のクモのような怪獣は合成獣ダランビア。
スフィアが火星の岩石や砂を取り込んで怪獣化したスフィア合成獣である。
ＴＰＣ火星基地をスフィアと共に破壊し暴れまわった。
最後に頭と手足が付いた岩石のような怪獣は宇宙合成獣ジオモス。
ネオマキシマエンジンや岩石を取り込んで怪獣化したスフィア合成獣である。
ネオマキシマエンジンでパワーアップした亜空間バリヤーによりダイナを苦戦させたことがある。
「また怪獣が！」
「あのコスモスのそっくりさん、ヤバい雰囲気なんだけど・・・」
「実体カオスヘッダーにスフィア合成獣か！」
ダランビアとジオモスはカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティとゼルガノイドより先に前進する。
「皆は怪獣達を、あのニセモン共は俺がやる。真理奈、セレナを頼む。」
「えぇ。アンタ、一旦下がるわよ。」

「しかし・・・！」
「今のアンタは怪獣と戦える力はないわ。さ、早く。」
セレナは真理奈に安全な場所に連れて行かれる。
なのははバリアジャケットにセットアップし、シンはウルトラゼロアイでウルトラマンゼロに変身する。
「ベリアル程じゃねぇが、骨がありそうだな？」
ゼロはカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティを見て、自分の拳をポキポキと鳴らす。
「ブラックホールが吹き荒れるぜ！」
ゼロはカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティを、なのはとスピカとネッシーはゼルガノイドとダランビアとジオモスを引き受ける。
「悪党面のウルトラマン２人と怪獣３体、いかにもヤバい状況ね。あのデカブツを倒せたゼロは兎も角、高町達だけじゃ・・・」
岩陰に隠れる真理奈とセレナ。
真理奈はゼロ達の戦況を見て、ルルイエで戦ったガタノゾーア程ではないが、最悪な状況を目の当たりにする。
「シン・・・」
セレナはゼロを見て、自分だけ戦場に出れないことに口惜しむ。
ゼロはゼロスラッガーでカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティを斬りかかるが、コスモスの能力を模写したためか、ゼロの攻撃に受け流されてばかりである。
「チッ！一筋縄じゃいかねぇか・・・だがなぁ！」
ゼロはルナミラクルゼロにタイプチェンジし、ウルトラゼロランスを召喚する。
「ニセモンが俺様に勝とうなんざ・・・２万年早いぜ！」
ゼロは自身のスピードを駆使してのウルトラゼロランスによる攻撃で、カオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティを攻め続ける。
しかし、カオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティには決定打にならない。

「レイジングハート！」
『チェーンバインド！』
なのはは今、ゼルガノイドの相手をしている。
チェーンバインドで動きを封じようとするが、すぐに引き千切られる。
ゼルガノイドはビームスライサーを放つが、なのははラウンドシールドで防御する。
ゼルガノイドは更にソルジェント光線を放とうとする。
「ケイジングサークル！」
その時、ゼルガノイドの周囲に緑のリングが展開され、更にゼルガノイドの両手両足にオレンジのリングが囲み、動けなくなる。
「なのは！大丈夫かい!?」
「ユーノ君！うん、平気だよ！」
なのは達は態勢を立て直し、ゼルガノイドに攻撃を加える。
一方のスピカとネッシーはダランビアとジオモスの亜空間バリヤーに苦しめられている。
「攻撃が通りません！」
「防御魔法とは比べ物にならないわね！」
スピカとネッシーはダランビアの糸状の破壊光線やジオモスの破壊電磁波を避けるのに精一杯である。
「ミラクルゼロスラッガー！」
ゼロはミラクルゼロスラッガーを放つ。
カオスウルトラマンは自身を光の粒子化して躱し、カオスウルトラマンカラミティは素手で全てゼロに弾き返す。
ゼロは自身が放ったミラクルゼロスラッガーを弾き返され、全て被弾される。
「あのウルトラマン、とんでもなく手強いわね・・・」
「お前、そんな暢気なことを・・・」
カオスウルトラマンカラミティはカラミュームブレードを放つ。
ゼロはウルトラゼロランスからウルトラゼロディフェンダーに変化させ、カオスウルトラマンカラミティの攻撃を防ぐ。

その時、ゼロの背後に青黒い超高熱火炎の圧殺波動が命中される。
「ぐわあぁっ!?」
ゼロはその波動に吹き飛ばされ、元のゼロの姿に戻る。
ゼロは後ろに振り向くと、先程粒子化して躱されたカオスウルトラマンがいた。
先程の波動はカオスウルトラマンのインベーディングウェーブである。
カオスウルトラマンカラミティは立ち上がろうとするゼロにカラミュームショットを放つ。
ゼロはウルトラゼロレクターでカオスウルトラマンカラミティの光線を防ぐ。
カオスウルトラマンはゼロがカオスウルトラマンカラミティの光線を防いでいる隙にダーキングショットを放つ。
ゼロはカオスウルトラマンの攻撃を喰らい、ウルトラゼロレクターが破れ、カオスウルトラマンカラミティのカラミュームショットが直撃される。
「これはマズいわね・・・」
真理奈はこの光景を目の当たりにし、焦りを見せる。
「シン!」
「ちょっ、アンタ!」
セレナは居ても立ってもいられず、岩陰から走り出す。
(私は逃げない!私を救ってくれた彼がこのまま敵に追い詰められるのを見ているなど、私の誇りが許しません!)
セレナは三島大社の参道でシンに言われた言葉を思い出しながら戦場に走る。
その時、ディメンジョンゲートから黄色い光が現れ、その光がセレナの方に飛んでいき、そのままセレナを包み込む。
「今のは!?」
真理奈は今の展開を見て、ミコトがネッシーに変身した時の事を思い出す。
「これは・・・!?」

セレナは光に包まれた状態に呆気をとられる。
その時、セレナの目の前に黄色い光の球が現れ、その光がファンタジラインに変わる。
ファンタジラインの画面に「Ｔａｐ　ｔｈｅ　ｌｉｎｋ」と表示される。
「これは!?あの２人が持っていた・・・！」
セレナは言いたい事が色々あるが、それは後回しにし、画面にタッチする。
その時、画面が黄色に拡がり、そこから黄色い光が溢れ出し、セレナを包み込む。
「ファンタジック・ダウンロード！」
セレナは黄色いコスチュームを身に纏い、胸に２本の剣を×の字に重ねた上に盾を上乗せしたような形をしたブローチを飾り、金色に染めたティアラを嵌め、湖畔の金木犀の木の下に居座る貴婦人に抱えられた幼子が描かれたスマホポーチが付けられる。
「輝く花の如く気高き騎士！キュアランスロット！」
プリキュアに変身したセレナはキュアランスロットと名乗る。
「キュアランスロット!?」
「新しいプリキュア・・・！」
「セレナちゃん・・・」
スピカとネッシー、なのはとユーノはセレナがキュアランスロットに変身した事に驚く。
「・・・私が・・・プリキュアに・・・」
ランスロットは自身の姿に動揺する。
「・・・シン・・・今、参ります！」
ランスロットは自分がプリキュアになった事に焦ってはいたが、今は平静になり、ゼロの元に走り出す。

一方・・・

「あやつの実家の近くに通り掛かってきたが、この頃合でテイルズハートチップが反応するとは・・・」
真理奈の家の近くに立っているアカデミックドレスの少女がそのように呟く。
そう、セレナに飛んでいた光の球はアカデミックドレスの少女が持っていたメモリーカード、つまりテイルズハートチップである。
「あなたは・・・」
「ム・・・」
アカデミックドレスの少女は声をかけられた者の方に振り向く。
「真理奈の母君・・・真奈美か・・・」
「3年間、何の音沙汰もなかったけど、元気そうでよかったわ。」
アカデミックドレスの少女の前にいる女性、真理奈の母、新真奈美はホッとしたような表情で言う。
「何の報せもなくすまぬな・・・」
「気にしないで、タロット。もう気にしてないわ。」
真奈美はアカデミックドレスの少女にタロットと呼ぶ。
「それより、あなたがたった今姿を現したという事は・・・」
「今は何も教えん。近い内にまたここに来ることになる。その時に話すぞ・・・」
タロットはそのように告げ、真奈美から去って行く。
真奈美は去って行くタロットを心配そうに見届ける。

ＶＳカオスウルトラマンカラミティ

開拓島・ノルンで練習試合をしたスピカとネッシー。
そこでシンとセレナが訪れ、互いに和解をする。
その時、空間の歪みからカオスウルトラマン、カオスウルトラマンカラミティ、超合成獣人ゼルガノイド、合成獣ダランビア、宇宙合成獣ジオモスが現れる。
シンはゼロに変身し、カオスウルトラマン達と交戦するが、苦戦する。
その時、セレナがキュアランスロットに変身した。
「ゴールデンペタル・スラッシュ！」
ランスロットはファンタジラインをブローチに翳し、もう片方の手を頭上に挙げ、掌に金色の球が形成し、カオスウルトラマンに手を向けると、金色の花弁が放たれる。
カオスウルトラマンはランスロットに狙われていることに気付き、バリアでランスロットの攻撃を防ぐ。
「くっ！」
ランスロットは自分の技に防がれて口惜しそうに顔が歪む。
その時、ランスロットは何かを感じ取り、すぐその場から離れる。
その訳は、ジオモスの体から発する破壊電磁波がランスロットを襲ったからである。
「アイスミラー・リフレクション！」
ランスロットの前にネッシーが現れ、ジオモスの破壊電磁波を巨大な氷の盾を召喚し、ジオモスの破壊電磁波を跳ね返す。
破壊電磁波はジオモスに直撃する。
「ディバインバスター！」
そのジオモスの前にスピカが現れ、ブレイブハートをジオモスに向け、ディバインバスターを放つ。
ジオモスはスピカの攻撃に怯む。
「大丈夫ですか？」
「え、ええ。」

「シンさんを助けたい気持ちは分かるけど、焦らないで。ここは協力していきましょう。」
「・・・分かりました。」
ランスロットはゼロの援護は後回しにし、スピカとネッシーと共にダランビアとジオモスを倒すことにした。
「私が動きを止めます！」
ネッシーはファンタジラインをブローチに翳す。
「コールドウェーブ・ストーム！」
ネッシーはブローチから青白い光球を召喚し、ベーゴマを投げる要領で飛ばし、その光球から竜巻状の寒波をダランビアとジオモスの足に襲い掛かる。
これによってダランビアとジオモスはネッシーの技により、歩くことも出来なくなった。
「スピカ！ランスロット！」
「オッケー！」
「はい！」
スピカとランスロットはファンタジラインをブローチに翳す。
「プリキュア・ギャラクシーストリーム！」
「シャイニング・フレグランスフレア！」
スピカはおとめ座の天体図を模したエンブレムを召喚し、そのエンブレムにエネルギーが集約し、そこから光線が発射される。
ランスロットは金の光の花弁を集約し、キンモクセイの花を形成した後、おしべの部分から金色の光線が放たれる。
ダランビアとジオモスはスピカとランスロットの攻撃により、バラバラに爆散される。
「流石ですね、スピカ。」
「あなたも、上出来よ。」
スピカとランスロットはお互いにフィストバンプをやる。
ネッシーはその様子を見て微笑ましく思う。
「チェーンバインド！」
ユーノはチェーンバインドでゼルガノイドを縛りつけるが、スケー

ルの違いがある為、すぐに引き千切られる。
「ディバインバスター！」
なのははディバインバスターを放つが、ゼルガノイドはそれに対し、ソルジェント光線で圧し返す。
なのははすぐに回避する。
ゼルガノイドは上空に飛びあがり、太陽を背に向け、なのは達の方に向ける。
すると、ゼルガノイドは両手を広げて光のレンズを形成し、太陽光線を増幅した高熱ビームを放つ。
この光線はミラクルタイプのダイナが使用した技・シャイニングジャッジである。
なのはとユーノはそれを躱す。
ゼルガノイドの攻撃が木々に命中し、木々が枯れ始める。
ゼルガノイドはなのはに狙いを定め、超高熱の赤いエネルギー光弾を放つ。
今の技はストロングタイプのダイナのガルネイトボンバーである。
なのははラウンドシールドで防ぐが、威力が殺しきれず、ユーノに助けられ、ゼルガノイドの攻撃を躱す。
「あの怪獣、ダイナの技が使えるの!?」
岩陰に隠れている真理奈はゼルガノイドの能力に驚愕する。
「エメリウムスラッシュ！」
ゼロはエメリウムスラッシュを連発するが、カオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティは全て防いだり躱したりする。
「なのはさんとユーノ司書長、ゼロが危ない！応援に行くわよ！」
「はい！」
「えぇ！」
スピカ達はゼロ達の救援に向かおうとする。
「！待って！」
「えっ？」
スピカはバラバラになったダランビアとジオモスの体が一つとなり、違う怪獣の姿となって誕生する。

クモのような姿だったダランビアが二足歩行が可能になった体型となり、前傾態勢の岩石のような姿だったジオモスが直立姿勢となった背中に無数の棘が生えた体型となっている。
まず前者の怪獣は超合成獣・ネオダランビア。
ダランビアの破片が再結集して復活したスフィア合成獣である。
ダランビアの時と違い、能力がパワーアップしており、亜空間バリアもより強化された。
後者の怪獣は超宇宙合成獣・ネオジオモス。
ジオモスが脱皮した事で誕生したスフィア合成獣である。
ネオダランビア同様、能力も亜空間バリアも強化されている。
「こいつら、あの時の怪獣なの!?」
「姿形を変えて生まれ変わるなんて・・・!」
「このままではシンが・・・」
ネオダランビアは頭部から破壊光線を、ネオジオモスは額から赤色破壊光弾をスピカ達に放つ。
スピカはラウンドシールドを展開するが、防ぎ切れず、爆発による衝撃で吹き飛ばされる。
ネオジオモスは更に追い打ちをかけるように破壊電磁波を放とうとする。
その時、空中から手裏剣状の光弾が降り、ネオジオモスに命中される。
ネオジオモスはそのまま仰向けに倒れる。
その直後に赤・青・銀の体色をした巨人と青と銀を基調とした巨人が降り立つ。
「あれは!」
真理奈が見た2体の巨人、ウルトラマンダイナとウルトラマンコスモスである。
まず、ウルトラマンダイナはアスカ・シンがネオフロンティアスペースの火星で変身した光の巨人である。
グランスフィアの消滅によって発生したワームホールによって行方不明になったが、生存を確認した。

そして、ウルトラマンコスモスはコスモスペースの地球で幼い頃の春野ムサシが運命的な出会いを邂逅した慈愛の戦士と呼ばれた巨人である。
ムサシが大人になり、遊星ジュランで怪獣と人間が共存する惑星にした後にも別の次元宇宙で活躍していた。
「ダイナとコスモス・・・アスカ兄さんとムサシ兄さんか！」
「また新しいウルトラマン!?」
スピカはダイナとコスモスを見て驚愕する。
その時、ゼロと交戦しているカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティを妨害するかのように、三日月型のカッター光線が襲い掛かる。
カオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティはそれを避ける。
ゼロは後ろに振り向くと、胸と肩に突起が付いている巨人と、頭部に左右対称の角が生えた巨人が降り立つ。
「また増えた!?」
「ゾフィー！タロウ！」
ゼロの前に現れた巨人、その一人はゾフィー。
Ｍ７８星雲・光の国の宇宙警備隊隊長を務める宇宙人である。
同時にウルトラ６兄弟の長男的存在である。
もう一人はウルトラマンタロウ。
Ｍ７８星雲・光の国の宇宙警備隊筆頭教官を務める宇宙人である。
そして、ウルトラ６兄弟の六男的存在でウルトラマンＮｏ６と呼ばれている。
「ゾフィー！タロウ！」
「大丈夫か、ゼロ。」
「へっ！いいトコで横入りしやがって。こっからが逆転するとこなのによ。」
「よく言うぜ。明らかに押されてんじゃねぇか。」
「うるせぇ。」
ダイナに弄られるゼロ。

だが、今はその場合ではない。
カオスウルトラマンカラミティ達がゼロ達に襲い掛かる。
コスモスはカオスウルトラマンカラミティの攻撃を軽やかに防ぐ。
ダイナはゼルガノイドの蹴りを受け止め、投げ飛ばす。
ゾフィーはネオジオモスの尻尾攻撃を躱し、ネオジオモスの腹に蹴りを入れる。
タロウはネオダランビアの触手のような腕を高くジャンプして躱し、スワローキックをお見舞いする。
ゼロはカオスウルトラマンの超高速のバック転に攻められるのに対し、後ろに飛行して躱しまくる。
コスモスはルナモードからコロナモードにタイプチェンジし、カオスウルトラマンカラミティを受け流しつつ、反撃する。
カオスウルトラマンカラミティもコスモスの攻撃を躱し、一撃を入れようとするも、躱される。
コスモスはネイバスター光線を放つが、カオスウルトラマンカラミティはバリアを展開し、それを防ぐ。
コスモスは更にプロミネンスボールを放つも、カオスウルトラマンカラミティはそれを受け止めて、投げ返した。
コスモスはサンダースマッシュで投げ返されたプロミネンスボールを破る。
その間、コスモスはコロナモードからエクリプスモードにタイプチェンジした。
カオスウルトラマンカラミティはコスモスに殴りかかるが、コスモスはカオスウルトラマンカラミティの攻撃を躱しつつ反撃する。
お互い有効打を与えられないまま攻撃を受け流していた。
コスモスは距離を取り、エクリプスブレードを放つ。
しかし、カオスウルトラマンカラミティは素手でコスモスの技を破る。
ダイナはフラッシュタイプからストロングタイプにタイプチェンジし、ゼルガノイドを応対する。
ゼルガノイドはダイナのパンチを受け止め、脇腹に蹴りを入れる。

ダイナは怯んだが、ゼルガノイドの回し蹴りを前回り受け身で避ける。
ゼルガノイドはガルネイトボンバーを放つ。
ダイナはゼルガノイドの技を受け止め、そのまま投げ飛ばす。
ゼルガノイドは飛翔して返された技を避けた。
ダイナはストロングタイプからミラクルタイプにタイプチェンジする。
ゼルガノイドはレボリウムウェーブを放つ。
ダイナはダイナテレポーテーションでゼルガノイドの攻撃を躱し、ゼルガノイドの背後を取った。
ダイナは連続回し蹴りでゼルガノイドを地上に叩き落す。
ネオジオモスは破壊電磁波を放つ。
ゾフィーはネオジオモスの攻撃に命中されることなく、そのまま走り抜く。
ゾフィーはネオジオモスの腹に蹴りを入れる。
その後、ゾフィーはスペシウム光線を放つが、ネオジオモスの亜空間バリアにより防がれる。
ネオジオモスはゾフィーを捕えようと尻尾で巻き付けようとするが、ゾフィーはジャンプして避ける。
ゾフィーはＭ８７光線を放つ。
ネオジオモスは先程のように亜空間バリアを展開して防御するが、ゾフィーの光線の威力が強かったのか、亜空間バリアが破られる。
ネオダランビアは右腕を触手のように伸ばし、タロウを巻き付け、高圧電流を流す。
タロウはネオダランビアの攻撃に苦しめられるが、ブルーレーザーでネオダランビアの右腕を焼き切った。
ネオダランビアは破壊光線を放つがタロウはジャンプして避け、スワローキックでやり返す。
タロウはネオダランビアの腹に連続パンチを与える。
ネオダランビアはタロウの連続パンチにより後退するも、そのまま破壊光線を放つ。

タロウはそれを避け、ネオダランビアを首投げした。
ゼロは高速でバック転するカオスウルトラマンをジャンプで躱す。
カオスウルトラマンはバック転を止め、ゼロにカオスプロミネンスを放つ。
ゼロはゼロスラッガーをカラータイマーに装着し、ゼロツインシュートを放ち、カオスプロミネンスを相殺する。
カオスウルトラマンは右腕からダークブレットを放つ一方、ゼロはウルトラゼロキックでカオスウルトラマンの攻撃を擦り抜け、そのまま腹に命中する。
「す、すげぇ・・・」
真理奈はゼロ達の戦いに圧巻する。
「タロウ!」
「はい!」
ゾフィーとタロウはネオダランビアとネオジオモスを蹴り飛ばした後、頭上に両手を重ね、スパークを放つ。
「ストリウム光線!」
ゾフィーとタロウはストリウム光線を放ち、ネオダランビアとネオジオモスに命中する。
ネオダランビアとネオジオモスはゾフィーとタロウの光線技により爆発四散される。
「やってやるぜ!」
ダイナはミラクルタイプからフラッシュタイプにタイプチェンジし、ソルジェント光線を放つ。
地上に叩き落されたゼルガノイドもソルジェント光線を放つが、ダイナのソルジェント光線の方が押しており、そのままダイナの光線に浴びせられる。
よってゼルガノイドは爆散される。
「見たかよ!俺の超ファインプレー!」
コスモスはゼロと合流し、互いの背中をくっつける。
「ムサシ、こいつらとは余程因縁あるみてぇだな?」
「あぁ。でも、カオスヘッダーは怒りや憎しみを捨て、愛と優しさを得

て、遊星ジュランを守ってくれた。今のカオスヘッダーは星を・・・命を滅ぼしたりはしない！」
「ならこの実体カオスヘッダーは、カオスヘッダー本体の仕業じゃねぇって事だな・・・一気に決めるぜ！」
カオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティはゼロとコスモスにダーキングショット、カラミュームショットを放つ。
一方、ゼロはワイドゼロショットを、コスモスはコズミューム光線を放ちカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティの光線を相殺する。
「ハァァァァァァァッ!!!!!」
ゼロとコスモスはより精神を集中し、光線の威力を高める。
よってゼロとコスモスの光線がカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティの光線を圧し、そのまま命中する。
よってカオスウルトラマンとカオスウルトラマンカラミティは消滅される。
戦いが終わった後、ゼロ達は変身を解く。
「ありがとうございました。皆さんが来てくれなかったら危ない所でした。」
「気にすんな。今までだってそうだったからな。」
アスカはなのはの頭を撫でて言う。
「しっかし、ゾフィーにタロウ。もう、誠司とカナタの体を分離したのかよ？」
「あぁ。２人はもう大丈夫だ。」
シンは目の前の２人の中年の男性を見て言う。
その２人の男性の正体はゾフィーとタロウだ。
そしてゾフィーの姿はＣＲＥＷ　ＧＵＹＳ　ＪＡＰＡＮ総監のサコミズ・シンゴの姿をしており、タロウは元ＺＡＴの隊員の東光太郎の姿をしている。
「てっきり、誠司とカナタ兄さんの体を借りて戦うのかと思った・・・」
真理奈は今のゾフィーとタロウの姿を見て、そう思う。
その時、真理奈のポケットから着信音が鳴り響く。

真理奈はポケットに入っているｉＰａｄを取り出し、通信を繋げる。
「もしもし、ダニエル？真理奈よ？」
『真理奈、大変なことが起きた。トランプ共和国に怪獣達が攻めてきた。』
真理奈はダニエルの報告に驚きの顔を浮かべる。
なのは達も今の話に驚きを隠せなかった。

青とピンクの速き来訪者

開拓島・ノルンでカオスウルトラマンカラミティ、カオスウルトラマン、ゼルガノイド、ダランビア、ジオモスの出現により、激しい戦闘を繰り広げられるゼロ。

スピカとネッシーとランスロットはダランビアとジオモスを撃破するも、超合成獣・ネオダランビアと超宇宙合成獣・ネオジオモスとなった。

その時、ダイナ、コスモス、ゾフィー、タロウが加わり、ゼロと共に戦闘を再開する。

ゼロ達は辛うじてカオスウルトラマンカラミティ達に勝利する。

しかし、トランプ共和国で事件が起きた。

「城下町の大半は制圧しました。」

「このまま行けば王宮まで手を伸ばすのも時間の問題です。」

２人の兵士は現在のトランプ共和国の状況を報告する。

「ゴスペルが破壊され、スパークレンスの強奪に失敗し、セレナも操りの輪を壊されてウルトラマンゼロ達の元にいる今、戦力に心許ないが、モンスターズルーラーは健在。例の機械兵器やホシイナーとナケワメーケもあるからトランプの国を取り戻すには十分だ。」

兵士長はトランプ共和国に来る前の出来事を振り返る。

真理奈が持つスパークレンスの強奪に失敗し、テストの為に使用したゴスペルも一機しかない為、ゼロに破壊された時は憤慨せざるを得なかった。

更に、操りの輪で操ったセレナもゼロによって救われる。

「デニーズ様はルルイエと言う島の一件の後、バロン王国に護送されている。ならば、今度は我々がトランプの国を取り戻す。そして、かつてのトランプ王国に戻すのだ。」

「隊長！報告します！王宮に結界が張り巡らせている模様！ホシイナーでもナケワメーケでも入れないようです！」

「怪獣達を向かわせろ！愚かなるジョナサン・クロンダイクめ。今度こそ地獄に送ってやる。」

ユグドラシル兵の数名は大統領府の方に進軍する。

その頃、シン達はダニエルからユグドラシルの残党がトランプ共和国に襲撃を受けていると報告を受けた為、ジュエル鉱国に通じるルートで向かうことにした。

シン達は先程カオスウルトラマンカラミティ達との激しい戦いで相当な疲労があり、トランプ共和国に着くまで変身は控えるようにした。

ちなみに、プリキュアやウルトラマン、魔導師のような力を持たない真理奈は留守番する事になった。

「わざわざ案内悪かったな、ディアーナ。」

「いえ、私もユグドラシルの事は遺憾に思っていましたから。」

シン達の先頭に進むダイヤモンドの頭をした妖精。

シンはその妖精の事をディアーナと呼ぶ。

カーバンクルと共にジュエル鉱国を守り続けていた妖精である。

真理奈に闇薙の剣を渡したのも彼女である。

「ジュエル鉱国、噂には聞いていましたが・・・」

「いろんな所に繋がってるんだね・・・」

「これから向かうのは最近できたばかりの通り道です。」

ディアーナはなのは達に行き先を伝える。

その後、目の前の穴から緑色の光が見えてきた。

その先に出ると、そこには人工的に作られていたと思われる地下水路になっており、壁や天井にはヒカリゴケに覆われていた。

「わ～・・・綺麗だね、地下にいるのに明るい。」

「コケ自体が光ってるんじゃなく、レンズ状細胞が暗所に入ってくる僅かな光を反射させていることから光ってるように見えるみたいだよ。」

「そうなんだ・・・」

なのはは壁や天井に覆われているヒカリゴケを見て驚嘆させられ

る。
そんななのはにヒカリゴケについて説明するユーノ。
その時・・・
「キャーーーーッ!!」
突然悲鳴が響き渡り、なのは達は驚く。
その悲鳴の正体はミコトであり、当人はシンの右腕にしがみついている。
「うわっ!?びっくりした～・・・・!」
「どうした？」
「あ、あ、あ、あ、あそこ・・・く、く、クモがが・・・・!」
シン達はミコトが指を指している所を見ると、数匹いるクモがいた。
「ミコトちゃん、もしかして虫が苦手なの？」
「う・・・お察しの通りです・・・」
「アハハハ・・・」
なのははミコトの反応を見て、ミコトは虫嫌いだと理解する。
シン達はディアーナの案内の元、先に進んだ。
尚、ミコトはシンの右腕にしがみついたまま歩いている。
「地底の川が深くなってきたわね・・・」
「この辺りは雨の影響で地底湖ができているんです。」
「じゃあ、この先に地底湖が・・・」
ムサシはディアーナの説明を聞いて、地下川の深さからして地底湖は近くにある事を予想する。
突然、地下川から２つの影が現れる。
「ん？」
「ひっ!?」
「なに？」
セレナ達は地下川から現れた影をよく見る。
その姿は全長５０ｃｍほどの大きさを持つ黄色い体をしたカエルである。
体長約３７ｃｍを誇るゴライアスガエルを上回っている。

「でかっ!?」
「キャーーーーッ!!」
エクセルはそのカエルの大きさに驚く。
セレナはそのカエルを見て悲鳴を上げる。
「えぇっ!?」
エクセルはセレナの反応を見て驚く。
「か、か、か、カエ、カエ・・・」
セレナは尻餅をつき、後退る。
2匹のカエルはセレナの方に近付く。
「く、く、来るな・・・!」
セレナは頭の中がパニックになり、カエルから離れようとする。
「チェーンバインド!」
エクセルはチェーンバインドで2匹のカエルを捕まえ、地下川に目掛けてチェーンバインドごと放り投げる。
2匹のカエルはそのまま川に着水される。
「セレナ、大丈夫!?」
「カエル・・・カエル・・・!」
「セレナちゃん、大丈夫!カエルはエクセルちゃんが追い払ったよ!」
エクセルはセレナに大丈夫かと声をかけるが、まだパニックになっている。
なのははセレナにカエルがいないことを教える。
セレナは周りを見て、カエルの姿がない事を知ると、覚束ないながらも立ち上がる。
その後、引き続き移動する。
現在、地底湖の付近にいる。
尚、セレナはミコト同様、シンの左腕にしがみついている。
「大丈夫か、二人共?」
「す、すみません、大変な状況なのに・・・」
「こ、こんな姿を、見られるなんて・・・情けない・・・」
シンに心配掛けられるミコトとセレナは表情は優れないが、受け答えする。

「シンの奴、相変わらず女の子にモテるな。」
「相変わらずって？」
　なのははアスカの言葉に頭にハテナを浮かべる。
「なのは達がこの世界に来る前、すでに６人も好かれてんだぜ。ほのかに舞、つぼみにみゆき、真琴にリコの６人にな。」
「シンはその事に自覚がないみたいだけどね。」
　アスカとムサシはシンについて話した。
「にゃははは・・・その６人と加えてミコトちゃんとセレナちゃんもか・・・」
「シンってホント、罪作りな人だね・・・」
　なのはとユーノはシンを見てそう呟く。
「みんな、気を引き締めろ。」
「この先に十数体怪獣の気配を感じる。」
　サコミズ（ゾフィー）と光太郎（タロウ）は出口が近づいているのと同時に怪獣が暴れていることをシン達に伝える。
「言われてみれば、地響きもするわね・・・」
　エクセルはサコミズ（ゾフィー）と光太郎（タロウ）の言葉を聞いた後、地響きがしているのを気付く。
「この先にトランプ共和国に通じる出口があるんだな？ミコト、セレナ、もう大丈夫か？」
「は、はい！ご心配おかけしました。」
「もう大丈夫です。」
　ミコトとセレナはシンにそう言われると、もう表情が良くなっていた。
「皆さん、私が案内できるのはここまでです。私はこの地下に生きる者達の命を守らなければなりません。」
「サンキュー！後は任せとけ！」
　シン達はディアーナと別れ、トランプ共和国に通ずる出口に向かって走り出す。
　洞窟から抜けたシン達は今、トランプ共和国郊外の砦の近くにいて、そこから見えるトランプ共和国の方に目を向ける。

彼らが見たのは、城下町で初代ウルトラマン、セブン、ジャック、Aが怪獣軍団と戦っている様子である。
それだけではなく、ユグドラシル兵達がトランプ共和国の兵士達と乱闘している。
「ゾフィーとタロウの言う通りだな。しかもホシイナーやナケワメーケだけじゃなく、前に襲ったガラクタ共もいるぜ。」
シンは初代ウルトラマン達がユグドラシルが引き連れた怪獣達と戦っている光景を見た後に見下ろすと、ホシイナーやナケワメーケ、そしてガジェットドローンの姿を目撃する。
「怪獣達は我々が引き受ける。」
「ゼロ、お前はエクセル達と共に王宮へ向かうんだ。」
「しょうがねぇな・・・行かせてもらうか。」
サコミズ（ゾフィー）はベーターカプセルを、光太郎（タロウ）はウルトラバッジを、アスカはリーフラッシャーを、ムサシはコスモプラックを掲げ、ゾフィー、タロウ、ダイナ、コスモスに変身する。
「ゾフィー!・タロウ!」
「遅くなった。」
「怪獣達をジョナサンの所に近付かせるわけにはいかない。頼りにさせてもらうぞ、ダイナ、コスモス!」
「はい!」
ダイナとコスモスはウルトラ6兄弟と並び、怪獣達を相手をする。
紹介を遅れたが、先ほど挙げている初代ウルトラマン、セブン、ジャック、Aもゾフィーとタロウと同じ宇宙警備隊の一員である。
まず、初代ウルトラマンはベムラーを怪獣墓場へ護送した時に逃げられ、それを追うために地球に訪れたウルトラ戦士である。
ゾフィーに救援された後、ウルトラ6兄弟の次男となって、今も平和の為に戦っている。
次に、ウルトラセブンは地球侵略を目論む宇宙人から地球を守るために姿を現したウルトラ戦士である。
ウルトラ6兄弟の三男であり、ゼロの父親でもある。
そして、ウルトラマンジャックは地球が自然界の異変による怪獣頻

出が目立った頃、地球に訪れたウルトラ戦士である。
警備隊一のブレスレットの使い手と呼ばれ、そのブレスレットで様々な窮地から脱した。
最後に、ウルトラマンAはヤプールが地球侵略の為に送り込んだ超獣と戦ったウルトラ戦士である。
初めは北斗星司と南夕子の2人で変身したが、夕子が地球から離れた後、星司一人で変身することになった。
シン達は怪獣軍団をゾフィー達に任せ、トランプ共和国に向かった。

そんな中、城下町にいる住民達を守りつつ、向かってくるガジェットドローンを撃破していくフーカとリンネがいた。
2人は既にバリアジャケットを纏っている。
「くっ！こいつら！只者じゃないぞ！」
「あれだけの機械兵器をここまで滅するとは！」
ユグドラシルの残党達は既に数機のガジェットドローンを撃滅させたフーカとリンネを見て焦りを見せる。
「おどれら！たいがいにせぇよ！」
「こんなことをして何になるの!?」
フーカとリンネはユグドラシル兵に詰め寄る。
「くっ、黙れ！貴様らに教えるものなどない！」
「魔導師兵！」
ユグドラシル兵は後ろにいる三人の兵士に指示する。
「岩砕き、骸崩す、地に潜む者達集いて赤き炎となれ！」
「闇に生まれし精霊の吐息の凍てつく風の刃に散れ！」
「まばゆき光彩を刃と成して地を引き裂かん！」
三人の魔導士は呪文を唱える。
すると、フーカとリンネの前に火球と氷柱が、頭上に雷が襲い掛かる。
「アクセラレイター！」

この瞬間、フーカとリンネは三人の魔導士による攻撃が命中される前に姿を消す。
「なに!?」
「消えた!?」
ユグドラシル兵達はフーカとリンネが突然姿を消して驚きを隠せなかった。
「お探しなのは、この子達かしら?」
ユグドラシル兵達は声がした方に振り向く。
そこには、フーカを抱えている深いピンクの三つ編みの髪型をした少女と、リンネを抱えているピンクのロングヘアーの少女がいた。
まず、フーカを抱える少女はアミティエ・フローリアン。
惑星エルトリアに住む『運命の守護者』の二つ名を持つ生体テラフォーミングユニットである。
愛称はアミタで、なのはと共にフィル・マクスウェルの野望を阻止した。
そして、リンネを抱える少女はキリエ・フローリアン。
アミタ同様、惑星エルトリアに住む『時の操手』と名乗る生体テラフォーミングユニットである。
フィルに利用されたイリスを救い出す。
「大丈夫ですか?お二人共。」
「あ、はい。」
「ありがとうございます。」
フーカとリンネはキョトンとした表情をしているが、ちゃんと礼を言う。
「今のは高速移動の類か!?」
「お前達!」
「時よ、足を休め、選ばれし者にのみ恩恵を与えよ!」
「大地に染み渡る、復讐の赤い血よ、その使命を果たせ!」
「ひるがえりて来たれ、幾重にもその身を刻め!」
三人の魔導士は兵士達の指示により、呪文を唱える。
「アクセルシューター!」

その時、三人の魔導士の魔法の詠唱を妨害するかのように、頭の側面にピンクの光弾が命中される。
「なっ!?」
「チェーンバインド!」
兵士達は三人の魔導士が今の攻撃で倒れたことに驚き、その直後に緑色の鎖に縛りつけられる。
「今のは!」
「アミタさん!キリエさん!」
アミタとキリエは声がした方に振り向くと、なのはとユーノが駆け付けてきた。
「なのはさん!ユーノさん!」
「あらら、どういうわけか小っちゃくなっちゃって・・・」
アミタとキリエは今のなのはとユーノを見て、そのように言う。
「がっ!?」
「ぐっ!?」
先程チェーンバインドで縛ったユグドラシル兵が背後から殴られ、そのまま地に伏せられる。
彼らの背後には、シンとエクセルがいた。
ミコトとセレナは少し遅れて駆けつけてきた。
「フーカさん、リンネさん、お久しぶりです!」
「エクさん!」
「エクセルさん!」
「お友達ですか?」
「えぇ。ヴィヴィオにジムに連れて来られた時に会ったから。」
フーカとリンネとの面識についてミコト達に教えるエクセル。
その後、なのはの口からこれまでの経緯をフーカ達とアミタ達に教えた。
「そうじゃったか・・・」
「私達は今からユグドラシルの身柄を確保に向かいます。2人は安全な所へ。」
「一緒に行かせないんですか!?」

「フーカさんとリンネさんは民間人よ。連れて行くわけにはいかないわ。」
　ミコトはエクセルにフーカとリンネを連れて行かないのか聞くが、エクセルは民間人を巻き込めないと言い出す。
「ワシらの事は大丈夫です！」
「私達も手伝わせてください！」
　フーカとリンネはエクセルに懇願する。
「でも・・・」
「もしものことがあれば私達が守りますから！」
「私もプリキュアの一人です。必ず守ってみせます！」
　ミコトとセレナはエクセルにそう言う。
「・・・決して無茶はしないように。なるべく私達の元から離れないでくださいね？」
「押忍！」
「ありがとうございます！」
　フーカとリンネはエクセルの言葉に頷く。
　こうして、フーカ、リンネ、アミタ、キリエを加わったシン達は大統領府へ向かった。

ＶＳゼッパンドン

トランプ共和国にユグドラシルの残党を押し寄せられ、窮地に陥りかけている事を知るシン達はディアーナの案内でトランプ共和国付近に通じる抜け道で向かう。

トランプ共和国に到着したシン達はヴィヴィオとアインハルトと同じナカジマジムでトレーニングを努めているフーカ・レヴェントンと、ヴィヴィオと対戦したリンネ・ベルリネッタ、そして、なのは達と共に地球で起こったマクスウェル事件を解決したアミティエ・フローリアンとキリエ・フローリアンと出会う。

フーカ達とアミタ達を加えたシン達は大統領府に向かった。

その大統領府に攻め込もうとするユグドラシル兵は今も結界を破ることができず、手間取っていた。

「ホシイナーやナケワメーケ、それに機械兵器を使っても破れんとは・・・」

「怪獣達もウルトラマンの妨害でこちらに来れん・・・」

「待機させている例のクローン怪獣を使うか・・・」

ユグドラシル兵達は大統領府に攻め込むことができず、イライラしている。

「いた！あそこよ！」

ユグドラシル兵達は声がした方に振り向くと、シン達が向かってきた。

「お前達！」

「もうここまで来たのか!?」

ユグドラシル兵達はシン達が来たと分かった途端身構える。

その直後にホシイナーとナケワメーケはネッシーとランスロットによって浄化され、ガジェットドローンはなのはとエクセルによって破壊される。

「懲りねぇ奴らだな。デニーズってオッサンはもう護送されたってのによ。」

「でもここまでです。すぐに降伏してください。」

なのははユグドラシル兵達に投降を呼び掛ける。
「黙れ！何も知らん余所者風情が我々を捕えるだと!?笑わせるな！」
「我らはトランプの国を取り戻す！例えそれが悪質なやり方だとしても！」
「そして、ジコチュー共に乗っ取られる前の、古き良き強きトランプ王国を再建させる！」
「あぁ。それこそがデニーズ様の意志を受け継ぎ、真の平和と誇りを取り戻す唯一の道筋なのだ！」
ユグドラシル兵達はなのはの呼びかけに応じず、断固してトランプ共和国を作り変えると言い出す。
「お前達、なぜそこまでして・・・」
「よっぽど引っ込みがつかねぇんだろう・・・」
「えぇ・・・」
エクセルはなのはと並び立つように前に出る。
「アンタ達だって、本当は分かってるんでしょ?こんなことしても国の為にならないって。」
「な、なにを・・・」
「そうだね。こうしてテロ行為をしたところで、あなた達に付いていく人達が一人でもいたでしょうか?」
「っ・・・！」
なのははユグドラシル兵達の心を抉るかのように説教する。
「あなた達のやっている事はただ国民の方々に恐怖を齎すだけです。特に怪獣と言う不確かな存在を誇示した所でこの国に平和を齎すことは有り得ないはずです。なのにどうして?」
ミコトはなのはに続くように説教する。
「っ・・・！何故だと!?あの戦いはジコチュー共に奪われたトランプ王国の未来をかけた戦いだったのだ！キングジコチューが誕生し、この国の住民達がジコチューとなり、トランプ王国が滅ぼされた・・・！そのキングジコチューはプリキュア達に浄化され、国民達が解放された事は認める・・・。だが、今のトランプの国は共和国となり、国王陛下が王位を引退し、ジョナサン・クロンダイクが初代大統領に任命

され、人間界と友好関係を築いた・・・?ふざけるな!!その為にかつて平和だったトランプ王国の面影をなかったことにするなど我慢できるか!」
　ユグドラシル兵は涙が出そうになりかけるも、抑えていた怒りをぶつけなければ気が済まないと言わんばかりに言い訳をする。
「だからユグドラシルを・・・」
「・・・」
　なのはは黙りこくっているが、エクセルより前に進み、ユグドラシル兵に詰め寄る。
「世界はいつだってこんなはずじゃなかった事ばかり・・・私が魔法と出会ってからそれを知りました。フェイトちゃんのお母さんを救けられなかった事、はやてちゃんの大切な人を見送るしかできなかった事、あの時の私は何もできませんでした。だから私は自分の目の前で悲しい物語が哀しいまま結末を迎えないように何としてでも助けるんだって決めたんです。」
「なのはさん・・・」
　なのはは自分の過去を話し出す。
　ＰＴ事件の事、闇の書事件の事。
　あの時の事件が起きた頃、なのははまだ未熟だった。
　それ故にプレシア・テスタロッサは庭園崩壊後、虚数空間に放り込まれる所を見届ける事しかできず、夜天の魔導書の防衛プログラムの再生を防ぐ為にリインフォース自身が消滅する所を見守る事しかできなかった。
　だからこそ、なのははそのようなことがないようにフィル・マクスウェルを逮捕し、彼に利用されたイリスとユーリを救い、海鳴市に照準を向けた衛星砲を破壊した。
「あなた達がどれだけ国を愛していたか分かりました。でも、こんなやり方をしてトランプの国の為になりますか?亜久里ちゃんを誘拐して、無理矢理戴冠させようとして、トランプ共和国の秘宝を盗んで、クローン技術を兵器にして、一度だけならず二度もテロを及んで、もし願いが叶えられたとして、これこそがトランプ王国の未来だと胸を

張って言えるんですか!?」
「・・・ぐっ・・・!」
なのはの言葉に口籠るユグドラシル兵達。
「大事なのは過去じゃなく未来なのよ。あなた達が求めたトランプ王国はもう戻ってこない。でも、未来を変える事は出来る。それは力を誇示するとかじゃなくて、守り合ったり、助け合ったり、同じ過ちを繰り返さないように解決策を模索していくの。その為にもあなた達を助けます。前回のテロや、今起こしたテロで傷ついた人達に報い、新しい一歩を踏み出す為にも!」
エクセルはユグドラシル兵にそのように言う。
「・・・フ、フフフ・・・ハ、ハハハ・・・どこまでも甘い・・・甘すぎる・・・!もう遅いのだ!何もかも!!」
ユグドラシル兵は紫の水晶を嵌めた杖を取り出し、頭上に掲げる。
すると、水晶が光り出し、大統領府の付近に魔法陣が展開される。
その魔法陣から、黒い体に胸部の発光体が備わり、赤い体表で覆われたサメのような怪獣が現れた。
「なっ!?」
「この怪獣は一体!?」
エクセル達は魔法陣から現れた怪獣を見て絶句する。
「フッハハハ!!これこそが我らの切り札!ゼットンとパンドンの細胞を組み合わせて誕生したクローン怪獣!今までのクローン怪獣と違っていう事聞かなかったが、このモンスターズルーラーの力があれば造作もない!行け!合体クローン怪獣ゼッパンドンよ!今こそ大統領府を攻め落とし、真のトランプ王国を再建するのだ!」
ユグドラシル兵は魔法陣から現れた怪獣をゼッパンドンと呼び、大統領府を攻め込めと命ずる。
本来この怪獣は合体魔王獣・ゼッパンドンと呼ぶ。
ジャグラス・ジャグラーがダークリングによってフュージョンアップする事で誕生したゼットンとパンドンを合体した魔王獣である。
ゼットンとパンドンの能力を持っており、オーブのサンダーブレスターですら苦戦を強いられた。

「そんなことさせない！」
なのは達はゼッパンドンの進攻を阻止しようと飛び上がろうとしたが、シンに止められる。
「俺に任せろ。お前らはこいつらを見張っておけ。」
シンはなのは達にユグドラシル兵達を見張るように言い、ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを出し、それを自身の目に嵌める。
よってシンはウルトラマンゼロに変身し、ゼッパンドンの前に立つ。
「勝てるでしょうか。真理奈さんから聞いた話ではゼットンとパンドンはハヤタさんやダンさんが苦しめた怪獣、その2体を合体した怪獣が相手なら・・・」
「大丈夫だよ。シン君は負けない。」
ネッシーはゼロとゼッパンドンが互いに対峙している光景を見て不安そうに言うが、なのははゼロの勝利を信じている。
「エクセルとミコトちゃんとセレナちゃんはガジェット達の対処をお願い。」
「はい！」
エクセルとネッシーとランスロットはなのはの指示により、城下町に残っている他のユグドラシル兵、ホシイナーとナケワメーケ、そしてガジェットドローンの対処に向かう。
「親父達を苦しめたゼットンとパンドンが合体した怪獣か。久々に腕が鳴るな？ブラックホールが吹き荒れるぜ！」
ゼロはゼッパンドンに攻撃を仕掛ける。
ゼッパンドンは瞬間移動でゼロの攻撃を躱し、紫色の破壊光線を放つが、ゼロはそれをウルトラゼロディフェンサーで防ぐ。
「エメリウムスラッシュ！」
ゼロはゼッパンドンにエメリウムスラッシュを放つが、対するゼッパンドンは六角形のバリアを展開してゼロの光線を防ぐ。
ゼッパンドンは反撃する為、口からゼッパンドン撃炎弾を放つ。
ゼロはウルティメイトブレスレットからウルトラゼロランスを出

し、ゼッパンドンの火球を斬り落とす。
ゼッパンドンは接近してくるゼロに尻尾で攻撃するが、ゼロはそれを受け止め、ハンマー投げの如く投げ飛ばす。
ゼッパンドンは起き上がり、再びゼッパンドン撃炎弾を放つ。
ゼロはジャンプしてゼッパンドンの攻撃を躱した直後、ウルトラゼロキックを繰り出す。
しかし、ゼッパンドンは稲妻状の光線でゼロを弾き飛ばす。
ゼロはゼッパンドンの光線で地に転がるが、すぐに立ち上がり、ウルトラゼロランスを投げ飛ばす。
ゼッパンドンは全身の高熱でウルトラゼロランスを溶かす。
ゼロはこの隙を逃さなかったのか、超高速で接近し、ゼロナックルを繰り出す。
ゼッパンドンはゼロの超高速によるパンチで後ろに倒れ込む。
ゼッパンドンは起き上がり、ゼッパンドン撃炎弾を数発放つが、一方のゼロはゼロスラッガーでゼッパンドンの火球を防ぐ。
その後、ゼロはゼロスラッガーを合体させたゼロツインソードを手に持ち、ゼッパンドンに接近する。
ゼロのゼロツインソードによる斬撃はゼッパンドンの胸の発光体を一の字に斬られる。
本来オーブを苦しませたゼッパンドンはジャグラス・ジャグラーがフュージョンアップした魔王獣の為、本能で戦う並の怪獣とは違って、戦況を的確に判断し、臨機応変に対応できる強敵である。
しかし、今ゼロが戦っているゼッパンドンはバリアを展開したり、瞬間移動で回避したり、全身の高熱で武器を溶かすなどするものの、所詮はクローン怪獣。
しかもユグドラシル兵が持つモンスターズルーラーで操られている為、そんじょそこらの怪獣と変わらなかった。
それがプリキュアの世界で誕生した個体とオーブが苦戦した個体の違いである。
「止めだ!」
ゼロはゼロツインソードを分離し、ゼロスラッガーをカラータイ

マーに装着し、エネルギーを充填する。
「ゼロツインシュート!」
ゼロはゼッパンドンにゼロツインシュートを放つ。
ゼッパンドンは六角形のバリアを展開するが、ゼロの光線に耐えきれず、バリアが打ち砕かれ、そのまま直撃される。
ゼッパンドンはそのまま仰向けに倒れ、爆散される。
「ば、バカな・・・」
「我らの切り札が・・・」
ユグドラシル兵達はゼッパンドンが倒された光景を見て、戦意を失ったかのように地に膝を付く。
「おぉぉぉ・・・!うおぉぉぉっ!!」
中には悔しそうに拳を地面に叩く者もいた。
更にモンスターズルーラーを手放して呆然とする者もいた。
「すごい・・・」
「あれがウルトラマンの力・・・」
「流石じゃのう・・・」
「うん・・・」
アミタ、キリエ、フーカ、リンネはスケールの違う戦いを目の当たりにして圧巻する。
なのはとユーノはユグドラシル兵に近寄る。
「ユグドラシルの皆さん、テロの現行犯であなた達を逮捕します。あなた達の身柄はクロンダイク大統領に預けます。どうか神妙にして下さい。」
「このモンスターズルーラーもロストロギア扱いとして封印させてもらいます。」
こうして、ユグドラシルの残党によるテロは幕を下ろした。
ウルトラ6兄弟が対峙している怪獣軍団も全滅。
城下町に放たれているホシイナーやナケワメーケ、ガジェットドローンもエクセル、ミコト、セレナによって全滅。
モンスターズルーラーはロストロギア扱いとして封印されるが、時空管理局に戻れない為、一時真理奈の家で保管する事になった。

その夜、トランプ共和国郊外にて・・・

「魔法を封じるゴスペル・・・2体の怪獣の細胞を併せ持つクローン怪獣・・・どうやら裏で手を引いてるようじゃな・・・」

タロットはトランプ共和国を見て意味深な言葉を言い残し、杖を地面に付く。

「星に住む精霊達よ。我らの手を取りて、新たなる地へと導き給え。」

タロットは呪文を唱えると光に包まれ、何処かへと消えていく。

お知らせ

この小説を読んでいる方々にお知らせします。
『ウルトラリリカルキュアファイト《リメイク》』に『ウルトラマンオーブ』から『ウルトラマンタイガ』までのウルトラマンを出すことを決めました。
５年以上小説を執筆してきたのですが、『ウルトラマンオーブ』以降、強力な怪獣が増え続けており、魔王獣を加えたり、『ＵＬＣＦ　エクストラストーリー』でオリジナルの怪獣を登場させたりしましたが、それでも物足りない感があるので、プリキュアの世界にオーブは勿論、ジード、ロッソ、ブル、グリージョ、タイガ、タイタス、フーマも加えて登場させます。
ただその為には、前作の『ウルトラマンゼロ＆プリキュアオールスターズ』のあらすじと設定、それから一部の文章を書き変える必要がございまして、ゴチャゴチャになりますが、続きが書けるように直します。
すみません、勝手な変更をしてしまって・・・（汗）
尚、当然ながら、オーブからタイガまでの怪獣は勿論、ギーストロンやライバッサーのような亜種の怪獣も登場させる予定です。
加えて、トロピカル～ジュプリキュア以降のプリキュア達も登場させます。
そして、『ＵＬＣＦ　エクストラストーリー』を読んだ方は知っていると思いますが、プリキュアシリーズの悪役が登場しましたが、『ウルトラリリカルキュアファイト《リメイク》』にも登場させる予定です。『ＵＬＣＦ　エクストラストーリー』に登場したオリジナルキャラも登場させたいと思います。
すみません、『ウルトラリリカルキュアファイト《リメイク》』で久しぶりの投稿がこれで・・・（汗）
本当はここでお知らせは終わりなのですが、１０００文字以下では投稿できないそうで、ここからはこの二人が進行させます。

？　この先は台本形式で執筆させてもらいます。
シャンティ「皆さん、初めまして！私はフロントワールドで魔物討伐や人命救助を任務とする組織・Ｇ．Ｆ（ガーディアン・フォース）に所属するキュアウーコンこと、ウォン・シャンティです。」
ユミナ「同じく、ユミナ・アンクレイヴです。」
シャンティ「『ＵＬＣＦ　エクストラストーリー』では、別の世界のお友達に助けられました。」
ユミナ「詳しくは『ＵＬＣＦ　エクストラストーリー』で。」
シャンティ「『ウルトラリリカルキュアファイト《リメイク》』にＧ．Ｆの日常や秘密を少しだけ教えてあげます。」
ユミナ「後書きに執筆させますので、お楽しみに。」
シャンティ「おっ！そろそろ終わりの時間みたいね。」
ユミナ「『ウルトラリリカルキュアファイト《リメイク》』と『ＵＬＣＦ　エクストラストーリー』共々、応援よろしくお願いします。」
シャンティ「また会いましょう！」
リオ、コロナ、ミウラ「これからも！リリカルマジカル頑張ります！」
ユミナ「リオちゃん、コロナちゃん、ミウラちゃん・・・・」
シャンティ「君達、いつの間に・・・・」

ありがとうございました。
それでは、次回もお楽しみに！

スピカ＆ネッシー＆ランスロット　プロフィール

キュアスピカ
変身者　エクセル・ロータス
パートナー　ブレイブハート
ピンクのポニーテールが特徴の魔導士ランクＡの空戦魔導士。（モデルのベースは創の軌跡のユウナ・クロフォード）
青い宝玉型のインテリジェントデバイス・ブレイブハートをパートナーとする。
空間の歪みの影響によってプリキュアの世界に迷い込んだ所をＨＵＧっとプリキュア、スタートゥインクルプリキュア、ヒーリングっどプリキュアと出会い、水の魔王獣マガジャッパとの戦いの最中、偶然にキュアスピカに変身し、共に戦った。
なのはをはじめとする機動六課やヴィヴィオをはじめとするナカジマジムの競技選手達、トーマ達とも知り合いである。
「明るく輝く乙女の星！キュアスピカ！」
プリキュアの変身時は襟に真珠が嵌められた星形のブローチを装い、胸にはハート型の宝石を中心にしたリボンが飾られ、モデルは『美少女戦士セーラームーン』のセーラームーンの衣装をベースにしたピンクの衣装に腰の部分を地面に届く程の長さで結んでいるリボンが飾られており、両腕にはハート型の宝石が嵌めているアームカバーが装っている。
天使の翼をモチーフにしたカチューシャの中心に星の装飾が飾られ、腰にはおとめ座の星座が描かれていたスマホポーチが付けられている。
宇宙空間での活動ができる為、空を飛ぶことができる。

キュアネッシー
変身者　早乙女ミコト
水色のショートヘアーが特徴のベローネ学院中等部２年桃組で学校生活を送っている真理奈の同級生。（モデルのベースは空の軌跡の

クローゼ・リンツ（クローディア・フォン・アウスレーゼ）
成績は良く、フェンシング部で都大会に出場する程運動神経がいい。
本名はミコト・アイアロス・サーゲイトで、妖精の世界（フロントワールド）にあるサーゲイト国の王女である。
開拓島・ノルンの調査に向かう途中、魔物の襲撃により、船から叩き落されたが、真理奈とまのんに助けられ、人間界（フェイスワールド）について教えて貰った。
真理奈の夏休みが終わった頃、まのんもベローネ学院に編入し、珈琲店ウィンヒルでの仕事を手伝っていた。
虫が苦手。
「時を遡る幻の水神！キュアネッシー！」
プリキュアの変身時は雪の結晶の形をしたブローチを襟に飾られ、胸に亀の甲羅の模様をしたリボンを装い、それにチェーンで繋がっている懐中時計が腰に飾られている。
衣装は流氷をアレンジした物となっており、スカートはふんわりとしたエアリー感がある。
ビッグウェーブを思わせる波型のカチューシャを嵌め、時計を背景にした流氷を通り過ぎるプレシオサウルスが描かれていたスマホポーチが腰に携えている。
水と氷を操る事ができ、水中戦も得意で、光に反射する物（鏡、ガラス、水溜まり等）をワープトンネル化して移動する能力を持つ。（仮面ライダー龍騎のミラーワールドをヒントにした。）

キュアランスロット
変身者　金城寺セレナ
金髪のロングヘアーが特徴のG・F（ガーディアン・フォース）の剣士。（モデルのベースはソードアート・オンライン　アリシゼーションのアリス・シンセシス・サーティ）
本名はセレナ・バーネット。
G・Fの任務でバラージ王国の調査に行った所をユグドラシルの

残党に捕らえられ、操りの輪で操られ、シン達に差し向けられるが、そのシンに助けられる。
その後、シン達と一緒に戦う事になり、共にユグドラシル残党のトランプ共和国侵攻を阻止した。
カエルが苦手。
「輝く花の如く気高き騎士！キュアランスロット！」
プリキュアの変身時は黄色のメタリック加工のワンピースタイプの衣装の上に騎士甲冑がモチーフのジャケットを羽織り、スカートの部分に金木犀の花柄模様をした腰マントで覆っている。
胸には×の字に重ねた二本の剣に盾を上乗せしたような形状のブローチを飾り、頭には金色に染めたティアラを嵌め、腰には湖畔に生えた金木犀の木の下に居座る貴婦人に抱えられた幼子が描かれていたスマホポーチが携えている。
植物と話す事ができ、自己治癒能力も持っており、太陽の光があれば徐々に回復できる。

ファンタジライン
エクセル、ミコト、セレナが所持する変身アイテム。
中には伝説上の生物、妖怪、神話に出てくる人物の情報をインプットしたメモリーカード・テイルズハートチップが内蔵され、その情報を基に架空の人物、生物をモチーフにした戦闘服を記録されている。
新真理奈が開発したアイテムだが、実験中による暴走により、彼女の友達だった中島すばるが一週間入院される羽目になった。
その後、真理奈はテイルズハートチップごとファンタジラインを廃棄処分したが、真理奈とは別の何者かが完成させ、エクセル達にプリキュアに変身できるようにした。
従来のスマートフォンのように通話やメールのやり取りは可能。
技を使う時は右スクロールして、本から出てきた鍵が描かれたアプリにタッチした後、襟に付いているブローチにファンタジラインを翳す事で、自分のイメージした技を放つ事ができる。
その技は記録でき、本棚が描かれたアプリをタッチする事で技の詳

細を知る事ができる。

尚、変身した時に決まった変身者でなければ変身できないようプログラムされている。

四人の魔導士

トランプ共和国に攻めてきたユグドラシルの残党は徐々に追いつめられる。
その時にその残党がゼットンとパンドンの細胞を組み合わせて誕生した合体クローン怪獣・ゼッパンドンを放つ。
シンはウルトラマンゼロに変身し、ゼッパンドンと対峙する。
その結果、ゼロの勝利へと収め、ユグドラシルの残党による犯罪計画は阻止した。
よって、トランプ共和国に再び平和が訪れた。
数日後、シン、真理奈、エクセル、ミコト、セレナ、なのは、ユーノ、アミタ、キリエ、フーカ、リンネは妖精の世界で旅行を楽しんでいた。
その頃・・・
「シロップ、わざわざご苦労だったナツ。」
「もう慣れっこロプ。そっちこそ、あの後の会合大変だったロプ？」
「大変ココ。怪獣頻出の対処、空間の歪みの原因究明があって頭が痛くなるココ。」
トランプ共和国防衛作戦及び、ルルイエでの邪神との戦いを終えた後、妖精の世界の各国の会合に出ていた。
その会合にはパルミエ王国は勿論、トランプ共和国、ホープキングダム王国、スカイランド等の代表達も参加していた。
「フィガロ王やヒルダ女王も怪獣の対処や空間の歪みの調査を協力してくれて心強い限りだココ。」
「それに、メップルとミップルの話によるとキュアスピカとキュアネッシー、キュアランスロットが加わって、ユグドラシルの残党を捕まえるのに協力してくれたナツ。これで一先ず調査に集中できるナツ。」
ココ達はその後、ティータイムを取って休息を取った。
シロップは運び屋の仕事があってスカイランドへ行く事になった。
「そういえば、タルトは妖精学校に行ったココ？」

「そうナツ。特別講師として学校に行く事になったナツ。ハミィも出るそうだナツ。」
会合の時、確かにスウィーツ王国の代表も参加していたが、タルトはその時にハミィと一緒に妖精学校の特別講師として特別授業をする予定が入っていた為、会合には出席していなかったのだ。

妖精学校、グレルとエンエンが在学していた学校で、影水晶の影の企みによってふたりはプリキュアＭＡＸ　ＨＥＡＲＴからスマイルプリキュアを水晶化して学校を壊滅的に追い込まれたが、ドキドキ！プリキュアとグレルとエンエンの頑張りによって逆転し、プリキュアオールスターズ全員で影水晶の影を負かし、平和を掴み取った。
その妖精学校から離れた森の中に空間の歪みが発生した。
その歪みからやや巻き毛の青いショートヘアーの女性とオレンジのツインテールの女性、赤い髪をした小柄な少年とピンクの髪をした小柄な少女が現れる。
まず、最初の青いショートヘアーの女性はスバル・ナカジマ。《ＪＳ事件》解決後、レスキュー隊の一員に配属した元機動六課の魔導士である。
元々はジェイル・スカリエッティの技術で生み出された戦闘機人だが、なのはの薫陶により姉のギンガを救い出した。
次にオレンジのツインテールの女性はティアナ・ランスター。《ＪＳ事件》解決後、執務官としてフェイトと同行した元機動六課の魔導士である。
ノーヴェ、ウェンディ、ディードの３人をまとめて検挙するという手柄を立てた。
そして、赤髪の少年はエリオ・モンディアル。《プロジェクトＦ》によって生み出されたクローンである。
人間不信になったが、フェイトの抱擁により機動六課に配属した。
最後にピンクの髪の少女はキャロ・ル・ルシエ。

故郷の集落から追放された後、フェイトに保護された魔導士である。
エリオと共に自然保護隊の任務にあたり、密猟者の逮捕を貢献した。
「やっと元に戻った～・・・・」
「なんなのよ、一体・・・・」
「キャロ、大丈夫・・・・？」
「大丈夫だよ～・・・・」
スバル達は疲れた表情で会話する。
その時、スバル達は今の姿を見て、表情が一変する。
「・・・・って、ティア!?なんか若返ってる!?」
「失礼ね！私はまだ若いわよ！ていうか、スバルこそ、背が縮んでない!?」
「えっ!?ウソッ!?」
「エリオ君も背が縮んでるよ!?」
「ホントだ！キャロだけほとんど変わってないのに!?」
「エリオ君、ヒドイ！」
スバル達の身長は機動六課配属時の背丈だった。
「ど、ど、ど、ど、どうしよう、ティア!?」
「うるさい！とにかく本局に連絡するわ！救助も要請しないと！」
ティアナは本局に連絡する為、通信を使ったが、繋がらなかった。
「うそっ!?通信できない!?」
「えぇ～っ!?」
スバル達は本局と通信できない状況にパニックになる。
「最悪だわ・・・こんな知らない世界に飛ばされて通信できないなんて・・・」
「可愛らしい景色だけど、不安で仕方ないよ・・・」
「管理外世界と言えば、管理外世界でしょうか？」
「でもこんな風景の世界なんて、今までの資料にも載ってないですよね・・・？」
スバル達はしどろもどろになりながらも、今いる世界の事を情報を

集める事にした。

その頃・・・

「みんな！ワイがフレッシュプリキュアの妖精、タルトや！」

「スイートプリキュアの妖精のハミィニャ。よろしくニャ♪」

妖精学校ではすでに授業が始まっていた。

当然、キュアエコーのパートナーであるグレルとエンエンも授業に参加している。

タルトとハミィは生徒達に挨拶した。

「握手は順番、サインは一人一枚やで～。」

「授業が終わったら一列に並んでほしいニャ～。」

そう言って、授業を再開する。

「ほな、今日の授業はソラシド市やスカイランドで活躍しとる、ひろがるスカイプリキュアを紹介するで～。」

タルトとハミィは教卓に移り、リモコンを押した。

画面が映り、５人のプリキュアがモヒカンの付いた怪物と戦っている映像が流れた。

「この５人がひろがるスカイプリキュアニャ。」

「ちなみに、今戦こうてる奴はアンダーグ帝国が使役しとるランボーグっちゅう奴や。」

タルトとハミィは映像に流れているプリキュア達をひろがるスカイプリキュアと呼ぶ。

ソラシド市で活躍しているとの事だが、説明は彼女達が登場した時にしよう。

講義がしばらく続いた後・・・

「ほな、最後に。みんな、これは知っとるか？」

タルトは風呂敷からペンライトのようなアイテムを取り出し、生徒達に質問する。

「ミラクルライト～！」

「せや。このミラクルライトはプリキュアはん達を応援する時に光らせるんや。」
「みんな。ミラクルライトを使う時に気を付ける事って何か分かるニャ？」
　タルトはミラクルライトを簡潔に説明した後、ハミィはミラクルライトの注意事項について質問した。
「投げない！振り回さない！光を近くで見ない！」
「大正解ニャ～!!」
「大袈裟やろ！」
　ハミィは生徒の回答に喜ぶと、タルトがツッコみを入れる。
「投げたり、振り回したり、光を近くで見たらアカン。よう覚えときぃや～。」
「は～い！」
　生徒たちはタルトのお願いに返事する。
　授業終了後、生徒たちはタルトとハミィに握手をしてもらったり、サインを書かせて貰ったりした。

　その頃・・・
「ここ・・・どこ・・・？」
　目が覚めた時には、まるで単眼鏡で見ているかのような光景になっていた。
　そこから見た光景は近未来の街並みに空には複数の月のような衛星が浮かび上がっていた。
「ネイメア～！待ってたよ～！」
「ヴィヴィオ！リオ！コロナ！お待たせ～！」
　視点を変えると、ヴィヴィオとショートの黒髪と八重歯が特徴の少女とキャンディを模した髪留めで纏めたツインテールの少女がいた。
　この二人がリオ・ウェズリーとコロナ・ティミルである。
　ヴィヴィオと同じＳｔ．ヒルデ魔法学院の生徒であり、ナカジマジ

ムの競技選手である。
リオは炎と電気の魔力変換資質の持ち主で、コロナはゴーレム創生の使い手である。
「ヴィヴィオ!?後ろにいる二人はヴィヴィオの友達なの？いやその前に、ネイメアって誰?!」
この光景を見た者は動揺を隠せなかった。
「アインハルトさんとミウラさん、フーカさんももう来てるよ！」
「来週はネイメアのU―15デビュー戦だから！」
「全力でサポートするね！」
「ありがとう！よろしくね！」
ヴィヴィオ達は面と向かって協力体制に入っていた。
「U―15って・・・オリンピックやワールドカップのようなスポーツ大会に使われる言葉だよね？・・・って事はそのネイメアってスポーツ選手なの？それになんでヴィヴィオ達は私の事をネイメアって呼ぶのよ？・・・って、アレ？」
その時、目の前が真っ白になってくる。
「ちょ、ちょっと待ってよ!?ネイメアって誰なの!?」
そう問いた時には、もう完全に目の前が真っ白になった。
目を覚ますと、景色が変わった。
今度は単眼鏡のような視点ではなく、ちゃんとした人間視野で入っている光景である。
その光景は音符が描かれていた壁紙に西洋風の窓があった。
その窓に近づくと、楽器を演奏している人や楽器をモチーフにした妖精があちらこちらにいた。
そして、窓をよく見ると、真理奈の姿があった。
「夢・・・だったんだ・・・」
そう、先程の光景を見た者は真理奈だったのだ。
更に言えば、目の前にヴィヴィオ達がいたのは、彼女が夢を見た光景だったのである。
更に加えると、真理奈が今いるのは、メイジャーランドの一室である。

メイジャーランドはハウリング、ノイズを撃退させたスイートプリキュアが活躍した音楽の国である。
このメイジャーランドはエレンとアコの故郷でもある。
真理奈は夢だと理解すると、ホッとすると同時に難しい顔をしていた。
「景色や目の前にいたヴィヴィオからして、ミッドチルダって世界の夢だよね？・・・でも、なんで私の事をネイメアって呼ぶの・・・？」
真理奈は夢に出てきたミッドチルダの光景、ヴィヴィオ達の存在、ネイメアについて考えていた。
しかし、考えても答えは出ないので、朝食を取るため、シン達と合流した。
そして、真理奈は夢の事をなのは達に教えた。
「真理奈も見たんか？」
「私もって・・・フーカ、アンタも？」
「そうじゃ。ミッドにいた夢を見たんも驚きじゃが、ヴィヴィさん達の他に髪型は金髪じゃが、真理奈にそっくりな女の子も出たんじゃ。」
「そいつがネイメアって事？」
「多分な。」
話しからして、フーカも似たような夢を見たようである。
真理奈の髪色は黒だが、フーカの夢に出てきた真理奈そっくりの少女の髪色は金だという事。
そして、その少女がヴィヴィオが呼ぶネイメアだという事。
夢に出てきた少女・ネイメアの事は分かってきたが、分からないのは、真理奈の夢に出てきたヴィヴィオ達が真理奈に向かってネイメアと呼ぶのかという事。
加えて、何故真理奈がミッドチルダの光景を夢に出て来たのかという事である。
「私はそんな夢、見なかったな・・・」
リンネは真理奈とフーカのような夢は見ていなかったらしい。
「フーカちゃん、ナカジマジムにネイメアって娘いた？」
「いえ、ハルさんがわしをジムに勧誘して以来、新しく入った人はおら

んかったです。」
　フーカの知り合いにネイメアはおらず、ナカジマジムに新しく入ったという話も聞かなかったようだ。
「それに、研究者を目指してる真理奈がジムを通うなんて想像できないわね。」
「お父様からジークンドーを教わったそうですけど、それでも運動は苦手な方ですから。」
「本当にルルイエでの戦いを参加した娘なのですか？」
「アンタらね、私を何だと思ってんのよ？」
　エクセルとミコトとセレナは真理奈を見てそう言うと、真理奈はイラっとする。
「まぁ、こんな下らない話はさておき、シン兄さんはどっか出掛けてんの？」
　真理奈は夢の話は置いておいて、シンがいない事に気付き、尋ねる。
「アンタって娘は・・・シンさんなら近くに怪獣の気配を感じたって言って飛んでったわよ。」
　エクセルは真理奈の発言に呆れつつも、質問に答える。
　付近に怪獣が現れ、それを対峙する為にゼロに変身し、飛んで行ったそうだ。
「ウルトラマンって忙しいな・・・」
　真理奈はエクセルの質問に対して苦笑いする。
「何も旅行中に怪獣が出てこなくても・・・」
「全くです・・・」
「もう少しお話したかったな・・・」
　ミコト、セレナ、リンネは不満を口に出す。
　その様子を見たエクセル、フーカは苦笑いし、真理奈は溜息を吐く。
「あれ？」
「どうしたの、なのは？」
　なのはは何かを見つけたのか、真理奈達から離れる。
　なのははテーブルの下に覗いてみると、小さな白い竜がいた。
「あっ！フリード！」

「へっ!?フリード!?」
なのははその小さい竜をフリードと呼ぶ。
エクセルはなのはが呼んだフリードの事を知ってるのか、なのはの所へ行き、テーブルの下に覗き見る。
フリードリヒ、キャロが使役するアルザスの竜。
よくキャロとエリオを乗せている。

その頃・・・
「あぁ～、もう！何もできないじゃないの！」
「ティア、落ち着きなよ？」
「落ち着けるわけないでしょ！バカ！」
なかなか進歩がなく、苛立つティアナにスバルが宥める。
「なんだか機動六課の事を思い出すね。」
「うん、なんだか懐かしいね。」
キャロとエリオはティアナとスバルのやり取りを見て六課時代の事を思い出す。
「おっ？」
スバルは誰かがいる事に気付く。
ティアナ、エリオ、キャロも便乗してスバルが見たものを見る。
スバル達が見たのは、ぬいぐるみのような生物が庭で遊び、亀のような生物と二足歩行して会話しているフェレットとネコのような生物である。
「なんなの、あれ!?しかも喋ってる!?」
「クリスとティオのようなデバイスじゃないみたいですけど!?」
「おぉ～！可愛い！」
「本当です！」
ティアナとエリオはその生物を見て驚愕し、スバルとキャロは可愛いと言う。
「誰ミミ！」

「怪しい奴らクク！」
スバル達は背後から声を掛けられ、振り向くと、フリードリヒと同じサイズの宙に浮いている胸のハートマークがトレードマークのイルカとベーグルパンのような形をした耳をしたビーグル犬種のような犬がいた。
「ワタシ達の友達をいじめようとするなら許さないミミ！」
「その通りクク！」
イルカのような生物と犬のような生物がそう言って警戒する。
「どうした!?ウミン！リック！」
ウミンと呼ばれたイルカとリックと呼ばれた犬は振り向くと、グレルとエンエンが駆けつけて来た。
タルトとハミィもグレルとエンエンと一緒に駆けつけてくる。
「また変なのが・・・」
ティアナは次々と出てくる謎の生物に困惑する。
「グレル先輩！怪しい奴らが！」
「怪しい奴ら!?」
グレルはウミンとリックから事情を聞いて、腰に携えている木剣を引き抜いてスバル達に向ける。
「待って待って！あたし達、君達をいじめるつもりないよ！」
スバルは間に入って仲介する。
その後、スバルの口から事情を説明する。

妖精学校の問題児

メイジャーランドで泊まらせた真理奈一行。
そこで、真理奈とフーカがミッドチルダの夢を見る。
真理奈はヴィヴィオ達と一緒にナカジマジムへ向かう夢を、フーカはヴィヴィオ達の他に真理奈と酷似していた金髪の少女・ネイメアの姿を映った夢を見ていた。
二人がその夢を見た理由は分からなかった。
一方、妖精学校付近に空間の歪みが発生し、その歪みからスバル・ナカジマ、ティアナ・ランスター、エリオ・モンディアル、キャロ・ル・ルシエが現れる。
行く宛てもなく移動する中、妖精学校に到着する。
その頃・・・
「じゃぁ、このチビドラゴンもなのはの知り合いってわけ?」
「うん。私の教え子達の一人でキャロって子の竜なんだ。」
メイジャーランドの城下町にある宿でフリードと会ったなのはは真理奈に紹介した。
フリードがその宿にあるテーブルの下にいたのは、空間の歪みの影響に巻き込まれて、そこにいたのだろう。
「フリードがプリキュアの世界に来たって事はキャロ先輩達も?」
「それは分からないね。」
エクセルはフリードがこの場にいた状況からして、キャロ達も空間の歪みに巻き込まれてプリキュアの世界にいるのではないかと推測していたが、なのはには分からない。
その時、突然大きく揺れ始めた。
なのは達は気になって宿から出る。
なのは達が目の当たりにしたのは、ユーモラスな外見をした出っ歯の怪獣である。
その怪獣の名は、笛吹き怪獣・オカリヤン。
オカリナの音色で地上に姿を現した怪獣である。
先述のオカリナの音色はオカリヤンの歯でできたオカリナである

為、仲間だと思って出現したのだ。
「怪獣!?」
「シン兄さんが出払ってる間に出てきやがって!」
真理奈はオカリヤンの登場に頭を抱える。
オカリヤンはメイジャーランドに向かって歩を進める。
「行かせるかよ!」
オカリヤンは上空を見上げる。
オカリヤンの目の前には、ウルトラマンゼロがやってきた。
ゼロはウルトラゼロキックでオカリヤンの顔面に命中する。
オカリヤンはゼロに蹴り飛ばされて、メイジャーランドから離される。
「ゼロ!」
「シンさん!」
「悪い、遅くなった。メカギラスって怪獣に苦労しちまってよ。」
ゼロはメイジャーランドに戻るまでメカギラスに苦戦したようである。
今のゼロはすでにカラータイマーが点滅していた。
オカリヤンは起き上がり、顔にできたたんこぶを引きちぎり、ゼロに向けて投げつける。
ゼロは振り向け様にエメリウムスラッシュを放ち、たんこぶを爆破させる。
「ストロングコロナゼロ!」
ゼロは先程の爆発による煙幕に紛れてストロングコロナゼロにタイプチェンジする。
「ウルトラハリケーン!」
ゼロはオカリヤンを掴み、ウルトラハリケーンで吹き飛ばす。
「ガルネイトバスター!」
ゼロは上空にいるオカリヤンにガルネイトバスターを放つ。
オカリヤンはゼロの攻撃により、爆散される。
ゼロはオカリヤンとの戦闘後、人間態であるシンに変わる。
シンはメカギラスとの戦闘と先程のオカリヤンとの戦闘による疲

れで膝をつく。
「シンさん！」
「シン！」
「おう！」
シンはミコト、セレナ、リンネの声を聞き、立ち上がる。
3人の後ろには、真理奈、エクセル、フーカが追いかける。
「大丈夫ですか？」
「あぁ。心配いらねぇよ。」
ミコト達は心配そうにシンに言うが、本人は平気そうだった。
「ウルトラマンってホント凄いわね・・・」
「そういうアンタもウルトラマンじゃない。」
「違うって。」
真理奈はエクセルに言われるも否定する。

その頃・・・
「ほな、なのははんとユーノはんらと同じように空間の歪みに巻き込まれた言うんか？」
「うん、そうなんだよ。」
「このまま空間の歪みが起き続けたらどうなるニャ～？」
「そうや！確か、あんさんら時空管理局はちゃう次元の行き来ができる技術を持っとるんやったな!?ミッドチルダの方で変わったことあらへんか!?」
スバル達が妖精学校に着いた途端、その生徒のウミン、リックが警戒していた（グレルも木剣を引き抜いて、それをスバル達に向けた。）が、スバルが誤解を解かせて、ミッドチルダにいたはずのスバル達が妖精の世界に来た経緯を話した。
タルトはミッドチルダに異変がないか聞いた。
「今話した通りだよ。あたし達だけじゃなく、他の局員や民間の人が

何人か空間の歪みに巻き込まれて行方不明になったんだ。」
「私も自分の仕事を終わった後、次元船を使って帰ったけど、移動中何も起こらなかったわ。」
　スバル達も空間の歪みについて、何が何だか分からなかったらしい。
「トーマ達は大丈夫なのかな・・・？」
「トーマ達もヴィヴィオ達も心配ないニャ。プリキュア達と一緒に旅行を楽しんでるニャ。今頃日本に戻ってるはずだニャ。」
「それに、なのははんがこの世界に来る前にミッドチルダから来た言う娘達もG．Fっちゅう妖精界平和維持機構が保護しとるって聞いとる。」
「それを聞いて安心したよ。」
　キャロ達はヴィヴィオ達が無事だという事と聞いて安心する。
「何はともあれ、ご無事で何よりです。」
「スバル達、ごめんミミ・・・」
「気にしない、気にしない。」
　ウミンとリック、グレルはスバル達に謝る。
「そうクク！先生、ソウラは見なかったクク？」
「会っていませんが、もしかして・・・」
「そうクク。ソウラの奴、また授業をサボってどこかに行っちゃったクク！」
　リックは妖精学校の先生に報告する。
「ソウラって？」
「はい。我が妖精学校の生徒の中でも成績上位なのですが、優秀すぎる余り、学校生活でも窮屈な思いをしているのか、授業に参加していなかったのです。」
　先生の話によると、ソウラという妖精はグレル、エンエンと同じ妖精学校の生徒で、その中でも成績トップの妖精だが、頭が良すぎる為、授業と受けた時には窮屈な思いをしており、授業中に居眠りしたり、学校からいなくなる事があるらしい。
　それでも、学校のテストには参加していたようだが、授業をサボる

事が多々あるそうだ。
「ホント、困った奴だよなぁ？」
「何、言ってるクク！グレル先輩だって影・・・」
「こら！皆まで言うなよ!!」
グレルはリックが言いかけようとしたところを口を塞ぐ。
「グレル君が何？」
「な、なんでもねぇよ！それよりソウラの事だろ!?」
スバルの反応にグレルは慌てて話を逸らそうとする。
「アタシがどうかしたの？」
グレルとリックの後ろから声が聞こえる。
振り向くと、フワフワしたピンクの体毛をした猫のような妖精がいた。
「ソウラ！」
「どこ行ってたのさ!?」
「散歩。退屈すぎるもん。」
ソウラと呼ばれたピンクの猫のような妖精は飄々とした態度で言う。
「何言ってるクク！自分だけ成績いいからって授業をサボる奴がどこにいるクク!?」
「アタシは好きでこの学校に入ったんじゃないの。アタシのママがここで勉強しなさいって言われたからここに来ただけ。」
「そんな事でどうするミミ！プリキュアの妖精になる為にも真面目に授業を受けるミミ！」
「そんな事言われても、授業が簡単すぎるもん。あくびが出ちゃう。」
ソウラはリックとウミンに説教されるが、あくびが出て知らんぷりし、立ち去っていく。
ティアナはそんなソウラの態度にカチンときて、説教しようとするが・・・
「あぁ、ちょい待ちや！」
ソウラはタルトに声を掛けられ、立ち止まってタルトの方に振り向く。

「ソウラやったか？近い内にプリキュアはん達を連れてくるけど、会おてみるか？」
「えっ?!」
「タ、タルトさん!?」
「それはいいアイデアにゃ！」
「ハ、ハミィさんまで!?」
　タルトの提案にハミィは楽しそうに賛成するが、妖精学校の先生はその提案に驚く。
「まぁまぁ、ええからワイに任しときぃ。」
　タルトは焦っている妖精学校の先生を宥める。
「プリキュアに・・・」
「プ、プリキュアを学校にクク!?」
「ほ、本当ミミ!?」
「本当ニャ。きっと楽しくなるニャ。ソウラはどうするニャ？」
「・・・構わないわ。プリキュア教科書を見たのと、実際会うのとは違うし。」
「ソウラ！」
「プリキュアに失礼ククク！」
「喧嘩はやめるニャ～！」
　ハミィはリックとウミンを宥める。
「よっしゃ、決定や！いっその事、プリキュアはん達をこの妖精学校に招待しよか！」
　タルトの提案に生徒達は大盛り上がり。
「タルト！真理奈達にも連絡するニャ！なのは達も一緒いるんニャし、最近プリキュアになったエクセル達もいい勉強になると思うニャ！」
「それええな！早速連絡するで！」
　タルトは風呂敷からスマホらしき道具を取り出す。

その頃・・・
「ふぅ～。やっと帰って来れたのはいいけど、妙なペットを連れて来たもんだわ。」
　真理奈達は旅行から帰り、開拓島・ノルンに到着した。
「なのははその・・・フリードだっけ？そいつの飼い主を捜しに行くのよね？」
「うん。情報は少ないから、まずはホープキングダムに行こうと思ってるの。ユーノ君と一緒に。」
「真理奈とミコトは期末テストに向けて宿題でしょ？」
「そうなの。セレナちゃんは一度Ｇ．Ｆに戻ってユグドラシルの件で報告するらしいわ。」
「ユグドラシルに操られた事、ユグドラシルの残党の拘束の事を報告しないといけません。」
　真理奈達は今後の予定を互いに話す。
「俺もその時の証人として顔を出すつもりだ。」
「証人って言ったら、アミティエとキリエ、フーカとリンネを除く全員がそうなんだけど・・・」
「まぁ、なぎさちゃんとほのかちゃんとひかりちゃんも期末テスト控えてるし、私もセレナの証言に合わせて色々お話しするわけだから。」
「でも、セレちゃんだけシンさんと一緒に行くなんて不公平だよ・・・」
「リンネ・・・」
「それを言うなら私もです。」
「アハハ・・・」
　リンネとミコトは不機嫌そうに言うと、フーカとエクセルは苦笑いする。
「誤解のないように言いますが、シンが同行するのは、空間の歪みから怪獣が出現する可能性を踏まえての事。後ろめたい事は考えておりませんので。」
「どうかな？」
「後付けに後ろめたい事は考えてないって聞くと絶対後ろめたい事を考えてるって思える気がしてならないわ。」

「へぇ～？そうですか？そのように言われると貴女方もそう思える気がしてなりませんけど？」
リンネ、ミコト、セレナは互いを睨み合う。
「なんなの、このしょうもない会話は・・・？」
真理奈はそんな３人に呆れる。
その時、真理奈のｉＰａｄから着信音がなった。
真理奈はｉＰａｄを取り出し、通信する。
『もしもし！真理奈はん、元気でっか？』
「タルトの旦那？どうしたの、私に通信して？」
通信の相手はタルトだった。
タルトからの通話によると、ハミィと一緒に妖精学校で特別講師をやっているそう。
その妖精学校で特別にプリキュア達を招待する事になったらしい。
加えて、キュアスピカことエクセルと、キュアネッシーことミコト、そしてキュアランスロットことセレナも妖精学校に来てほしいとの事。
エクセル達は変身してから期間が短い為、妖精学校の生徒達と一緒に授業を受けて貰う予定になっているそうだ。
『あ、それから、なのははんは近くにおるか？』
「え？いるけど？」
「私？」
『せや。空間の歪みに巻き込まれたっちゅう４人組がおってな。なのははんの知り合いらしいからなのははんも来てもらおう思たんや。』
タルトはスバル達の事を教えた。
なのははすぐに代わってほしいと言って、タルトのスマホをスバルに渡した。
通信越しで対面した時は、今のなのはとスバル達の姿に驚いていたが、兎に角お互い無事だと認識した。
「そうなの。リオちゃん達も。」
『でも、リオ達はＧ．Ｆに保護されたって聞いて安心しました。』
『フリードの事もありがとうございます。』

「見つけてよかった。」
　リオ達の事もフリードの事も無事であることに安心する。
「スバルさん！ティアナさん！エリオさんにキャロさん！お久しぶりです！エクセルです！」
『エクセル！元気にしてた？』
「はい！」
　エクセルとの再会に喜ぶスバル。
『でも驚いたよ。こんな可愛らしいぬいぐるみみたいな子達が妖精だなんて。』
『ぬいぐるみちゃうわ！ホンマにもう。兎に角、予定空いとったら連絡しといてぇや。ワイとハミィは妖精学校で待っとるから。』
「ちょ、ちょっと待って!?私とセレナは兎も角、ミコト達は期末テスト控えてるんだけど!?」
『大丈夫やて！テスト前のリフレッシュや思て来といてぇや！それにスピカはんもブラックはんやホワイトはん、ルミナスはん以外のプリキュアはん達はまだ会うてへんやろ？絶対ええ経験になるて。』
（それは確かにそうだけど・・・）
『ほな、スケジュール調整しとくから、後で連絡しといてぇや。』
　タルトはそう言って、通信を切ろうとすると、なのはがそれを止めて、なのはもタルトの提案について手伝うと言う。
　タルトは詳細をなのはに説明している中、エクセルはその様子を見て苦笑いする。
（もうなのはさんは・・・フェイトさんから聞いたけど、子供っぽい所があるなぁ・・・でも、妖精学校、プリキュアの妖精になる為に勉強する学校か・・・ルナも誘ってみようかな・・・他のプリキュアって事は、のどかとひかるとはな達も来るのかな？）
　エクセルは以前、キュアスピカになる前に出会ったＨＵＧっとプリキュア、スタートゥインクルプリキュア、ヒーリングっどプリキュアの事を思い出す。

恐るべき捕食者

メイジャーランドでオカリヤンを倒したゼロ。
その頃、妖精学校では生徒のソウラの気まぐれにグレル達は手を焼かれていた。
その時、タルトはスピカ達を含むプリキュア達を妖精学校に招待する事を提案した。
タルトはエクセル達に近日に妖精学校に来るよう連絡する。
その妖精学校でスバル達が無事であることをなのは達は知り、安堵した。
「G．Fに入りたいと?」
説明を遅れたが、なぎさ、ほのか達人間達が暮らしている人間の世界では『フェイスワールド』と名付け、メップルとミップル達妖精達が暮らしている妖精の世界では『フロントワールド』と名付けていた。
この二つの名前はイルマ財閥とそれに連なる財閥、パルミエ王国とトランプ共和国等の各国の代表が決めた名前である。
パルミエ王国や幻影帝国のように、侵略、破壊活動、国が大切にしていた物の強奪をきっかけに人間と妖精が関りを持ち、２つの世界と交流していた。
それを理由に『フェイスワールド』と『フロントワールド』名付けた。
フェイスとフロント、直訳するとどちらも『表』と言う意味があり、問題は生じ難くはある。
そして、G．F（ガーディアン・フォース）はフェイスワールドの一部の代表とフロントワールドの各国代表との話し合いで設立された妖精界平和維持機構である。
任務は主に魔獣討伐や人命救助等を行なっており、国境に囚われることなく、数々の精鋭達を集めて任務を実行している。
そのG．F本部に入隊を直訴する者がいた。
「私がしてきた事、許される事じゃない事は分かっています。でも、こんな私を受け入れてくれた人達、一緒に戦ってくれた人達を報いる為

に、私が持つプリキュアの力を使いたいんです。」
その人物は元ユグドラシルの一員、キュアイージスことマヤであった。
旅行から帰ってきた後、トランプ共和国の伝手でＧ・Ｆ本部に足を踏み入れたのだ。
そのマヤが話をしている相手は、紫の長い髪をした眼鏡の女性である。
その人物はレティ・ロウラン。
時空管理局本局運用部の提督である。
イリス逮捕の為、違法渡航対策本部長を務めている。
尚、マヤと話しているレティはミッドチルダにいるレティとは別人のようだ。
「確かにあなたのしてきた行為は許される事じゃないわ。でも、デニーズ・ポーカーの差し金とはいえ、フェイスワールドのプリキュア達と戦った事に関しては実力は申し分ないわね。あなたには平和を願い、その力を正しく使えるかしら？」
「私はもう間違えません。この力は大切な人達を守る為に使います。」
マヤはレティに自分の想いを伝える。
その時、レティの机に置いてある通信機から着信音が鳴り出す。
「失礼。」
レティは通信機を手に取り、通信する。
「はい。ロウランです。」
レティは通信の内容を聞くと、目を細める。
「はい。分かりました。」
レティは通信を切って、マヤの方に目を向ける。
「マヤさん。今から伝える任務を入隊試験とします。」
レティはマヤに入隊試験と称し、任務を伝える。

スカイランド、複数の浮島があちこちにある国であり、アンダーグ

帝国と和平を結んでいた。
この国の精鋭近衛部隊・青の護衛隊が守護しており、あるプリキュアがの護衛隊に入っている。
そのスカイランドに襲撃したのは、背中に翼のような形状をした被膜を有する、口器を持たない顔をした怪物である。
その怪物は、高次元捕食体・ボガール。
惑星アーブを滅ぼし、ウルトラマンヒカリが憎しみに駆られて、ハンターナイト・ツルギとなるきっかけを作った宇宙生物である。
サドラ、ツインテール、グドン等の怪獣を捕食し、ウルトラマンメビウスを捕食しようとしていた。
ボガールは光弾を放ち、王城を守っている結界を破ろうとしている。
「そこまでだ！」
ボガールは何者かに止められ、振り向くと、ウルトラマンタロウに似たコバルトブルーのプロテクターを身に付けた巨人と、筋肉質な体をした胸と額の星形の水晶を持つ巨人、そして、忍び装束を彷彿とさせる青い体の巨人が地上に下り立つ。
まず、タロウに似た巨人は、ウルトラマンタイガ。
ウルトラマンタロウの息子で、ウルトラの父とウルトラの母の孫であり、光の勇者の二つ名を持つウルトラ戦士である。
幾度とウルトラマントレギアと対峙しており、最後はニュージェネレーションヒーローズと共に、トレギアとの因縁に終止符を打った。
次に筋肉質の巨人は、ウルトラマンタイタス。
Ｕ―４０出身で、力の賢者の二つ名を持つウルトラ戦士である。
タイガと同様、ニュージェネレーションヒーローズと共にトレギアとの決着をつける。
最後に青い体の巨人は、ウルトラマンフーマ。
Ｏ―５０出身で、風の覇者の二つ名を持つウルトラ戦士である。
タイガとタイタスと同様に、ニュージェネレーションヒーローズと一緒にトレギアとの最終決戦に幕を閉じた。

「こいつがボガール、トレギアが闇に堕ちたきっかけを作った化け物か・・・」
「とんでもねぇ奴に遇っちまったもんだぜ！」
「だが、ボガールはメビウス殿とヒカリ長官に倒されたはず・・・」
タイガ達の目の前にいるボガールを見て疑問を浮かぶ。
確かにボガールはＧＵＹＳの作戦、並びにメビウスとツルギによって倒されたが、そのボガールが目の前にいる。
倒されたはずのボガールがこうして遭遇する事が驚きだった。
しかし、そんな事を考えている暇はなかった。
ボガールは両腕を被膜に収納し、無数の牙が並んだ口を広げる。
「来るぞ！」
タイガ達は向かってくるボガールに対し、身構える。
ボガールはタイガ達を捕食しようとするが、タイガ達はボガールの襲撃から逃れる。
タイガはこの瞬間を逃さず、背中にキックを入れる。
ボガールはタイガに蹴られた事に気付き、振り向いた直後に被膜の口を広げて襲い掛かる。
そこに、タイタスが割って入り、ボガールの口を素手で受け止め、横に受け流す。
更に、フーマが目にも止まらぬ速さで、ボガールの体にナイフで切るように手刀でダメージを与える。
ボガールは野球の球を投げる要領で光弾を放ち、反撃する。
「光波手裏剣！」
フーマは小型の手裏剣を飛ばし、ボガールの光弾を相殺する。
「プラニウムバスター！」
タイタスは緑色の光球を出し、パンチでその光球を殴り飛ばす。
その光球がボガールの肩に掠るが、ダメージは大きかった。
「ストリウムブラスター！」
タイガは止めにタロウの光線技とよく似た光線を放つ。
しかし、ボガールは危険を察知したのか、両眼を光らせると、姿を消す。

よって、タイガの技は不発に終わった。
「逃げられたか・・・」
「あと一歩だってのによ・・・」
「あいつを放っといたら大変な事になるぞ・・・」
タイガ達はボガールが逃げられた事に口惜しむ。
タイガ達はボガールを捜す為に飛び上がる。

次の日・・・
「なるほど?フロントワールドでの活動を一旦取り下げる代わりにフェイスワールドで空間の歪みの原因を突き止めるよう命じられたわけね?」
ユグドラシルの報告を終えたエクセルは、開拓島・ノルンのログハウスでセレナの今後についての事を真理奈に話した。
セレナはバラージ王国の調査に乗り込んだものの、逆にユグドラシルに捕らえられた事で任務は失敗。
ユグドラシルに操られたセレナを真理奈達に指し向けるが、ゼロとスピカ達によって阻止し、セレナを救い出す。
操られていた事とはいえ、セレナの行為は殺人未遂、ゼロがいなければ真理奈達が危なかった。
しかし、トランプ共和国で起きたユグドラシル事件の時、セレナも協力したので、セレナの罪は軽くなった。
加えて、サーゲイト国で起きた魔獣襲撃の防衛やアーシア山で起きた九尾の狐事件の解決によって、名誉挽回のチャンスを作った。
尚、フロントワールドでの魔獣討伐及び人命救助の任は解かれ、代わりにフェイスワールドで空間の歪みの原因の調査任務に就くことになった。
「えぇ。エディスさんって人にね。自分に何が足りなかったのか、この目で確かめて来なさいって。」
「よくクビにならなかったわね・・・」

真理奈はセレナの今後に支障はない事に安心した。
「それと、エディスさんがこんな事を・・・」
エクセルはG・F本部にいた時の事を思い出す。
～～～～～回想～～～～～
「セレナの事、ありがとね。」
銀髪のロングヘアーで流した銀色の鎧の女性・エディス。
セレナの先輩にあたるG・Fの戦士。
セレナとシンさんがユグドラシルに関する報告をしてる間、エディスさんに声を掛けられたの。
少しお喋りしたけど、セレナの事、相当可愛がってるみたいだった。
「あの子、自分の故郷を失ってたの。その時に残ってたのは復讐心だけだった。私が何とか更生したけどね。」
「そうだったんですか・・・」
エディスさんからセレナの過去を聞いてね、ミッドチルダでそういう事情を持ってる人が数え切れないほどいるから、よく分かるのよ。
「あの子の今後の事だけど、フロントワールドでの活動はお休み、その代わり、フェイスワールドでお世話になると思う。その時はセレナの事、頼んだわよ。あの子は私にとって妹みたいなもんだから。」
「・・・分かりました。任せてください。」
「そ・れ・と!」
「へ?」
「後でシンに伝えてね?セレナを傷つけた責任は取って貰うからね～って♪」
エディスさんにセレナを頼むって言われて、勿論承諾したけど、最後に捨て台詞言った後、仕事に戻ったのよね・・・
～～～～～回想終了～～～～～
「どんだけ溺愛してんのよ・・・」
真理奈はエクセルの話を聞いて、エディスの捨て台詞に溜息を吐く。
心の中でエディスの事を引いていた。
「まぁ、それだけセレナの事心配してるようだし・・・」

「だからって過保護すぎんだろ・・・」
　エクセルはエディスの言葉を思い出し、苦笑いする。
「それで？そのシン兄さんは？」
「当たり前のように『セレナも俺達の大切な仲間だ！次は傷つけさせやしねぇぜ！』って・・・」
「シン兄さんらしいわ・・・」
　真理奈はシンの返事を聞いて呆れる。
「それと、セレナがフロントで活動するわけだから、まずは常識を教えておかないとね。」
「まぁ、それはアンタとミコトに任せるわ。」
「軽っ・・・」
　エクセルは真理奈の無責任な発言にツッコむ。
「仕方ないでしょ？セレナは今、アンタとミコトと一緒にウィンヒルで手伝ってんだから。」
　真理奈の言う通り、エクセル、ミコト、セレナは住み込みで珈琲店ウィンヒルの手伝いをしていた為、セレナに常識を教える事ができるのは、エクセルとミコトしかいないのだ。
「あ、思い出した。妖精学校の件、あの子も誘うの？」
「えぇ。これから誘うんだけどね。」

　その夜、妖精学校の学生寮でグレル、エンエン、ウミン、リックは次の日にプリキュア達が来る事に楽しみにしていた。
　そんな中、ソウラは部屋から出て行くようにドアを開けて出て行く。
　ソウラが向かったのは、妖精の滝である。
　その近くの岩場に着くと、ソウラはその岩場に覗き込む。
「チビ、お待たせ。ごはん、持ってきたわ。」
　ソウラがそう言うと、岩場の隙間からソウラより体の小さい青と白

の体毛をした生物が現れた。
ソウラはその生物の事をチビと呼んでいる。
ソウラはその生物にパンを差し出して食べさせる。
「私だってこの子みたいに小さな命を助けれるもん。」
ソウラはチビを見てそう呟く。
ソウラがチビと会ったのは、３日前である。
ちょうど同じ場所で出会ったのだ。
そこにボガールが現れ、チビを食べようと歩み出した。
ソウラはチビを助け、遠くへ逃げ出した。
その時、ボガールの前にメビウスが介入し、ボガールと戦った。
結果、ボガールはテレポートで逃げ出し、ソウラとチビは無事だった。
「早くプリキュアになりたいな・・・」
ソウラは夜空に見上げてそう言う。
しかし、ソウラは気付かなかった。
ソウラのすぐ近くに危機が迫っている事を・・・